
戦国乱世

坂田銀時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国乱世

【Nコード】

N2588M

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

時は戦国時代、各地の武将らが己のため天下を握ろうと日の本全体が争っていた時代。そんな時、一人の浪人が中国地方の大名毛利輝元のところに現れた。銀魂&戦国BASARAのコラボ作品です。

戦国乱世

時は戦国時代、各地の武将らが争っていた時代。それが、戦国時代である。そして、ある一人の浪人が、毛利家に仕官しにやってきた。

「殿〜！」

「どうしたなにごとじゃ」

「今、門の前にて浪人が仕官してくれと大きな声で叫んでいるんです」

「そうか、よしその浪人連れてまいれ」

「は〜！」

そう家臣に命じた。何のためらいもなく。そして、その数分後

「殿、連れて参りました」

「よしすぐ行く」

そう家臣に言いました。

そして、その浪人と面会するときが着ました。今後の毛利家の歴史を変えることとなると誰も思っていないませんでした。

「表をあげい」

その浪人は顔をあげました。

「わしが、毛利輝元じゃ。お前の名はなんとゆうのじゃ」

「坂田銀時」

と名乗りました。年齢は、10〜20代くらいの若者で、髪の色は、銀色で髪型は天然パーマ、その目は、死んだ魚の目をしていて。だが、その視線は、まっすぐな視線だった。

「ほ〜坂田銀時かい名だな。銀時、お前は、どこの国の出身じゃ」
そう銀時に聞くと銀時は

「俺は、尾張の国だ」

「尾張、たしかあこは、織田信長の領地だったな。なぜ、織田に仕えなかったんだ」

すると、銀時の顔が変わった。

「俺は、あのくそやろに家族や仲間を殺されたんだ。だから、俺は、あんなくその織田には仕えたくない　んだ。だから俺は、敵対しているあんたのところに来たんだ。」

そう銀時の過去を知った輝元は

「よかるう、銀時お前をわしの家臣にしよう」

そういった。銀時は、驚いた。まさか簡単にそうゆこといわれたからすごく驚いている。そして、輝元が

突然、自分の愛刀と家臣から借りた刀をもって、銀時の前に来た。

そして、その愛刀を銀時に渡し、突然と家臣から借りた刀で斬りかかってきた。銀時もまさか突然と斬りにくるとは、思っていなかったが、銀時は、それを、輝元の愛刀で守った。そして

「危ないじゃねーか。」

といった。そして、輝元が

「剣を抜け、てめの本気を見てみたいんだよ。」

そう輝元がいゆと、銀時は刀をさやから抜きとり戦闘の構えをした。

「そしていい」

そうゆと、輝元は銀時に斬りかかった。そして、銀時の体を切ったと思った瞬間、そこには、銀時はいなかった。そう銀時は、その一瞬でよけていた。

「馬鹿な。どこいった。」

そういつていたら、銀時は輝元のすぐ横にいた。そして「斬られる」と輝元が思った瞬間、カキンとゆう大きな音がした。そして、輝元の刀が、折れていた。その場にいた、家臣一同驚いた。まさか、刀が真っ二つになるとは誰も思っていなかったからだ。もちろん、割られた刀を持っていた輝元自身も驚いていた。そして、銀時が

「はい、ここまで」

そゆと、刀をさやにしまい、その場を立ち去ろうとした。

「ちよっと待て、お前、情けでもかけたのか。」

そう輝元が、銀時に聞くと

「情けだゝんなもんご飯とかにかけるは。俺は、俺の武士道を守っただけだ。」

そう輝元にいった。

「自分の武士道か いいだろう、坂田銀時これからは、わが毛利家のために戦ってほしい」

そう銀時にいった。銀時は、後ろを向いて

「さすが、毛利輝元だ」

といって、輝元と握手した。そしてその場にいた、毛利家家臣もそれを認めた。そしてこれから、銀時の戦いが始まった。

戦国乱世（後書き）

はじめまして、坂田銀時です。今回、はじめて小説を書きました。初めてなので、間違えている文字などあったらすいません。そして、歴史ファン、銀魂ファン、銀さんファンどうもすいませんでした。この小説は、縦書きで読んだほうが読みやすいと思います。

今後の小説に出る大名は、伊達政宗、浅井長政、織田信長、上杉謙信、長曾我部元親、島津義久、石田三成、明智光秀、武田信玄、北条氏政、豊臣秀吉などが登場する予定です。

（今後、別の武将が登場するのでよろしく願います。）
感想とかよろしく願います。

住居

毛利家に仕官された、坂田銀時は輝元が教えた誰も住んでいない屋敷をくれ銀時は、すぐその屋敷に向かった。

「まさか、本当に毛利家に仕えるとは、思わなかった。しかし、どんな屋敷なんだろう？ま どうせおん ぼろな古いなんか妖怪とかが出るなんだろうな」

そう思いながら、銀時は屋敷に向かった。そう思いながら歩き続けること数分ようやく屋敷に着いた。屋敷を見た瞬間、銀時は

「お 結構いい屋敷じゃん。」

といいながら、屋敷の中に入っていた。屋敷の中は、結構きれいだった。家具もあるし、しかもなぜか掃除されていたように思えた。それほどきれいだったのだ。そう銀時が思っていたら。

「あのくどちらさまですか？」

突然と声が聞こえた。銀時は、自分が持っていた木刀を腰から抜きながら後ろをむくと、一人のおばあさんがいた。そして銀時が

「あんだ、だれ」

そう銀時が、聞くと

「私は、この屋敷を管理しているものなんだがね」

そう、おばあさん答えた。そして

「そゆうあんたは、だれだね。この辺じゃ、見かけない顔だね」
「そうおばあさんが、たずねてきた。」

「俺は、今日毛利家に仕官してもらってきたんだ。それで、輝元がこの屋敷だったら住んでもいいって言 ったからきたんだ」

銀時が、答えるとおばあさんが

「そうかい、毛利様がね」だったらすきに住んでくれや。そのほうが、屋敷も喜ぶだろう。なにせ、ずっと誰も住んでいなかったからね」やっと、主人が決まってよかったね」

そうゆうと、おばあさんがいゆうとおばあさんは、その場から、

姿を消すように帰っていった。しかし、後ろを向いて

「そういえば、あんたの名前聞いていなかったねなんていゆんだい」

「坂田銀時」

そう、銀時がおばあさんの質問に答えると

「坂田銀時いい名だね。その名前大事にすんだよ」

そういいながらおばあさんは、去った。なにかさみそうな感じもしたが、銀時は何もゆわず屋敷に入った。そして、お湯を沸いて風呂にためて風呂に入った。そしてすぐねた。

翌日、銀時は城下町に向かった。食料の調達にやってきたのだ。

そして、食料を買って町から出ようと思ったたら、なにやら行商人らがそこそ話していたから。銀時は、その行商人たちに

「よゝどしたなんかあったのか」

そうたずねると、行商人は

「いやゝなんか町外れにある屋敷があるだろう。なんか最近、あの屋敷がどこぞかの山賊が狙っている ていゆ噂があるんだよ」

噂に出た、屋敷とは銀時がすんでいる屋敷だった。銀時は、急いで屋敷に帰った。そうして、屋敷に戻ると山賊らが、屋敷の中に侵入しようとしていた。しかしその前には、おばあさんがいた。おばあさんが屋敷の門の前で山賊らに

「屋敷の中には、指一本はいらせはしないよ」

そう、山賊らに言ったら

「どけ、くそババア俺らは、この屋敷がほしいんだ。だれも、住んでじゃいねんだろ。そこをどけ死に てのか」

そうゆくと、山賊らはおばあさんに刀で斬ろうとした瞬間

「おいおい、ばあさん相手に人多いんじゃないか」

「銀さん」

おばさんの前には、銀時がいたのだ。そう銀時は、すばやく腰に挿した木刀でおばあさんを守ったの。そして

「おいてえめら、何人んち入ろうとしてんだ。ここは、毛利輝元は家臣、坂田銀時の屋敷だこの野郎！」

「毛利だ。んなも知るかいけあいつの首を取れ」

そう、山賊の頭が子分たちに命令すると子分たちは一斉に斬りかかってきた。

「銀さん」

「心配すんな。大丈夫だ。」

そうおばあさんに言ったら、銀時は一人で山賊らに戦いを挑んだ。銀時は、まるで人ではない動きだった。あつとゆうまに、全員倒した。

「たくゝ雑魚が多かったな」

「銀さん」

後ろ向くと

「銀さんありがとう」

と感謝の声をかけてくれた。

「俺は、ただ自分地守っただけだ。」

そゆうと銀時は、屋敷に戻った。そして、おばあさんに

「おい、ばあさんあんた旦那はいるのか」

そうおばあさんに聞くと

「ずいぶん前に、戦で死んださ。」

「そつか、わかった、んじゃ俺があんたの旦那代わりに守ってやる。どうせ老い先短いだから俺が、あんたを守ってやるよ。いろいろ借りもあるしさ。」

おばあさんは、うれしそうに銀時が作ったご飯を食べた。

そして銀時は、風呂に入って、寝た。・・・

住居（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。
感想とかよろしくお願いします。

初陣

山賊を倒してから数日後、銀時は輝元に呼ばれて城へと向かっていた。銀時は、「なんだろうな」と思いながら城へと向かった。

そして銀時が、城について天守閣に向かった。輝元はいつもそこから城下町を見ていたから銀時は、天守閣へ行った。そして、天守閣に着くと、そこには、甲冑を着た輝元の姿があった。そして銀時に「まっとなぞ。早くしたたく仕度しろ出陣するぞ」

銀時は、驚いた。輝元に会うなりそんなことをいわれたから驚いていたのであった。銀時は輝元に

「出陣で、どこに行くのだよ」

銀時の問いに輝元は

「下関だ。あこで島津のやつらが暴れまくっているとゆう報告があったからその、島津軍の討伐に出陣

するのだよ。」

「あゝそうなのかい」

輝元の答えを聞いた銀時は、すぐに仕度をしだした。尾張から持参してきた鎧をつけて、そして自慢の自分の愛刀を腰にさして、準備ができると輝元に

「できたぞ、さっさとやりに行こうぜ」

そう輝元にゆくと、輝元を連れ天守閣の外に出た。

毛利軍6000人対して島津軍7000人兵の数からは負けているけど、これは仕方がないことであった。

そうして、毛利軍は長府に本陣を構えた。そしてすぐに軍議が始まり毛利軍の軍師が輝元に

「殿。これが現在の情勢です。敵総大将島津義弘葉、ここ巖流島に本陣を構えています。私としては、海と陸とで挟み内にしようございます。別働隊は、海のほうから巖流島に、いっぽう本隊は、陸がは上陸している島津軍を撃破しながら、巖流島に向かって進軍

してほしいと思っています。」

そう軍師が輝元に進言すると輝元はそれを承諾しその作戦が決行された。

輝元率いる陸上のほうから進軍して軍の中に銀時の姿があった。

銀時は、上陸している島津軍と戦っていた。銀時は、次々と島津軍の兵士を斬っていた。輝元は、その銀時の姿を見て

「あれが、銀時。まるで鬼のよなやつだな」

そう思いながら本陣で次の作戦を考えていた。それでも銀時は、敵の兵士をきつていくその中にはたまに敵の武将がいたが銀時は、あつとゆうまに倒していった。そしていると敵軍の兵士が

「だめだ。もうもたねー全軍巖流島に退却！」

そう命令されると島津軍は、巖流島に退化していった。そしてすぐに、毛利軍はその後を追った。そして巖流島につくいとすぐに、毛利軍は上陸し島津軍と戦った。その中にも銀時の姿があった。もちろん銀時は次々と敵兵を斬っていた。そして銀時は、島津軍本陣へと向かった。そして本陣に着くとすぐ大将を探しそして見つけない

「てめが大将か。悪いがあんたの首とらせてもらっぞ。」

「いやじゃ、わしの首がほしかったらわしを倒してからとれ」

そう銀時にいゆつと銀時は

「わかったよ。それじゃーあんたの首とらせてもらっよ」

そうゆつと銀時は人間とは思えない早業で義弘を斬った。そして、義弘は倒れ銀時に

「おめは、いつたいだれだ」

そう銀時に問うと

「毛利家家臣坂田銀時。」

そう義弘の問いに答えると

「お前は何のために刀を振るのだ」

「俺はたった。毛利の民を守っただけだ。この剣が届く範囲は、俺たち毛利の国だ。それお犯すやつは

誰であろうと俺がぶった切る。」

そう義弘にゆうともう義弘もう死んでいた。そして銀時は、義弘に一礼し首をとった。戦に勝利しそしてはじめて毛利家に仕官されて始めて戦に勝った。しかしこの戦は、まだ小さい戦だった。：

初陣（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回で第3部となります。感想とかよろしくお願いします。

次回の掲載は、数日後になると思います。

鳥取城攻防戦

下関の島津軍を討伐してから、数週間後輝元と銀時が将棋をしていたときとんでもない知らせが来た。

「殿、一大事です。」

「どうした、なんかあったのか？」

「は、山名・織田連合軍が鳥取城に向けて進軍しているとのことです。」

「なに、それはまことか。」

それは、とんでもない知らせであつた。しかし、銀時は輝元に

「おいおい、城一つ落城したくらいでどうしてそんなに騒がなきゃいけないんだ。」

そう、輝元に問うと輝元は

「それはなじや、鳥取が織田軍の進軍を食い止める最後の城なんじや。もし、鳥取城が落城したらわが毛利の領土にいつきに織田の軍がなだれこむ。そうしたら、毛利は、滅亡だ。」

そう銀時の質問に答えると輝元はすぐに軍を構えて、鳥取に出陣した。総勢10000とゆう軍を引き連れて鳥取にむかった。その中には銀時の姿もあつた。

そして、鳥取につくと城は完全に織田・山名連合軍に包囲されていた。あり一匹も入る隙間もなく包囲していた。そしてすぐに、毛利軍は城を一望できるとこに本陣を構えた。そして休む暇なく、軍議が始まった。

「殿、これが現在の情勢です。この戦、敵総大将山名豊国と織田信孝を倒せたら我らの勝ち。敵本陣はここ、城を一望できる丘に構えています。そして敵軍の数はおよそ12000だと思われます。」

そう、現在の情勢を聞くと軍師が

「この戦、まず城を囲んでいる軍をたたいて城を救援するのが、得策だと考えます。それから敵本陣を

攻撃するのが得策です。」

そう軍師の策を聞くと輝元は、深くうなずき

「よし、今回の戦も二手に分ける、まず小早川・吉川らは城の救援に向かつてください、その他のものは、敵本陣に奇襲をかける。」
こうして作戦が決まるとすぐ実戦された。

雨がいかにも降りそうな天気の中戦いが始まった。まずは、小早川・吉川らが率いる軍が城を囲んでいた敵軍と戦っていた。毛利軍は次々と織田・山名連合軍を破っていた。一方、敵軍本陣に奇襲を掛ける本隊も戦っていた、その中には銀時の姿もあった。銀時は次々と来る敵軍の兵士を斬っていた。それは、まるで鬼だった。敵軍の武将が「夜叉だ、白夜叉だ」といいながら斬られていった。「どけどけ、雑魚にはようはねーだよ」そういいながら敵本陣に向かっていった。そうしていると城を救援しに行った部隊から

「申し上げます、城を包囲していた軍勢をすべて撃破しました。これより本隊に合流して敵本陣を落としますとのことです。」

「わかったと、伝えてくれ」

そうして、救援部隊が本隊と合流して戦っていたとき、銀時は敵本陣にいた。

「どこだ！ででこい貴族やろうが」

「ここにいるは、それがしが山名豊国だ。」

「ほう、あんたが総大将か、もう一人はどうした？」

「信孝殿はとうの昔にから軍を撤退した、わしが殿を務めたからの残念だったの。」

「あ、そうなんだ、それじゃああんたの首だけでも取らせてもらうよ。」

そうゆくと銀時は、すばやく豊国に斬りかかった。しかし豊国も負けてわおらずささず腰に挿していた刀を抜いて銀と機の攻撃に對抗した。

「やるじゃねか、貴族でもやれるやつはいるんだ。」

「あたりまえだ、わしもいちよう大名なんだぞ。」

「あんた見たいのが大名」冗談じゃない、俺だったらさっさとあんた領内からむけだしているね。」

そういったあと銀時は、豊国の攻撃を防ぎながら斬り続けた、そして、相手が一瞬気を抜いた瞬間一気に豊国をばさつと斬った。

「もしあんたが毛利にいたら友になっていたのに。」

そういった後、銀時は豊国の首を取った。なんとか毛利の危機はさつてさらに山名の領土も手に入れた。こうして鳥取城を守りながら、領地も少し増えた。毛利にとっては良いことであったが、しかし、織田から見れば毛利との全面戦争もよりいっそう強くなった

鳥取城攻防戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回で4部作になります。そしてこの小説を読んでくれてありがとうございます。感想とかよろしく願います。

次回作は、週末になると思います。

奇襲「上」

織田・山名連合軍を破ってから、数カ月後銀時は自分の屋敷でんびりと暮らしていた。そして、あるに日の昼、銀時が昼寝をしていたら一人の毛利家の家臣がやってきた

「銀時殿、輝元様が呼んでいたぞ。」

「ほんとか、わかったすぐいく。」

そう、銀時がその家臣にいうと銀時はすぐに仕度をして輝元の居城に向かった。

そうして、銀時が城につくとなぜか城の周りにはいつも以上に兵がいた。銀時は、疑問に思いながら、輝元がいつもいる天守閣に向かった。そうして、天守閣に着くと甲冑を着た輝元の姿があった。

そして銀時に

「やっと来たか、早く仕度しろ出陣するぞ！」

「へー出陣ですか、それで今度はどこに行くんだ？」

そう、銀時が輝元に質問すると輝元は銀時の方を見て

「近江の浅井が、わが毛利領に向けて進軍しているとゆう知らせがあった。」

「近江の浅井って、あの浅井長政か、なんでその浅井軍が毛利領に兵を進めているんだよ。」

銀時は、驚いた。まさか毛利とは関係ない浅井軍が兵を進めているとまったく思っていなかったからであつた、そして輝元は銀時の質問に

「おそらく、織田が命令したのであろう。織田と浅井は以前から同盟していたから、織田が我らと戦う前に浅井に毛利軍の兵力を減らせとか命令したのであろう。」

輝元は、銀時の問いにすらすらと答えた。輝元は、知将だったからすぐに検討はついた。そして輝元は軍を整えて浅井軍のそこへ向かった。

毛利軍は、姫路に布陣した。浅井軍はそれに対抗するように陣を構えた。そして毛利軍は軍議を始めた。

「これより、軍議を始める。敵の情報つかめたか？」

「殿、これが現在の情勢です。この戦、敵総大将浅井長政を倒せば我らの勝ちです。敵本陣は市川の向こう側にしています。」

そう報告すると軍師がすかさず

「この戦、一気に川を渡る以外ありません。」

「そうか、仕方がない。全軍浅井軍に突撃だ！」

そう、輝元が命令すると一斉に毛利軍は浅井軍に斬りかかった、その中には銀時の姿もあった。銀時はさっそうと浅井軍に挑んだ。

「うお、そこをどけ、てめらにはようはないんだよ！」

銀時は、浅井軍の兵士たちを次々と斬っていた。銀時の目はいつも目ではなかった、いつもは死んだ魚みたいな目をしているのにかし、銀時の目はまるで獣の目をしていて。そして、銀時は敵本陣近くまで行っていた。しかし今宿のほうから毛利軍ではないほら貝の音色がした。それは、浅井軍の音色ではなかった。そして、その軍が現れたそれは西国からかなり離れた奥州の独眼竜伊達政宗率いる奥州伊達軍だった。その場にいた、人は驚いたまさかこの西国からかなり離れている奥州の伊達軍がこんな場所に現れるとは思っていなかったからである。そして、伊達軍が乱入してきたのであった。そして、伊達政宗が兵士たちに

「派手に楽しめよ！祭りの始まりだ。」

伊達政宗は、兵士たちにそうゆくと家臣の片倉小十郎が兵士たちに

「おめーら！伊達軍の恥になんねえように戦えよ！」

伊達軍の兵士は「筆頭！」、「片倉様！」といいながら、合戦になだれ込んできた。銀時は、すぐに毛利軍本陣に向かった。そのころ、本陣では、大変な混乱状態になっていた。伊達軍と浅井軍にはさまれていた、輝元自身も自ら刀を振り回していた。毛利軍の最大の危機が迫っていた。…

奇襲「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回は、上と下に分かれています。理由は、戦国BASARA弐が放送されることになったから、今回の放送を祝して上と下に分かれることにしました。まゝはつきりと言うと、そろそろ上と下に分けてもいいかな〜と思ったからです。（笑）

さて、次回の投稿は週末になると思います。感想とかよろしく願います。

奇襲「下」

「輝元〜！」そう叫びながら銀時は、毛利軍本陣へ向かった。本陣では奥州の伊達軍と浅井軍が襲いかかっていた。

奥州伊達軍は、「盗んだ軍馬で走り出す」とゆうように、荒れたものだらけの軍だった。しかし、いざ戦いとなると一変しものすごい強さで相手の軍を脅かしていた。そしてその伊達軍総帥は、奥州筆頭伊達政宗であった。政宗は、奥州をわずか一ヶ月で統一し「奥州筆頭」「独眼流」と呼ばれていた。そして彼の特徴といえば、彼の腰にさしてた刀であった。普通は、一本しか持たない刀を彼は、左右3本ずつつまりは、6本の刀を腰にさしてたのであった。そして、合戦で刀の数を变えて敵を斬っていたのであった。そして伊達軍の特徴は、度々遠征をしていることであつた。伊達軍は奥州周辺の安全が確保したら、奥州からかなり離れた場所まで戦いをいどみにいくのであつた。しかしこれも政宗の性格で、彼は、喧嘩が大好きであつたためこうして、戦がなかったら遠征をして敵を探してその敵に戦いを挑んでいたのであつた。そして、今回伊達軍が見つけたのは、浅井軍と毛利軍であつた。伊達軍は、乱入が大好きだったためすぐ伊達軍は浅井軍と毛利軍との戦いに乱入し現在の状態になつていたのであつた。

銀時は、次々と伊達・浅井軍の兵士を斬っていた。「どけ〜！」と叫びながら、本陣へと向かった。

そして銀時が伊達軍の兵士を斬つて本陣のほうを向こうとした瞬間横から毛利軍の兵士が「伊達政宗だ！」そう叫びながら、血を出しながら地に倒れた。そいつを斬つたのは、兜に三日月の形をした兜をかぶつてそしてその腰には6本の刀がさしていた。そう彼こそが、奥州筆頭伊達政宗であつた。そして銀時は、政宗に

「てめえが、独眼流か。」

「HAそうだ、それがどうした銀髪パーマが。」

そう政宗が、銀時の質問に答えると銀時は政宗に

「へーあんたが、独眼流かどうりで強いと思っただぜ、ささっとその首とらせてもらうぜ！」

「上等！竜の鱗一枚でも剥がしとってみろよ。」

そう政宗が銀時にゆくと銀時は、目を変えて政宗に斬りかかった。

それと同時に政宗も銀時に切りかかった。お互い本気で戦った、そしてついに政宗は、6本の刀を使い出すと銀時は

「やっと、竜の登場か。」

そう政宗にいい、政宗に斬りかかった。政宗と戦っていると毛利軍は余儀なく撤退を開始しだした。それを見た銀時は

「独眼流、この喧嘩次にやろうぜ。」

そう政宗にゆくと銀時は、近くにいた馬にまたがり毛利軍の後を追った。政宗は銀時に

「あんた名は？」

「坂田銀時だ」

「坂田銀時覚えとくぜ」

そうばやいて、政宗は愛馬にまたがり浅井軍本陣に向かった。こうして毛利軍はその場を後にし安芸に向かった。

「輝元、負けちまったな。」

「しょうがない、まさか伊達軍が乱入してくるとは思わなかったかな。」

そう銀時と輝元が話しながら城へと入っていった。銀時は、毛利家に仕官してからはじめて負けた戦だった。だが、銀時は独眼流伊達政宗とゆうライバルを見つけた戦だった。．．．．

奇襲「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。今回の作品を読んでくれてありがとうございます。次回は、来週の末になると思います。感想とかよろしくお願いします。

危機

毛利軍が浅井軍・伊達軍に敗北し本拠地に撤退していたとき、輝元の耳にとんでもない知らせが届いた。

「なんじゃとそれはまことか。」

「どうした輝元、伊達軍か浅井軍が追撃してきたか？」

そう銀時が輝元に問うと輝元は、銀時に

「今、知らせがあつて。織田の軍勢が我らの毛利領に向けて進軍を開始したそうだ。」

「ほんとかよ、とうとう織田との全面戦争が始まるんだな。」

「そうだそして」

「ん？まだあるのか？」

そう銀時が輝元に聞くと

「そして、四国の長曾我部の軍が岡山付近に現れたそうだ。そして、岡山上陸して城を完全包囲して いるとゆうことだ。」

銀時は、驚いた織田軍の進軍のほかに長年にわたって対立していた西海の鬼こと長曾我部元親が突如として、毛利領に進軍したのであった。輝元はどうしていいかわからない状況だった。織田軍と対決するなら、一度体制を整えて織田軍と対決するのだがこの場合長曾我部の軍が毛利領を占領してしまう恐れがあつた、このまま長曾我部の軍を討伐して城に戻って織田と対決するとゆうことであつたが、この場合もし、長曾我部軍を討伐しても織田軍がその間に毛利領に進軍して毛利軍の敗北が決まってしまう。輝元は、その場に止まり、臨時に軍議を開いた。家臣たちに今の状況を言い軍議が始まった。

「これより軍議を始める、今の状況について皆わかつたと思う。そこで、今我々がやらなければならぬことを決めなくてはならないそこで皆に問うこれから我々はどうしたらいいと思う。」

そう輝元が家臣に問うと毛利軍軍師が

「ここは、二手に分けるのが良いと考えます。本隊はこのまま城に

それでも一方の軍は岡山にいき長曾 我部軍を討伐したいと思う。

「しかしそれでは、もし別働隊が敗北したらどうするんですか。あの西海の鬼がいるんですよ我々では

齒が立たないと思います。輝元様自から出て行かないと負けてしまいます。」

「なら、どうしろてゆうんだ。このまま負けてもいいのか。」

そう軍師がゆうとその場にいた毛利家臣が黙り込んで一人の足輕が来てある知らせを持ってきた。

「もしあげます。現在長曾我部軍と伊達軍が現在交戦中とこのことでございます。」

とんでもない知らせであつた、あの奥州の独眼竜伊達政宗が長曾我部元親と戦っていたのであつた。あの独眼竜がなぜと銀時が不思議に思っていると輝元が

「よし、一度退却して体制を整えるぞ。」

「は！」

そう輝元がゆうと家臣らは、馬にまたがり城に向けて馬を走らせた。銀時も馬にまたがり馬を走らせながら城へと退却した。毛利軍の最大の危機は伊達軍の働きで何とか収まった、銀時は政宗に感謝しながら城へと向かった。

危機（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回お読みくださってありがとうございます。今回の投稿は週末を予定していたんですが、土日陸上の大会があつて書けそうでなかったんで今回早めに書きました。今回は本当にすいませんでした。次回の投稿は、ちょっとわかりません。今回はすいませんでした。

大遠征

伊達軍が長曾我部軍を破って数日後、伊達軍は奥州へと引き上げた。そして、伊達軍のおかげで何とか毛利領に進軍してきた織田軍を破ることに成功したのであった。そして毛利軍の危機が過ぎていった。そして毛利輝元は、城に家臣を全員城へと呼んだ。もちろん銀時も呼ばれていた。そして、銀時が城の天守閣に着くと全員集まっていた。皆雑談をしていた銀時は開いている席を見つけるとそこに座った、座った瞬間輝元が入ってきた。そして家臣は話をやめた。静かになったところで輝元が家臣に突然

「これより、我ら毛利軍は遠征に行く。」

家臣はそれを聞き驚いた。もちろん銀時も驚いた、そして輝元が

「それで今回、遠征する場所なんだが織田領の尾張に遠征する。」

輝元が、遠征場所を言うと家臣が「なぜ、尾張なんですか。」と輝元に問うと

「理由は、尾張に存在す反織田勢力の救援および合流するためじゃ、つい最近、その反織田勢力から書状が届いて救援および毛利軍に合流させてほしいと申してきよったのじゃ、私はそれを受け入れるために」

尾張に遠征するのじゃ。」

そう、輝元が淡々と理由を答えてそして

「そこで今回、こたびの遠征は約7000人規模の軍で尾張に向かいたい、そこで今回私が勝手に遠征に参加するものこのまま毛利領にとどまり領土を守る守備武将を決めた。いまより遠征参加武将を発表する。」

そう輝元が言うと輝元は、次々と遠征参加武将を発表していった。もちろん輝元の側近でもあった銀時も参加していた。そして輝元が遠征をする家臣を全員発表し終わると輝元が

「以上のものが遠征に参加するものじゃ遠征は明後日に出発する、

十分に準備しておけそれでは解散。」

そう輝元が言っていると輝元は、その場を去ったそして家臣たちも自分の屋敷に帰った。もちろん銀時も町外れの自分の屋敷に帰っていた。そしてそれから明後日後とうとう安芸の国をたち織田領の尾張に遠征する日がやってきた。そして銀時は屋敷で鎧を着て自分の愛馬にまたがり厳島に向かった。そして厳島に着くとそこにはもう家臣たちがいて参拝していたもちろん銀時も参拝した。そして

「皆のものこれより織田領の尾張に行く、そうとうな長旅になるから覚悟しておけ。」

「おお！」

そう輝元が言っていると輝元は馬にまたがり尾張に向けて出陣した。銀時も馬に乗っかって出陣した。

大遠征（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回投稿が、遅れましたすみません。
次回の投稿は、週末になります。

合流「上」

毛利軍が安芸の国を出陣してから約3週間後、毛利軍は美濃の国にいた。

「やつと、美濃の国に入ったな、銀時。」

「あゝやつと美濃の国か、あとちよつとで尾張だな。」

そう銀時と輝元が、飯を食いながら雑談していた。

「そういえば銀時、お前確か尾張の国出身じゃなかった？」

「あゝそうだ、俺は尾張の国の出身者だ。」

「そつか、それじゃ久しぶりの里帰りだな」

「里帰りだゝ！俺にはもう里などない、俺はあの大六天魔王織田信長に家族も仲間も何もかも奪われた、

だから、俺はあんだのどこに來たのさ魔王を倒すために。」

そう銀時の過去が明らかになり、輝元が

「そつか、よし今日は飲め、今日だけは酒を飲んで酔って寝ろそれが今日の仕事さ。」

そう言つて、輝元は銀時に酒をついだ。そして二人は、大声を上げながら飲みあつてた。そんな時

「輝元様、尾張の反織田勢力から使者が来ています。」

「なにそれはまことか、よしすぐ行く。銀時、起きろ臨時の軍議だ。」

「そう言つと、輝元は銀時を連れて会見場所に行った。輝元が着くとそこには鎧を着た若い侍がいた。

「犬山一揆衆の桂小太郎と申します。今回は、我々のためにわざわざ遠いところから来ていただきありがとうございます。」

「うむ、それで桂殿犬山一揆衆は今どうなっている。」

「は、それが先週織田の軍が一揆衆の討伐に合い、全滅寸前になっています。現在は、美濃の岩村にいます。もう、我らだけで織田に抵抗する力は残っていませんなにとぞ毛利軍に合流させてください」

い。」

「十分わかった、これより岩村に行き犬山一揆衆と合流する。」

「ありがとうございます、輝元殿。」

そう、輝元が宣言している姿を見た後、銀時は桂の後を追った。

「よう、銀時元氣にしてたか。」

「あゝ元氣にしてたよ、でもまさか幽霊に会うとは思ってもいなかったぜ、ズラ。」

「ズラじゃない桂だ、でもお前が毛利に仕えているなんて思わなかったぜ、お前は誰かに仕えるのはあれ ほど嫌がっていたのにな。」
そう銀時と桂が話していた。

「うるせなゝどうだっていいじゃねゝかゝ、それより高杉や坂本は生きてんのか。ズラ」

「ズラじゃない桂だ、あゝ生きているさ。」

「そうかそれは良かった、あんとくにもう全員死んだのかと思っただぜ。」

「まゝな、俺も死んだのかと思っていたぜ。」

「でもまさか、一揆衆を率いているとは思わなかったよ、でも全滅寸前だけだな。」

「これでも抵抗はしてたんだぞ、ま、結局こんな状態になったけどな。」

「まゝ今日は、酒飲んで今の思い出について話そうじゃないか、なゝズラ。」

「ズラじゃない桂だ、何度も言わせるなその呼び方はやめろって昔から言ってるじゃないか。」

「わかった、わかった。」

そう、銀時と桂が二人で飲みながら会話していた。そして、日が昇り出発のときが来た。

「これより、犬山一揆衆と合流しに行く。皆のものの遅れをとるなよ。」

「

「オー！」

そう輝元が、言い岩村に向かった。

合流「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回は、3部作品で送らせていただきます。次回投稿は、週末になります。

合流「中」

毛利軍が一揆衆の使者に会い岩村に向かっていた。そして、岩村に到着し一揆衆の使者が岩村城の廃城のどこまで案内した。そして、その門の前で使者が

「桂小太郎だ、毛利軍を連れてきた門を開いてくれ。」

そう、大きな声で言うと言の前の大きな門が開き桂は城の中に入ったそれに続くように毛利軍も入城した。そして、城の中に入ったら一人の男がいた。

「これは、毛利輝元様、わざわざ遠い安芸の国からのご足労まことにありがとうございます。申し遅れましたそれがし、織田に反逆する一揆衆、犬山一揆衆の頭領高杉晋助と申します。」

「うむ、大儀である。早速我ら毛利軍に合流することで良いな。」

「は、是非毛利軍に合流させてもらいます。」

「よし、それでは早速この城を我が毛利軍がこたびの遠征の基地として徴用させてもらうぞ。」

そう、輝元が大声で犬山一揆衆との合流を宣言し岩村城を遠征基地にすると毛利軍に伝えた。

「どうだ高杉、俺のこの大将は？」

銀時が高杉に話した。

「まゝいいじゃないか、兵士たちには信頼されているし、しかも一揆衆をすんなりと受け入れるなんて、

「ただうつつわがでかいことか。」

「そうか、そういえば坂本元気にしてるか？」

「あゝ今、屋敷の中で酒飲んでるわ、まったくあいつはいつも酒飲んで寝てそしてまた酒でいつもそうしてるさ、ま、戦のときはあゝ見えて結構強いからな。」

「そうか、それは良かった、みんなあの時にみんな殺されていたと思っていたよ。」

「俺らが、あんなやつにやられるわけないだろ、ただ他のやつらは死んじまったけどな。」

「・・・・・・・・」

「ま、今頃そんな話しても死んだやつらは帰ってこないよ、さてと、屋敷に行つて坂本と桂と一緒に飲もうや。」

「あー、そうだなよし今日はいっぱい飲むぞ。」

そう言いながら高杉と銀時は桂と坂本がいる屋敷に向かった。

「あはは、よう金時元気にしてたか？」

「うるせよ、俺は銀時だてめガキのころからまったく成長してないな。」

「あははは、まゝそう怒らずほれ酒でも飲めや。」

「たく、坂本お前それで今日何本目だ、あんま飲むなよ。」

「そうだぞ、辰馬いつ敵が攻めてくるかわからんのだぞ。」

「大丈夫じゃ、おまんらが（お前らが）50人敵倒したら俺が100人倒しちゆきね、あははー」

そつ、銀時と桂、高杉、坂本が話していた。そして彼らは、朝まで飲んで酔いつぶれていた。そして四人ともぐすつりと寝ていた。

合流「中」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回、投稿が遅れてしまいすみませんでした。理由は、新しい小説を書いていましてそれで今回遅れました。すいませんでした。

次回投稿は、ちょっとわかりません。

合流「下」

毛利軍が犬山一揆衆と合流してから数日後銀時はのんびりと美濃の岩村城で過ごしていた。

「よゝ銀時起きてるか？」

「あゝだれだ、なんだ高杉かなんかようか？」

「ちよつとお前と話したくてな、なゝ銀時覚えてるか俺たちが初めて会った時のこと。」

「あゝ覚えてるさ、それがどうした？」

「あんときは今より結構楽しかったな。」

「まゝ確かにそうだけど今も楽しいぜ。」

「松陽先生が死んでもか。」

「・・・・・・」

「ま、お前がどう思つて生きてるかなんてどうだっていい、ただ、俺は先生を奪つたあの織田の野郎は絶対許さないあいつが先生を奪つたように俺はあいつから何もかも奪つて壊してやるて決めたんだ、なゝ銀時お前は信長の奴を憎んでいないのか、お前は信長の奴を倒すために毛利に仕官したのだろうだつたら俺についてこい、俺はこの一揆衆を合流させた理由教えてやろうか俺は新しい義勇軍を作りたいんだこの一揆衆よりもはるかに強い俺の軍を作りたいんだ銀時お前今じゃ「白夜叉」とか呼ばれてるんだろうお前さえいれば織田を倒した後天下統一だってできるのだぞ、どうだ銀時この話乗るか？」

そう高杉が銀時に聞くと銀時は高杉の方向に向き

「俺はパスするわ、だて俺は織田なんか今じゃどうだっていいし、もちろん天下なんかどうだっていい、

ただ俺は安いものの為に戦っているんじゃない俺は守りたいものがあるから戦っているんだよ今の時代は敵

なんかとっているひまがあるなら俺はのんびりと過ごしたいわ、

だがな高杉俺は織田を許したわけじゃ　ねもちろん恨んでいるさ、
松陽先手を奪ったやつだからなでも、憎しみはまた別の憎しみを生
むだけだ

そんなんだつたら憎まないほうがいいと思ってさ、そして少し
でも楽できるだろう、ま、そういうことだ高杉てめがなにしよう
と好きにするがいいただ俺が守ってるもんには傷つけたらてめを許さ
ないから　な、いちよういったからな気をつけろよ」

そう銀時が高杉に言うとき銀時はその場を後にした、そして

「ふーん、昔から変わっていないバカだな。」

そう言い残し高杉は岩村城を後にした。

翌日

「これより、長篠に向うぞ織田・徳川・浅井連合軍が武田・上杉・
伊達連合軍と対立してるらしいそこに

我らが毛利軍が参戦する伊達には以前の借りもあるしな、これか
ら大戦が始めるみながんばって生き残　ってくれ、よいな。」

「おー！」

毛利軍１００００の軍が岩村城を出発した犬山一揆衆を合流させ
大軍となった毛利軍は長篠に向った。

合流「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

長篠の戦い「上」

浅井・徳川・織田連合軍と伊達・武田・上杉連合軍が長篠で対立していた。にらみ合いの状態が続いていた。だが伊達軍・浅井軍が衝突し長篠の戦いが始まった、織田・徳川連合軍と武田・上杉連合軍の間でも戦いが始まった、双方互角の戦いが続いていた伊達・浅井の方も互角の戦いが続いていた。

「HA、こんなもんじゃねだろうがもつとかかってこい。」

そう戦場で叫んでいたのは奥州の独眼竜伊達政宗であった、彼は次々と浅井・徳川・織田連合軍の兵士を次々と斬っていた、そして政宗が敵軍の兵士を斬って馬にまたがって移動していたら前方から紅白の鎧を着た武将が前方より接近していたのであった。

「HA、なんだありや変な奴だが強そうじゃねか。」

「悪は削除する、それが我が使命である。」

そう叫びながらお互い同時にさやから刀を抜き「カキン」という音が戦場に響いた。

「HA、やるじゃねかたいていの奴はもうここでやられてるのにあんたどこのどいつだ。」

「我が名は浅井長政、悪を削除するものなり。」

「浅井長政？」

「いかにもそういう貴様は？」

「俺か、俺は奥州筆頭伊達政宗だ。」

「貴様があの独眼流かだったら悪とみなし即刻削除するのみ。」

「まゝそんなに熱くなるなよ、もっとCOOLに行こうぜ。」

「奥州筆頭伊達政宗推して参る。」

「来い、貴様を即刻削除する。」

そして、政宗と長政の一騎打ちが始まった、お互い息をする暇もなく刀を振っていた、政宗は久しぶりに竜の爪で戦っていた、長政も懸命に政宗に対抗した、二人が熾烈の戦いを繰り返していたころ、

毛利軍は馬をもつていすぴーどで走らせ長篠に向っていた。

長篠の戦い「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今まで活動休止にしてすいませんでした、体育祭があつて、疲れて全然書けないと思って休ませてもらいました。

次回投稿は、来週の日曜になります。

長篠の戦い「中（上）」

伊達軍・浅井軍が戦っていたところ武田・上杉連合軍・織田・徳川連合軍は、猛烈な戦いを繰り広げていた、上杉・武田は自分らが得意とする戦術で織田・徳川連合軍と戦っていた。

「お館さまー!!!」

そう叫びながら敵兵士を斬っていたのは、武田の若き虎真田幸村であつた幸村は次々と徳川・織田連合軍の兵士を斬っていた。

「ほゝあ奴やるなゝだが、戦国最強本多忠勝出撃せよ!」

「本多忠勝だ、逃げるゝ」「冗談じゃない」そう、上杉・武田連合軍の兵士は次々と逃げ出して行つた。しかし、本多忠勝の前に一人の武将がいた。そう、真田幸村であつた。

「貴殿が本多忠勝殿か。」

「あゝ戦国最強本多忠勝だ。」

「ということは、貴殿が徳川家康殿か?」

「いかに、それがし三河の徳川家康だ。」

「お館様、忠勝殿ことはそれがしに任せてくださいお館様は家康殿相手をお頼み申す。」

「分かつた、幸村この場は預ける。」

「心得申した、お館様。」

そう、幸村が武田信玄に言つと幸村は忠勝に向つて突っ込んでいった。

「忠勝殿いざ参る。」

「・・・・・・」

「久しぶりだな、家康。」

「信玄公、お久しぶりです。」

「家康、まだ織田に着くか?」

「はい、まだ徳川と織田は同盟を結んでいます、絆の力で天下を治めるためそれがしはその絆を裏切ることはできませんぬ。」

「だが、織田は恐怖で天下を統一しようとしておるそんな奴が絆で天下を治めるお前がこのまま同盟を結んでいてもいずれば、滅ぼされるのが目に見えておる家康最後の勧告だ今ここで織田との同盟を破棄し 我らにつけとも織田を倒そうではないか。」

「それは、出来申さん。」

「それは、なぜだ家康？」

「もしここで織田との同盟を破棄したら盟約違反になるとちみち戦わなくてはならない、それがしは、絆の力で天下を治めるそれを邪魔をするなら容赦はしない信玄公。」

「そうか、ならばわしも容赦はしない。」

「行くぞ、家康！！」

「来い、信玄公！！」

そのころ、長篠に向っていた毛利軍はもうすぐ長篠に着こうとしていただが、その毛利軍の前に一つの軍が現れたそれは

「毛利よ、これより先は我が北条家がの名のもとに貴様に制裁を下す。」

「あれは、関東の覇者北条氏政、北条め織田に着いたか。」

「それゆけ、毛利の軍を蹴散らせ。」

「オー！！」

「仕方ない、行け北条軍を撃破する行くぞ。」

「オー！！」

北条軍と毛利軍の戦いが長篠の郊外で始まった。長篠の方も熾烈の戦いを繰り広げていた。戦の果てに勝つのは東か西か東西の戦いが長篠で繰り広げていた。

長篠の戦い「中（上）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。さて今回は中なのに3部作分かれて書かせていただきたいと思っています。

次回投稿は、週末になります。

長篠の戦い「中（中）」

長篠郊外では、関東の覇者北条氏政と中国の覇者毛利輝元が戦っていた、お互い互角の戦いを繰り広げていた銀時は次々と北条軍の兵士を斬っていた。

「どけどけえー！！ざこは引っ込みな。」

銀時は白夜叉の名前のままの姿だった、銀色の髪に血を攻め戦場を駆ける姿はまるで鬼のようだった。そんな、銀時の姿を見て逃げ出す兵士もいた。だが、銀時は自分に斬りかかってくる北条軍の兵士ども斬り捨てていった、しかし北条軍も負けておらず次々と兵士を戦場へと送り出したが、毛利軍も旧犬山一揆衆と合流し戦力はかなり上がったていた。

「銀時！」

「何だ、ズラなんか用があるのか？」

「ズラじゃない、桂だ。お前以前より強くなつてねえか。」

「うるせな、そんなことしゃべってる暇あったらもっと集中しやがれえ、コノヤロー！！」

「だまれ、銀時後ろ。」

「おっと、危ねな。」

「お前もちゃんと集中しろ、死ぬぞ。」

「うるせな、んなこと分かつてるわ。」

銀時と桂がお互いの背中を預けて北条軍のど真ん中で戦っていた。

「お、やつてるの、よしそろそろわしも本気を出すかの。あははは。」「」

そう言いながら敵兵士を斬っていたのは坂本辰馬だった、彼は銀時にももちろん桂に劣らない強さだった辰馬は、次々と斬りかかってくるものを斬っていた。

毛利軍本陣

「輝元様、さすがですね犬山一揆衆は。」

「うむ、あれが反織田勢力だった一揆衆強すぎるあれだったら織田と対等に戦えたのに。」

「輝元様、大変です、北条軍が長篠方に向っています」
「なに。」

「おそらく、織田軍と合流して一気に伊達・武田・上杉・毛利をまとめてたたくつもりかと。」

「輝元様、どうしますかこのまま追撃しますか？」

「我々毛利軍はこのまま北条軍を追撃し長篠で勝敗を決める。」

「心得申した。」

北条軍が長篠に向つてると知り毛利軍は追撃を開始し長篠で勝敗を決めるつもり北条軍を追撃した。

そのころ長篠では浅井・伊達軍の戦いがより一層過激を増していた。

「HA、そんなんじゃ竜の鱗一枚も取れねえぜ。」

「悪は削除するのみ、それが私の使命！！」

「上等、だぜえ！！」

長政と政宗一騎打ちはお互い互角の戦いを繰り広げていた政宗は六本の刀で戦っていた。だが、伊達政宗の家臣片倉小十郎が浅井の兵士を斬って浅井長政の方を見るとその後ろに織田の軍勢が接近してきたのであった。

「政宗様、織田の軍勢が迫ってきています。」

「ああ？」

政宗が長政の方を向くと鉄砲を持った織田の軍が迫っていたのであった。

「この戦、我が浅井の勝利よ。」

「まだ、勝負はついてねえ。」

「この、状況でまだつかぬともうすか。」

「あゝその通りだ、この独眼竜が地に伏せるまで、奥州伊達は負けはしねえぜ、YOU, see?」

そう、浅井長政と話していたら

「バーン!!」

と銃声が長篠全体に広がった

「な、なんだと。」

長政が地に倒れた、織田の鉄砲隊が浅井背後から撃ったのであった。織田軍は次々と浅井軍・伊達軍の兵士に向って発砲したのであった。浅井軍は全滅した浅井と同盟関係にあった織田が突如と浅井を裏切ったのであった、浅井軍を全滅させた後織田軍はまだ生きていた伊達軍と戦った。

長篠の戦い「中（中）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の作品は結構長かった。
次回投稿は、来週の日曜日になります。

長篠の戦い「中（下）」

「バーン！！」

伊達政宗と浅井長政が戦っていたときだった、浅井長政の背後で織田軍の鉄砲隊が浅井長政率いる浅井軍と伊達政宗率いる伊達軍を狙撃したのであったそして、政宗と戦っていた長政はその銃撃に合い地に伏せた。

「なぜだ、どうして味方の軍を狙撃する我が浅井軍は正義のために戦ってきたのにどうして」

「まだ、わからないのですか。あなた方はもう必要ないということですよ。」

「明智殿！」

長政の目の前に織田軍の武將明智光秀が現れた。

「我々にとつてあなた方は邪魔な存在なんですよ、浅井が滅べば近江は我が織田の物になるそもそも、浅井との同盟は越前の朝倉を攻めるための道具だったのですよ。」

「そんな、では、我はずっと騙されてきたのか？」

「そうです、あなた方は正義のためと言ってわれ我々織田軍のために良く働いてくれました、ご苦労様でした。」

「貴様！！」

「さて、そろそろあの世へ行く時間が来たようですね。」

「まだ、死ねぬ、うう」

浅井長政は息を引き取った、正義のために戦ってきた長政だったが最後は皮肉な死に方であった。

「さてと、皆さんこれより浅井の残党と奥州伊達軍を殲滅しなさい。」

「おおー！！」

「政宗様、織田の者たちが攻めてきました。」

「上等だ、人が楽しんでいたPartyを邪魔するなんていい度胸

「じゃねか、奥州筆頭伊達政宗、推して参る」

政宗は近づいてくる織田軍に突っ込んでいった。

「まったく、おめえら政宗さまの後に続けー！！」

「おおー！！」

伊達軍と織田軍の戦いが始まった、政宗は浅井長政とPartyしていたのに織田軍に邪魔され腹が立っていたため政宗は、織田軍の兵士たちを次々と斬っていた伊達軍の兵士も「筆頭！」「片倉様ー！！」と叫びながら織田軍の兵士たちと戦っていた。

「やりますね、独眼竜だがもうあなた方の負けはもう決まっています。」

「明智様、北条軍がこちらに向っているとのこと。」

「そうですか、分かりましたそれでは後のことはまかせますよ。」

「お任せください。」

光秀は、織田軍本陣戻った。

そのころ、織田・徳川連合軍と武田・上杉連合軍は若干武田・上杉連合軍が優勢になっていた。

「いまじゃ、一気に徳川本陣を落とすのだ。」

「おおー！！」

「私たちは、織田本陣を叩くのです私に続きなさい。」

「了解しました。」

武田は徳川本陣を上杉は織田本陣を目指し進軍していた。

徳川本陣

「何という強さだ、我が押されている。」

「さすがだ、信玄公強すぎる。」

「家康様、どうしますか撤退しますか？」

「いや、まだ撤退しないここで今撤退すれば盟約違反になる。」

「しかし、ここままで戦い続けると全滅します。」

「家康様、大変です。」

「どうした、なんかあったか。」

「浅井軍が織田軍に狙撃され全滅しました。」

「なに、それはまことか。」

「まことでございます、現在伊達軍と織田軍が戦っています。」

「家康様、我々もそのようなことになるかもしれませんがここは撤退すべきです。」

「仕方ない、徳川軍全軍に伝える全軍撤退せよ。」

「撤退だ、引けえ引けえ！！」

徳川軍は浅井軍の全滅を受けて撤退を開始した。武田軍は徳川軍を追撃を開始した。

「これより、武田軍はこのまま徳川軍を追撃する、わしに続けえ！！」

「心得申した、お館様。」

徳川軍が撤退を開始したところ毛利軍は北条軍を追って長篠について北条軍と戦っていた

「しつこいな、てめえらに要はないって言ってるだろうが。」

銀時は、そう言いながらバツサと北条軍の兵士を斬った毛利軍と北条軍の戦いはより一層ヒートアップしていた。

長篠の戦い「中（下）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。長篠編は長いまだまだ続くと思うけどあきないで読んでくれたら嬉しいです。

次回投稿は、来週の日曜日になります。

長篠の戦い「下（上）」

徳川軍が撤退した後長篠では、織田・北条連合軍と上杉・伊達・毛利連合軍が戦っていた武田軍は撤退した徳川軍を追撃していた織田・北条連合軍はより一層不利な戦いになっていた、だが、織田軍はこのとき美濃から派遣していた大軍の鉄砲隊が到着しており織田の鉄砲隊は次々と上杉・伊達・毛利連合軍を狙撃した、圧倒的な差だった兵士の数では上杉・伊達・毛利連合軍が有利だが戦術では織田・北条連合軍が有利だった織田本陣に突撃した上杉軍は到着した鉄砲隊に狙撃され全滅必死だった。

「なんという、鉄砲の数だこのままだと全滅してしまう全軍一時撤退せよ！！」

「了解しました。」

上杉軍は織田軍の鉄砲隊の狙撃をもろ受け全滅寸前になり上杉軍はよぎなく撤退した、これで長篠で戦っているのが伊達・毛利連合軍と織田・北条連合軍だった。

「HA、もつと食らいつきな。」

独眼竜伊達政宗は、織田・北条連合軍の兵士と戦っていた。

「政宗様！！」

「何だ、小十郎。」

「上杉軍が撤退しました。」

「軍神が引いたか、小十郎今この長篠にいる軍は？」

「現在、味方は伊達軍と毛利軍しかいません。」

「おい、武田のおっさんはどうした？」

「武田軍は徳川軍を追撃しています。」

「なにやってんだ、武田のおっさん、あんたがいないとこの戦い負けるぞ。」

そう、小十郎に話していると政宗の背後から鎌のようなものが政宗の背中を斬り裂こうとしていた、だがそれにいち早くきずいた小十

郎はすかさず政宗を守った。

「おいしいですね、あと少しだったのに。」

「てめえは、明智光秀。」

「これはこれは、奥州の若き竜ではありませんか。」

「なんでてめえがこんなところなんだ。」

「いいじゃありませんか、あなたかがたを一気に殲滅できるのですから。」

そう言った明智光秀の背後には大軍の鉄砲隊が狙撃の準備を始めていた、光秀は一気に伊達軍を全滅させようとしていたのであった。

「HA、そんなことはさせね奥州伊達軍は不滅だぜ。」

「政宗様、一端兵を引きましようあの鉄砲の数は半端じゃありません不滅で言ってもあの数ではとても勝てませんここはいったん引きましよう。」

「・・・撤退だ小十郎！！」

「撤収！！」「撤退だ！」そう伊達軍の兵士が叫び撤退のホラ貝がなった、政宗は自分の愛馬にまたがり長篠の地をもうダッシュで馬を走らせ後にした、そのころ武田軍は徳川家康が織田を裏切ると申し長篠に向っていた、だが、武田軍はこの知らせを聞き甲斐に撤退した、毛利軍は伊達軍の撤退する姿を見て勝ち目なしと判断し長篠の地を後にした、長篠戦いは織田軍が勝利した。大きな犠牲を出して、武田軍は負傷した兵士を受け入れると申し上杉軍・伊達軍・毛利軍・徳川軍はこれを受け入れ四軍は甲斐に向った。

長篠の戦い「下（上）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。

次回投稿は、来週の日曜日になります。

長篠の戦い「下（下）」

毛利軍・徳川軍・上杉軍・伊達軍の四力国軍は甲斐の国の武田軍の本拠地にいた、四力国軍は先の長篠の戦いで負傷した兵士たちの手当てをしていたその間四国軍の総大将が話し合いをしていた。

「長篠の戦いで多くの兵士が死んでいったの、謙信よ。」

「そうですね、多くの者たちがなくなってしまいましたね。」

「HA、まったく魔王のおっさんのせいで怪我してしまったぜ、な、小十郎。」

「は、今回の失態申し訳ありません。」

「別にいいさ。」

「皆の衆、わしから意見があるのじゃが良いか？」

「どうした武田のおっさんなんかあるのか？」

「うむ、今回の戦で分かった通り織田の脅威分かっていただけだと思う、このまま織田を放置しておれば

日の本はやがて焦土となってしまうだろうそこで、織田を包囲する同盟を結びたい、東は伊達・武田・上杉・徳川とそして西は本当は浅井と同盟を結びたかったのじゃが長政が死んでしまった以上浅井とは

組めないとなると残るは毛利・長曾我部・島津と組んで一気に織田領に攻め込み信長の首を取る。」

「壮大な、織田包囲網だな。」

「だが、たとえ東国が同盟を結んだとしても西国の島津と長曾我部がわが毛利と同盟をすんなりと結んでくれないと思う、二国とは昔からにらみ合っているから、なかなか承諾してくれないと思う。」

「確かに、東国はなんとかなるでしょうが西国の二国が手を組んでくれると思わない。」

「長曾我部は俺に任せてくれ元親とは昔から仲がいいんだ、俺が仲裁してやるよ。」

「そうか、では任せたぞ家康。」

「任せておけ。」

「あとは、島津ですね。」

そう、島津について話し合っていると「お館様、一大事です!!」と叫びながら会談の場に現れた。

「なんだ、佐助なんかあった？」

「お館様、九州の島津が織田に討たれました。」

「なにそれはまことか。」

「はい、魔王は長篠より大急ぎに兵士を引き上げ体制を整えて九州遠征に出陣し島津軍を壊滅させ九州全土を焼け野原にし引き上げたそうです。」

「これで、南端は。」

「魔王のおっさんの物に。」

「皆様方、我が毛利は一端安芸に撤退します今後対策も練る必要がありますので、これで失礼します。」

「お気を付けて。」

「言い忘れていましたが、我が毛利は織田包囲網に参加しますのでお忘れなく。」

「武田のおっさん俺も奥州に引き上げるぜ。俺も包囲網には参加するからな、じゃあな」

「分かった。」

「信玄公、それがしも三河に帰らせてもらいます。わしも参加しますからな。」

「信玄、私も越後に一端引き上げます。」

「分かった。」

四力国軍が包囲網に参加すると表明しそれぞれ本国に引き上げた。

長篠の戦い「下（下）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。やっと「長篠の戦い」編が終了しました。長い間、閲覧していただきありがとうございます。

討伐

九州の島津が滅び、西国が毛利・長曾我部の両家だけとなった頃奥州の伊達政宗は甲斐の国から引き上げ奥州にいた。

「負けちまったな、小十郎」

「負けてしまいましたね、政宗様」

と二人は、長篠の戦いの事を話していた。

「まさか、魔王のおっさんがあそこまで軍備を整えていたなんて思ってもいなかったぜ」

「左様ですな、あの鉄砲の数、兵の数、圧倒的な軍事力でした」

「だが、今度は負けねえ。今度こそ、魔王のおっさんの首を取りに行くぜ」

政宗は、再び第六天魔王織田信長の首を取りに行くことを宣言した。「ですが、今の状態では再び負けてしまいますぞ」

と小十郎が言う。今伊達軍は、長篠の戦いで多くの兵を失っていた。「そんなこと分かっているぜ、まずは軍の立て直しだ。小十郎、任せたぞ」

「は、承知いたしました」

そう小十郎が言う。と政宗は、その部屋から出ていった。

それから数日後、小十郎の働きにより伊達軍は元の軍に戻ったとは言えないがほぼ回復した。

「政宗様、軍備は整いました。いつでも、出陣できます」

「Thank You、小十郎。よし今から尾張に向うぜ」

「は、承知いたしました」

「筆頭、織田の野郎は今、西国平定に向うため山城の本能寺にいるとにことです」

と一人の兵が部屋に入り信長の居場所の報告する。

「西国平定、いよいよ始まるのか」

「その前に、この独眼竜が魔王の首を取ってやるぜ」

そう言々と政宗は、部屋から出て城の門に向った。城の門に着くとそこには兵士たちがいた。

「いいか、今から本能寺に向う。今度こそ魔王の首を取りぞ」

「筆頭!!」

政宗率いる伊達軍は、山城の国の本能寺に向けて出陣した。

停戦

毛利軍が長篠の戦いで敗北し武田の甲斐の国で織田包囲網について話していたが、織田軍が日の本の最南端島津が撃破され西国は毛利・長曾我部の二国だけとなり毛利軍は大急ぎで中国地方に引き上げていった。

島津が撃破されてから、数週間後、輝元は各地の情報を集めていた。そして、輝元は銀時と将棋をしていた

「いやゝしかし困ったもんだ、まさかあの島津が織田に撃破されるとは思わなかった、銀時よ。」

「本当、あの鬼島津がねゝ王手飛車取り。」

「え、ちよつと待ってくれ。」

「だめだ、輝元これで待った何回目だと思ってんだ。」

「いいじゃん別に。」

「ダメ。」

「輝元様、大変です!!」

「どうした、何かあったのか？」

「は、四国の長曾我部元親から書状が届いています。」

「ほう、あの長曾我部が珍しいこともあるの。」

「それで、なんて書いているんだ輝元。」

そう、銀時に言われ輝元は書状に書かれた文を読んだ。

「今回の織田軍による九州大遠征であの鬼島津がやられた、しかも織田の野郎は今軍を整えてこの四国を

攻めようとしているもしこの状況で、織田軍が四国を攻められたら西国のほとんどは織田の物になりあんなのともすぐに攻められる、そこでだ輝元、一端対織田の共闘を結ぶために一端休戦しよう。」

「って書いてる。」

「あの西海の鬼がね、休戦を要請するとはね。」

「ま、これで織田包囲網が完全なものとなった、東国は伊達・徳川・武田・上杉それに対し西国は毛利・長曾我部の二国、ま、我が毛利がいれば確実に織田を滅せることができる。」

「いよいよ、織田と本格的に戦うんだな。」

「あゝ、そうだ銀時、おい元春。」

「は、何でしょうか、輝元様。」

「この長曾我部の同盟をほかの国に知らせを出せ。」

「は、心得申した。」

「さてと、銀時行くぞ。」

「行くつてどこに？」

「何言つてんだ、長曾我部に会いに行く。」

「へゝそれでどこに行くんだ、まさか四国つてことはないよな。」

「厳島に向う、お前もついてこい。」

「分かった。」

書状が届いてから数日後、輝元は厳島の厳島神社にいたここで西海の鬼と会うことになっていた。

「よゝ久しぶりだな輝元。」

「これはこれは、元親久しいの。」

「あゝ久しぶりだな、早速なんだがそつちはこの同盟に乗るか、乗らないのかどつちなんだ輝元？」

「何を申す我がこの同盟を承諾してなければこんな場所にはいない。」

「

「ま、そつりやそうだ、んで、あんたこれからどうするんだ？」

「我はこれより織田領に向けて進軍を開始するつもりだが貴様はどうする。」

「俺は、海から織田領を攻めるつもりだがそれでいいだろう。」

「よし、では長曾我部は織田包囲網に参加するのだろ。」

「もちろん、織田を倒すためにはあんたらの仲間になった方が得だぜ。」

「分かった、では、これにて失礼する。」

「それじゃな、毛利よ。」

こうして、毛利と長曾我部の同盟は成立した瀬戸内を守る者同士が織田を倒すために結託したのであった。毛利は陸側から攻め、長曾我部は海から織田領に進軍した。

「野郎ども、この富岳で織田の野郎をぶっ飛ばすぜ。」

「アニキ!!」

「いいか、我が毛利はこれより陸路から織田領に向けて進軍する、吉川・小早川は姫路方面から穴戸・赤川は鳥取方面から進軍せよ、なお、本隊は、時が過ぎ次第出陣する。」

「おー!!」

毛利・長曾我部は一斉に織田領に進軍した、一方東国の奥州の伊達軍が軍を整えて第六天魔王織田信長の首を取るために奥州を出陣し織田信長がいる本能寺に向った、徳川・武田・上杉の軍も一斉に織田領に進軍した。

停戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

赤穂の戦い

毛利・長曾我部・徳川・伊達・武田・上杉が一斉に織田信長が治める領土に一斉になだれ込んだ、毛利軍は、陸側から長曾我部軍は海から織田領に進軍した一方東国の徳川・伊達・武田・上杉は武田軍は織田軍と同盟を結んでいた北条軍と戦っていた、上杉軍は北陸から進軍し徳川軍は武田軍に対して援軍を送ったり西へ進軍したりしていた、そのころ奥州伊達軍は奥州より直接第六天魔王織田信長の首を取ろうと考え伊達軍総帥伊達政宗は6500の兵士を引き連れて奥州を出発した、政宗は魔王の本拠地京の本能寺に向った一方一斉に自国の領土に敵軍がなだれ込んだとことを受けて魔王こと信長は各地に軍を送り進軍を阻止しようとしていた、そして中国地方から織田領に進軍していた毛利軍と織田軍が播磨の国の赤穂で対立していた、姫路方面から進撃していた吉川・小早川は毛利輝元に援軍を要請し輝元は早速10000の軍を率いて赤穂に出陣した、もちろんその中には銀時の姿もあったそして、毛利軍本隊が赤穂に到着し軍議が始まった。

「これより、軍議を始める敵の動きつかめたか？」

「物見からの知らせではこれが現在の情勢です、敵総大将織田信忠は朝日というところに本陣を構えています、両軍の中央には千種川という川が流れています橋もおとされておりここは一気に川を渡る以外ございません。」

「なるほど、小早川よ毛利水軍に播磨灘にすぐ来るよう伝えよ海から織田本陣に砲撃をする。」

「御意。」

「ほかの物は、明日一気に織田軍に攻めかかる良いな！」

「おー！！」

そして、軍議が終わり皆敵の襲撃に備えて寝た、そして翌日空は鉛色のした雲がどんよりと広がっていたいかにも雨が降りそうな天

気だった、そんななか毛利軍と織田軍が衝突した、千種川は倒された兵士たちの血で真つ赤に染まったそしてその川で銀時は織田軍の兵士たちを鬼のように斬っていた、織田軍は次々と兵士を送ってくるがそのたびに毛利軍に撃破されたそして輝元が要請していた毛利水軍が到着し海から織田本陣に対しほうげきが始まった、織田本陣は混乱状態に陥っていたそして銀時は織田軍兵士次々と斬りながら織田本陣にたどり着いた。

「てめえか、魔王のジジイが送ってきた織田軍総大将織田信忠とは？」

「あゝそうとも私がそうだ。」

「そうかい、だったらあんたの首この俺がとってやるぜコノヤロー！！」

「私の首を取るか、おろかなそのような奴は私が退治してくれようぞ。」

「ようやくやる気になったみたいだな、いざ尋常に勝負！！」

「オー！！！！」

双方の刃が互いに「カキン」という音を鳴らした。

「やるじゃねゝか、久しぶりにいい喧嘩になるぜ。」

「戦を喧嘩と呼ぶんじゃねよ、ここは命の取り合いなんだよ。」

「うるせえ、俺はただ喧嘩しに來ただけなんだよ俺はこの剣がある限り俺は守りものがある限り俺はずっと戦い続けるぜコノヤロー！！！！」

そして、再び二人の刃が重なり合った時「カキン」という音が合戦上に響きまわった銀時の後ろで血を出しながら地に倒れた織田信忠は銀時の一騎打ちに負けたのであった、銀時は信忠が倒れた方向を向いて信忠の亡骸を見て、

「あんたとは、もう一回やりたかったぜ。」

そういい、銀時は信忠の首を取った赤穂の戦いに勝利した毛利軍は姫路に向けて進軍を開始した、一方負けた織田軍は姫路に向けて大急ぎで撤退した。

赤穂の戦い（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回、この「戦国乱世？」が最終回となります。

次回投稿は、分かりません。

本能寺の変

織田軍が赤穂の戦いで毛利軍に撃破されてから数後日、毛利軍が姫路に到着し陣を敷いていた時毛利輝元に驚きの報告が入った。

「輝元様〜！！一大事です！！」

「どうした、何かあったのか？」

「は、昨日6月2日京の本能寺にて織田信長が討たれました。」

「そうかそうか、ってなんじゃとそれはまことか。」

「は、昨夜に本能寺にて宿泊していた所を奇襲に会い本能寺で自害したのところでございます。」

「それで、奇襲した奴は誰だいたいどのどいつじゃ？」

「は、報告によればもと犬山一揆衆に所属していた高杉晋介というものが鬼兵隊という義勇軍を編成し本能寺を襲撃した模様です。」

「おい、高杉がやったというのは本当か？」

「はい、おそらく本当でしょう。」

「あの高杉が第六天魔王を討つとは思わなかったな銀時よ。」

「あゝ、まさかあの野郎がもっと詳しく教えてくれ。」

「は、分かりました。」

1582年天正10年6月2日早朝 京の本能寺

「いいか、これより第六天魔王織田信長が宿泊している本能寺を襲撃する、魔王を恐れるな信長の首さえ取ればこの国は救われる恐怖による支配から解放される、俺たち鬼兵隊が魔王からこの国を開放するのだ、だから皆命をかけて戦うのだいいな！」

「おおー！！！」

「敵は本能寺にあり！！！！」

「おおー！！！！！！！！」

そして、高杉率いる鬼兵隊が本能寺を完全包囲し終えると高杉が攻

撃の合図をし本能寺を攻め始めた。

「上様、上様大変です。」

「どうした？」

「は、奇襲です。」

「敵は何者ぞ。」

「それが、どこの軍が分かりません。」

「ふん、まあいいさ蘭丸すぐ支度し奇襲をかけたものを蹴散らすぞ。」

「心得ました、上様。」

「おおー！信長の首を取れ。」

そう叫びながら織田軍と戦っていた鬼兵隊の隊員は次の瞬間「バーン！」という音を立てて地に倒れた。

「この、魔王には向かったには死ぬ覚悟できたであろうの。」

「あんたかい、第六天魔王を名乗っている大馬鹿ものは？」

「お主は何者ぞ？」

「俺かい、俺は尾張出身の高杉晋助だ第六天魔王織田信長の首を取りに来た男さ。」

「小童め、お主の首がなくなるやもしれんぞ今ならまだ間に合うぞ。」

「そうかい、だったらさっさとお前さんの首とらせてもらってさっさと引き上げますかね。」

「ごさかしい、貴様のような者はさっさと消え失せろ。」

そういいと信長は腰にさしてた刀をスツと出し戦闘状態に入った一方高杉も刀を鞘からだし先頭の構えを取った。そして、本能寺の本堂に火がつけられて本堂が激しく燃えだした。

「いくぜ、てめえーの死に場所にはふさわしいじゃねーか？」

「小童、その口永遠に聞けぬようにしてやる。」

そう信長言った瞬間二人の刀が「カキン」という音を何度も何度もたせながら二人は斬り合ったお互いほぼ互角の戦いであったが高杉が信長が油断を許した瞬間風を切るような音たてて信長を斬った。

「ふん、貴様我を倒して貴様はなにお求める？」

「決まってるじゃねーか、俺はただ天下ほしいだけさあんたは邪魔だったしあんたは俺の師匠の命を奪った張本人だったからとらせてもらっただけさ。」

「ふん、貴様がつくる天下を見てみたかったの、我は第六天魔王織田信長ぞ我はこんな場所で死ぬわけにはいかぬ……」

第六天魔王織田信長は本能寺でこの戦国時代から去った、信長による恐怖による支配は終わった。

「第六天魔王はこの鬼兵隊首領高杉晋助が討ちとった、そしてこの瞬間信長が治めていた領土は我々鬼兵隊が統治するこれより鬼兵隊は天下統一を目指す。」

「おおー！！！」

「で、以上でございます。」

「第六天魔王が死んだ今次はどうする輝元よ？」

「今、旧織田領を攻める理由がないこれより毛利軍は撤退する、すまぬが鳥取方面にも伝えてくれ。」

「御意。」

各地の織田領に進軍していた毛利・長曾我部・徳川・上杉・伊達は撤退を開始した武田軍は北条軍と和睦し甲斐の国引き上げた、第六天魔王織田信長による恐怖による支配は完全終わったそして日の本の中央には「織田」という文字は消え「鬼兵隊」という義勇軍の名前が中央にあった。こうして本能寺の変で織田信長は戦国の世から消えたのであった。

出 演
坂田 銀時
毛利 輝元
島津 義弘
伊達 政宗
片倉 小十郎
浅井 長政
桂 小太郎
高杉 晋助
坂本 辰馬
武田 信玄
真田 幸村
猿飛 佐助
徳川 家康
上杉 謙信
北条 氏政
明智 光秀
長曾我部 元親
織田 信長
屋敷の持ち主
山 賊
山名 豊国
織田 信忠
毛利家家臣
島津家家臣
伊達家家臣
徳川家家臣

武田家家臣

上杉家家臣

北条家家臣

織田家家臣

長曾我部家家臣

演出・シナリオ

坂田銀時

原作

銀魂

戦国BASARA

2010年6月28日

戦国乱世製作委員会

本能寺の変（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の作品で「戦国乱世」を最終回とさせていただきます、今まで閲覧していただきありがとうございます。

戦国乱世シーズン其ノ壱（総集編）

時は戦国時代、各地の武将らが争っていた時代。それが、戦国時代である。そして、ある一人の浪人が、毛利家に仕官しにやってきた。

「殿〜！」

「どうしたなにごとじゃ」

「今、門の前にて浪人が仕官してくれと大きな声で叫んでいるんです」

「そうか、よしその浪人連れてまいれ」

「は〜！」

そう家臣に命じた。何のためらいもなく。そして、その数分後

「殿、連れて参りました」

「よしすぐ行く」

そう家臣に言いました。

そして、その浪人と面会するときが着ました。今後の毛利家の歴史を変えることとなると誰も思っていないませんでした。

「表をあげい」

その浪人は顔をあげました。

「わしが、毛利輝元じゃ。お前の名はなんとゆうのじゃ」

「坂田銀時」

と名乗りました。年齢は、10〜20代くらいの若者で、髪の色は、銀色で髪型は天然パーマ、その目は、死んだ魚の目をしていて。だが、その視線は、まっすぐな視線だった。

「ほ〜坂田銀時かい名だな。銀時、お前は、どこの国の出身じゃ」
そう銀時に聞くと銀時は

「俺は、尾張の国だ」

「尾張、たしかあこは、織田信長の領地だったな。なぜ、織田に仕えなかったんだ」

すると、銀時の顔が変わった。

「俺は、あのくそやろに家族や仲間を殺されたんだ。だから、俺は、あんなくその織田には仕えたくない　んだ。だから俺は、敵対しているあんたのところに来たんだ。」

そう銀時の過去を知った輝元は

「よかるう、銀時お前をわしの家臣にしよう」

そういった。銀時は、驚いた。まさか簡単にそうゆこといわれたからすごく驚いている。そして、輝元が

突然、自分の愛刀と家臣から借りた刀をもって、銀時の前に来た。

そして、その愛刀を銀時に渡し、突然と家臣から借りた刀で斬りかかってきた。銀時もまさか突然と斬りにくるとは、思っていなかったが、銀時は、それを、輝元の愛刀で守った。そして

「危ないじゃねーか。」

といった。そして、輝元が

「剣を抜け、てめの本気を見てみたいんだよ。」

そう輝元がいゆと、銀時は刀をさやから抜きとり戦闘の構えをした。

「そしていい」

そうゆと、輝元は銀時に斬りかかった。そして、銀時の体を切ったと思った瞬間、そこには、銀時はいなかった。そう銀時は、その一瞬でよけていた。

「馬鹿な。どこいった。」

そういつていたら、銀時は輝元のすぐ横にいた。そして「斬られる」と輝元が思った瞬間、カキンとゆう大きな音がした。そして、輝元の刀が、折れていた。その場にいた、家臣一同驚いた。まさか、刀が真っ二つになるとは誰も思っていなかったからだ。もちろん、割られた刀を持っていた輝元自身も驚いていた。そして、銀時が

「はい、ここまで」

そゆと、刀をさやにしまい、その場を立ち去ろうとした。

「ちよっと待て、お前、情けでもかけたのか。」

そう輝元が、銀時に聞くと

「情けだゝんなもんご飯とかにかけるは。俺は、俺の武士道を守っただけだ。」

そう輝元にいった。

「自分の武士道か いいだろう、坂田銀時これからは、わが毛利家のために戦ってほしい」

そう銀時にいった。銀時は、後ろを向いて

「さすが、毛利輝元だ」

といって、輝元と握手した。そしてその場にいた、毛利家家臣もそれを認めた。そしてこれから、銀時の戦いが始まった。

毛利家に仕官された、坂田銀時は輝元が教えた誰も住んでいない屋敷をくれ銀時は、すぐその屋敷に向かった。

「まさか、本当に毛利家に仕えるとは、思わなかった。しかし、どんな屋敷なんだろう？ ま どうせおん ぼろな古いなんか妖怪とかが出るなんだろうな」

そう思いながら、銀時は屋敷に向かった。そう思いながら歩き続けること数分ようやく屋敷に着いた。屋敷を見た瞬間、銀時は

「お 結構いい屋敷じゃん。」

といいながら、屋敷の中に入っていた。屋敷の中は、結構きれいだっただ。家具もあるし、しかもなぜか掃除されていたように思えた。それほどきれいだったのだ。そう銀時が思っていたら。

「あゝどちらさまですか？」

突然と声が聞こえた。銀時は、自分が持っていた木刀を腰から抜きながら後ろをむくと、一人のおばあさんがいた。そして銀時が

「あんだ、だれ」

そう銀時が、聞くと

「私は、この屋敷を管理しているものなんだがね」

そう、おばあさん答えた。そして

「そゆうあんたは、だれだね。この辺じゃ、見かけない顔だね」
そうおばあさんが、たずねてきた。

「俺は、今日毛利家に仕官してもらってきたんだ。それで、輝元がこの屋敷だったら住んでもいいって言　ったからきたんだ」

銀時が、答えるとおばあさんが

「そうかい、毛利様がね　だったらすきに住んでくれや。そのほうが、屋敷も喜ぶだろう。なにせ、ず　と誰も住んでいなかったからね　やと、主人が決まってよかったね　」

そうゆくと、おばあさんがいゆうとおばあさんは、その場から、姿を消すように帰っていった。しかし、後ろを向いて

「そういえば、あんたの名前聞いていなかったねなんていゆんだい」

「坂田銀時」

そう、銀時がおばあさんの質問に答えると

「坂田銀時いい名だね。その名前大事にすんだよ」

そういいながらおばあさんは、去った。なにかさみそうな感じもしたが、銀時は何もゆわず屋敷に入った。そして、お湯を沸いて風呂にためて風呂呂に入った。そしてすぐねた。

翌日、銀時は城下町に向かった。食料の調達にやってきたのだ。

そして、食料を買って町から出ようと思ったら、なにやら行商人らがそこそ話していたから。銀時は、その行商人たちに

「よ　どしたなんかあったのか」

そうたずねると、行商人は

「いや　なんか町外れにある屋敷があるだろう。なんか最近、あの屋敷がどこぞかの山賊が狙っている　ていゆ噂があるんだよ」

噂に出た、屋敷とは銀時がすんでいる屋敷だった。銀時は、急いで屋敷に帰った。そうして、屋敷に戻ると山賊らが、屋敷の中に侵入しようとしていた。しかしその前には、おばあさんがいた。おばあさんが屋敷の門の前で山賊らに

「屋敷の中には、指一本はいらせはしないよ」

そう、山賊らに言ったら

「どけ、くそババア俺らは、この屋敷がほしいんだ。だれも、住んでじゃないねんだろ。そこをどけ死に　てのか」

そうゆくと、山賊らはおばあさんに刀で斬ろうとした瞬間

「おいおい、ばあさん相手に人多いんじゃないか」

「銀さん」

おばさんの前には、銀時がいたのだ。そう銀時は、すばやく腰に挿してた木刀でおばあさんを守ったの。そして

「おいてえめら、何人んち入ろうとしてんだ。ここは、毛利輝元は家臣、坂田銀時の屋敷だこの野郎！」

「毛利だ。んなも知るかいけあいつの首を取れ」

そう、山賊の頭が子分たちに命令すると子分たちは一斉に斬りかかってきた。

「銀さん」

「心配すんな。大丈夫だ。」

そうおばあさんに言ったら、銀時は一人で山賊らに戦いを挑んだ。銀時は、まるで人ではない動きだった。あつとゆうまに、全員倒した。

「たくゝ雑魚が多かったな」

「銀さん」

後ろ向くと

「銀さんありがとう」

と感謝の声をかけてくれた。

「俺は、ただ自分地守っただけだ。」

そゆと銀時は、屋敷に戻った。そして、おばあさんに

「おい、ばあさんあんた旦那はいるのか」

そうおばあさんに聞くと

「ずいぶん前に、戦で死んださ。」

「そっか、わかった、んじゃ俺があんたの旦那代わりに守ってやる。どうせ老い先短いだから俺が、あんたを守ってやるよ。いろいろ借りもあるしさ。」

おばあさんは、うれしそうに銀時が作ったご飯を食べた。

そして銀時は、風呂に入って、寝た。...

山賊を倒してから数日後、銀時は輝元に呼ばれて城へと向かった。銀時は、「なんだろうな」と思いながら城へと向かった。そして銀時が、城について天守閣に向かった。輝元はいつもそこから城下町を見ていたから銀時は、天守閣へ行った。そして、天守閣に着くと、そこには、甲冑を着た輝元の姿があった。そして銀時に「まっとなぞ。早くしたたく仕度しろ出陣するぞ」

銀時は、驚いた。輝元に会うなりそんなことをいわれたから驚いていたのであった。銀時は輝元に

「出陣で、どこに行くのだよ」

銀時の問いに輝元は

「下関だ。あこで島津のやつらが暴れまくっているとゆう報告があったからその、島津軍の討伐に出陣するのだよ。」

「あゝそうなのかい」

輝元の答えを聞いた銀時は、すぐに仕度をしだした。尾張から持参してきた鎧をつけて、そして自慢の自分の愛刀を腰にさして、準備ができると輝元に

「できたぞ、さつさとやりに行こうぜ」

そう輝元にゆくと、輝元を連れ天守閣の外に出た。

毛利軍6000人対して島津軍7000人兵の数からは負けているけど、これは仕方がないことであつた。

そうして、毛利軍は長府に本陣を構えた。そしてすぐに軍議が始まり毛利軍の軍師が輝元に

「殿。これが現在の情勢です。敵総大将島津義弘葉、ここ巖流島に本陣を構えています。私としては、海と陸とで挟み内にしようございます。別働隊は、海のほうから巖流島に、いっぽう本隊は、陸がは上陸している島津軍を撃破しながら、巖流島に向かって進軍してほしいと思っています。」

そう軍師が輝元に進言すると輝元はそれを承諾しその作戦が決行された。

輝元率いる陸上のほうから進軍して軍の中に銀時の姿があった。

銀時は、上陸している島津軍と戦っていた。銀時は、次々と島津軍の兵士を斬っていた。輝元は、その銀時の姿を見て

「あれが、銀時。まるで鬼のよなやつだな」

そう思いながら本陣で次の作戦を考えていた。それでも銀時は、敵の兵士をきつていくその中にはたまに敵の武将がいたが銀時は、あつとゆうまに倒していった。そしていると敵軍の兵士が

「だめだ。もうもたねー全軍巖流島に退却！」

そう命令されると島津軍は、巖流島に退化していった。そしてすぐに、毛利軍はその後を追った。そして巖流島につくいとすぐに、毛利軍は上陸し島津軍と戦った。その中にも銀時の姿があった。もちろん銀時は次々と敵兵を斬っていた。そして銀時は、島津軍本陣へと向かった。そして本陣に着くとすぐ大将を探しそして見つけない

「てめが大将か。悪いがあんたの首とらせてもらうぞ。」

「いやじゃ、わしの首がほしかったらわしを倒してからとれ」

そう銀時にいゆうと銀時は

「わかったよ。それじゃーあんたの首とらせてもらうよ」

そうゆうと銀時は人間とは思えない早業で義弘を斬った。そして、義弘は倒れ銀時に

「おめは、いったいだれだ」

そう銀時に問うと

「毛利家家臣坂田銀時。」

そう義弘の問いに答えると

「お前は何のために刀を振るのだ」

「俺はただだ。毛利の民を守っただけだ。この剣が届く範囲は、俺たち毛利の国だ。それお犯すやつは

誰であろうと俺がぶった切る。」

そう義弘にゆうともう義弘もう死んでいた。そして銀時は、義弘に一礼し首をとった。戦に勝利しそしてはじめて毛利家に仕官され

て始めて戦に勝った。しかしこの戦は、まだ小さい戦だった。：

下関の島津軍を討伐してから、数週間後輝元と銀時が将棋をしていたときとんでもない知らせが来た。

「殿、一大事です。」

「どうした、なんかあったのか？」

「は、山名・織田連合軍が鳥取城に向けて進軍しているとのことです。」

「なに、それはまことか。」

それは、とんでもない知らせであった。しかし、銀時は輝元に

「おいおい、城一つ落城したくらいでどうしてそんなに騒がなきゃいけないんだ。」

そう、輝元に問うと輝元は

「それはなじや、鳥取が織田軍の進軍を食い止める最後の城なんじや。もし、鳥取城が落城したらわが毛利の領土にいつきに織田の軍がなだれこむ。そうしたら、毛利は、滅亡だ。」

そう銀時の質問に答えると輝元はすぐに軍を構えて、鳥取に出陣した。総勢10000とゆう軍を引き連れて鳥取にむかった。その中には銀時の姿もあった。

そして、鳥取につくと城は完全に織田・山名連合軍に包囲されていた。あり一匹も入る隙間もなく包囲していた。そしてすぐに、毛利軍は城を一望できるところに本陣を構えた。そして休む暇なく、軍議が始まった。

「殿、これが現在の情勢です。この戦、敵総大将山名豊国と織田信孝を倒せたら我らの勝ち。敵本陣はここ、城を一望できる丘に構えています。そして敵軍の数はおよそ12000だと思われます。」

そう、現在の情勢を聞くと軍師が

「この戦、まず城を囲んでいる軍をたたいて城を救援するのが、得策だと考えます。それから敵本陣を

攻撃するのが得策です。」

そう軍師の策を聞くと輝元は、深くうなずき

「よし、今回の戦も二手に分ける、まず小早川・吉川らは城の救援に向かってください、その他のものは、敵本陣に奇襲をかける。」
こうして作戦が決まるとすぐ実戦された。

雨がいかにも降りそうな天気の中戦いが始まった。まずは、小早川・吉川らが率いる軍が城を囲んでいた敵軍と戦っていた。毛利軍は次々と織田・山名連合軍を破っていた。一方、敵軍本陣に奇襲を掛ける本隊も戦っていた、その中には銀時の姿もあった。銀時は次々と来る敵軍の兵士を斬っていた。それは、まるで鬼だった。敵軍の武将が「夜叉だ、白夜叉だ」といいながら斬られていった。「どけどけ、雑魚にはようはねーだよ」そういいながら敵本陣に向かっていた。そうしていると城を救援しに行った部隊から

「申し上げます、城を包囲していた軍勢をすべて撃破しました。これより本隊に合流して敵本陣を落としますとのことです。」

「わかったと、伝えてくれ」

そうして、救援部隊が本隊と合流して戦っていたとき、銀時は敵本陣にいた。

「どこだ！ででこい貴族やろうが」

「ここにいるは、それがしが山名豊国だ。」

「ほう、あんたが総大将か、もう一人はどうした？」

「信孝殿はとうの昔から軍を撤退した、わしが殿を務めたからの、残念だったの。」

「あ、そうなんだ、それじゃ、あんたの首だけでも取らせてもらうよ。」

そうゆうと銀時は、すばやく豊国に斬りかかった。しかし豊国も負けてわおらずささず腰に挿していた刀を抜いて銀と機（はり）の攻撃に對抗した。

「やるじゃなか、貴族でもやれるやつはいるんだ。」

「あたりまえだ、わしもいちよう大名なんだぞ。」

「あんた見たいのが大名、冗談じゃない、俺だったらさっさとあん

た領内からむけだしているね。」

そういったあと銀時は、豊国の攻撃を防ぎながら斬り続けた、そして、相手が一瞬気を抜いた瞬間一気に豊国をばさつと斬った。

「もしあんたが毛利にいたら友になつていたのに。」

そういった後、銀時は豊国の首を取った。なんとか毛利の危機はさつてさらに山名の領土も手に入れた。こうして鳥取城を守りながら、領地も少し増えた。毛利にとっては良いことであつたが、しかし、織田から見れば毛利との全面戦争もよりいっそう強くなった

織田・山名連合軍を破つてから、数カ月後銀時は自分の屋敷でんびりと暮らしていた。そして、あるに日の昼、銀時が昼寝をしていたら一人の毛利家の家臣がやつてきた

「銀時殿、輝元様が呼んでいたぞ。」

「ほんとか、わかつたすぐいく。」

そう、銀時がその家臣にいゆつと銀時はすぐに仕度をして輝元の居城に向かつた。

そうして、銀時が城につくとなぜか城の周りにはいつも以上に兵がいた。銀時は、疑問に思いながら、輝元がいつもいる天守閣に向かつた。そうして、天守閣に着くと甲冑を着た輝元の姿があつた。

そして銀時に

「やつと来たか、早く仕度しろ出陣するぞ！」

「へ、出陣ですか、それで今度はどこに行くんだ？」

そう、銀時が輝元に質問すると輝元は銀時の方を見て

「近江の浅井が、わが毛利領に向けて進軍しているとゆう知らせがあつた。」

「近江の浅井って、あの浅井長政か、なんでその浅井軍が毛利領に兵を進めているんだよ。」

銀時は、驚いた。まさか毛利とは関係ない浅井軍が兵を進めているとまつたかと思つていなかったからであつた、そして輝元は銀時の質問に

「おそらく、織田が命令したのであろう。織田と浅井は以前から同

盟していたから、織田が我らと戦う 前に浅井に毛利軍の兵力を減らせとか命令したのである。」

輝元は、銀時の問いにすらすると答えた。輝元は、知将だったからすぐに検討はついた。そして輝元は軍を整え、浅井軍のそこへ向かった。

毛利軍は、姫路に布陣した。浅井軍はそれに対抗するように陣を構えた。そして毛利軍は軍議を始めた。

「これより、軍議を始める。敵の情報つかめたか？」

「殿、これが現在の情勢です。この戦、敵総大将浅井長政を倒せば我らの勝ちです。敵本陣は市川の向こう側にしています。」

そう報告すると軍師がすかさず

「この戦、一気に川を渡る以外ありません。」

「そうか、仕方がない。全軍浅井軍に突撃だ！」

そう、輝元が命令すると一斉に毛利軍は浅井軍に斬りかかった、その中には銀時の姿もあった。銀時はさっそうと浅井軍に挑んだ。

「うお、そこをどけ、てめらにはようはないんだよ！」

銀時は、浅井軍の兵士たちを次々と斬っていた。銀時の目はいつも目ではなかった、いつもは死んだ魚みたいな目をしているのにかし、銀時の目はまるで獣の目をしていて。そして、銀時は敵本陣近くまで行っていた。しかし今宿のほうから毛利軍ではないほら貝の音色がした。それは、浅井軍の音色ではなかった。そして、その軍が現れたそれは西国からかなり離れた奥州の独眼竜伊達政宗率いる奥州伊達軍だった。その場にいた、人は驚いたまさかこの西国からかなり離れている奥州の伊達軍がこんな場所に現れるとは思っていなかったからである。そして、伊達軍が乱入してきたのであった。そして、伊達政宗が兵士たちに

「派手に楽しみよ！祭りの始まりだ。」

伊達政宗は、兵士たちにさうゆと家臣の片倉小十郎が兵士たちに「おめーら！伊達軍の恥になんねえように戦えよ！」

伊達軍の兵士は「筆頭！」、「片倉様！」といいながら、合戦に

なだれ込んできた。銀時は、すぐに毛利軍本陣に向かった。そのころ、本陣では、大変な混乱状態になっていた。伊達軍と浅井軍にはさまれていた、輝元自身も自ら刀を振り回していた。毛利軍の最大の危機が迫っていた。：

「輝元！」そう叫びながら銀時は、毛利軍本陣へ向かった。本陣では奥州の伊達軍と浅井軍が襲いかかっていた。

奥州伊達軍は、「盗んだ軍馬で走り出す」とゆうように、荒れたものだらけの軍だった。しかし、いざ戦いとなると一変しものすごい強さで相手の軍を脅かしていた。そしてその伊達軍総帥は、奥州筆頭伊達政宗であった。政宗は、奥州をわずか一ヶ月で統一し「奥州筆頭」「独眼流」と呼ばれていた。そして彼の特徴といえば、彼の腰にさしてた刀であった。普通は、一本しか持たない刀を彼は、左右3本ずつつまりは、6本の刀を腰にさしてたのであった。そして、合戦で刀の数を变えて敵を斬っていたのであった。そして伊達軍の特徴は、度々遠征をしていることであつた。伊達軍は奥州周辺の安全が確保したら、奥州からかなり離れた場所まで戦いをいどみにいくのであつた。しかしこれも政宗の性格で、

彼は、喧嘩が大好きだあつたためこうして、戦がなかったら遠征をして敵を探してその敵に戦いを挑んでいたのであつた。そして、今回伊達軍が見つけたのは、浅井軍と毛利軍であつた。伊達軍は、乱入が大好きだったためすぐ伊達軍は浅井軍と毛利軍との戦いに乱入し現在の状態になつていたのであつた。

銀時は、次々と伊達・浅井軍の兵士を斬っていた。「どけ！」と叫びながら、本陣へと向かった。

そして銀時が伊達軍の兵士を斬つて本陣のほうを向こうとした瞬間、横から毛利軍の兵士が「伊達政宗だ！」そう叫びながら、血を出しながら地に倒れた。そいつを斬つたのは、兜に三日月の形をした兜をかぶつてそしてその腰には6本の刀がさしていた。そう彼こそが、奥州筆頭伊達政宗であつた。そして銀時は、政宗に

「てめえが、独眼流か。」

「HA そうだ、それがどうした銀髪パーマが。」

そう政宗が、銀時の質問に答えると銀時は政宗に

「へーあんたが、独眼流かどうりで強いと思ったぜ、ささっとその首とらせてもらうぜ！」

「上等！ 竜の鱗一枚でも剥がしとってみろよ。」

そう政宗が銀時にゆうと銀時は、目を変えて政宗に斬りかかった。

それと同時に政宗も銀時に切りかかった。お互い本気で戦った、そしてついに政宗は、6本の刀を使い出すと銀時は

「やっと、竜の登場か。」

そう政宗にいい、政宗に斬りかかった。政宗と戦っていると毛利軍は余儀なく撤退を開始しだした。それを見た銀時は

「独眼流、この喧嘩次にやろうぜ。」

そう政宗にゆうと銀時は、近くにいた馬にまたがり毛利軍の後を追った。政宗は銀時に

「あんた名は？」

「坂田銀時だ」

「坂田銀時覚えとくぜ」

そうばやいて、政宗は愛馬にまたがり浅井軍本陣に向かった。こうして毛利軍はその場を後にし安芸に向かった。

「輝元、負けちまったな。」

「しょうがない、まさか伊達軍が乱入してくるとは思わなかったかな。」

そう銀時と輝元が話しながら城へと入っていった。銀時は、毛利家に仕官してからはじめて負けた戦だった。だが、銀時は独眼流伊達政宗とゆうライバルを見つけた戦だった。……

毛利軍が浅井軍・伊達軍に敗北し本拠地に撤退していたとき、輝元の耳にとんでもない知らせが届いた。

「なんじやとそれはまことか。」

「どうした輝元、伊達軍か浅井軍が追撃してきたか？」

そう銀時が輝元に問うと輝元は、銀時に

「今、知らせがあつて。織田の軍勢が我らの毛利領に向けて進軍を開始したそうさ。」

「ほんとかよ、とうとう織田との全面戦争が始まるんだな。」

「そうさとして」

「ん？まだあるのか？」

そう銀時が輝元に聞くと

「そして、四国の長曾我部の軍が岡山付近に現れたそうさ。そして、岡山上陸して城を完全包囲して いるとゆうことだ。」

銀時は、驚いた織田軍の進軍のほかに長年にわたって対立していた西海の鬼こと長曾我部元親が突如として、毛利領に進軍したのであった。輝元はどうしていいかわからない状況だった。織田軍と対決するなら、一度体制を整えて織田軍と対決するかだがこの場合長曾我部の軍が毛利領を占領してしまう恐れがあつた、このまま長曾我部の軍を討伐して城に戻つて織田と対決するとゆうことであつたが、この場合もし、長曾我部軍を討伐しても織田軍がその間に毛利領に進軍して毛利軍の敗北が決まってしまう。輝元は、その場に止まり、臨時に軍議を開いた。家臣たちに今の状況を言い軍議が始まった。

「これより軍議を始める、今の状況について皆わかつたと思う。そこで、今我々がやらなければならぬことを決めなくてはならないそこで皆に問うこれから我々はどうしたらいいと思う。」

そう輝元が家臣に問うと毛利軍軍師が

「ここは、二手に分けるのが良いと考えます。本隊はこのまま城にそして一方の軍は岡山にいき長曾 我部軍を討伐したいと思う。」

「しかしそれでは、もし別働隊が敗北したらどうするんですか。あの西海の鬼がいるんですよ我々では

歯が立たないと思います。輝元様自から出て行かないと負けてしまいます。」

「なら、どうしてゆうんだ。このまま負けてもいいのか。」

そう軍師がゆうとその場にいた毛利家臣が黙り込んで一人の足

軽が来てある知らせを持ってきた。

「もしあげます。現在長曾我部軍と伊達軍が現在交戦中とのことでございます。」

とんでもない知らせであつた、あの奥州の独眼竜伊達政宗が長曾我部元親と戦つていたのであつた。あの独眼竜がなぜと銀時が不思議に思つていと輝元が

「よし、一度退却して体制を整えるぞ。」

「は！」

そう輝元がゆくと家臣らは、馬にまたがり城に向けて馬を走らせた。銀時も馬にまたがり馬を走らせながら城へと退却した。毛利軍の最大の危機は伊達軍の働きで何とか収まった、銀時は政宗に感謝しながら城へと向かった。

伊達軍が長曾我部軍を破つて数日後、伊達軍は奥州へと引き上げた。そして、伊達軍のおかげで何とか毛利領に進軍してきた織田軍を破ることに成功したのであつた。そして毛利軍の危機が過ぎていった。そして毛利輝元は、城に家臣を全員城へと呼んだ。もちろん銀時も呼ばれていた。そして、銀時が城の天守閣に着くと全員集まつており、皆雑談をしていた銀時は開いている席を見つけるとそこに座つた、座つた瞬間輝元が入ってきた。そして家臣は話をやめた。静かになつたところで輝元が家臣に突然

「これより、我ら毛利軍は遠征に行く。」

家臣はそれを聞き驚いた。もちろん銀時も驚いた、そして輝元が「それで今回、遠征する場所なんだが織田領の尾張に遠征する。」

輝元が、遠征場所を言つと家臣が「なぜ、尾張なんですか。」と輝元に問うと

「理由は、尾張に存在す反織田勢力の救援および合流するためじゃ、つい最近、その反織田勢力から書状が届いて救援および毛利軍に合流させてほしいと申してきよつたのじゃ、私はそれを受け入れるために

尾張に遠征するのじゃ。」

そう、輝元が淡々と理由を答えてそして

「そこで今回、こたびの遠征は約7000人規模の軍で尾張に向かいたい、そこで今回私が勝手に遠征に参加するものとこのまま毛利領にとどまり領土を守る守備武将を決めた。いまより遠征参加武将を発表する。」

そう輝元が言うのと輝元は、次々と遠征参加武将を発表していった。もちろん輝元の側近でもあった銀時も参加していた。そして輝元が遠征をする家臣を全員発表し終えると輝元が

「以上のものが遠征に参加するものじゃ遠征は明後日に出発する、十分に準備しておけそれでは解散。」

そう輝元が言うのと輝元は、その場を去ったそして家臣たちも自分の屋敷に帰った。もちろん銀時も町外れの自分の屋敷に帰っていた。そしてそれから明後日後とうとう安芸の国をたち織田領の尾張に遠征する日がやってきた。そして銀時は屋敷で鎧を着て自分の愛馬にまたがり厳島に向かった。そして厳島に着くとそこにはもう家臣たちがいって参拝していたもちろん銀時も参拝した。そして

「皆のものこれより織田領の尾張に行く、そうとうな長旅になるから覚悟しておけ。」

「おお！」

そう輝元が言うのと輝元は馬にまたがり尾張に向けて出陣した。銀時も馬に乗っかって出陣した。

毛利軍が安芸の国を出陣してから約3週間後、毛利軍は美濃の国にいた。

「やっと、美濃の国に入ったな、銀時。」

「あゝやっと美濃の国か、あとちょっとで尾張だな。」

そう銀時と輝元が、飯を食いながら雑談していた。

「そういえば銀時、お前確か尾張の国出身じゃなかった？」

「あゝそうだ、俺は尾張の国の出身者だ。」

「そっか、それじゃ久しぶりの里帰りだな」

「里帰りだゝ！俺にはもう里などない、俺はあの大六天魔王織田信

長に家族も仲間も何もかも奪われた、

だから、俺はあんたのここに来たのさ魔王を倒すために。」

そう銀時の過去が明らかになり、輝元が

「そうか、よし今日は飲め、今日だけは酒を飲んで酔って寝ろそれが今日の仕事さ。」

そう言つて、輝元は銀時に酒をついだ。そして二人は、大声を上げながら飲みあつてた。そんな時

「輝元様、尾張の反織田勢力から使者が来ています。」

「なにそれはまことか、よしすぐ行く。銀時、起きろ臨時の軍議だ。」

「そう言つと、輝元は銀時を連れて会見場所に行つた。輝元が着くとそこには鎧を着た若い侍がいた。」

「犬山一揆衆の桂小太郎と申します。今回は、我々のためにわざわざ遠いところから来ていただきありがとうございます。」

「うむ、それで桂殿犬山一揆衆は今どうなっている。」

「は、それが先週織田の軍が一揆衆の討伐に合い、全滅寸前になっています。現在は、美濃の岩村にいます。もう、我らだけで織田に抵抗する力は残っていませんなにとぞ毛利軍に合流させてください。」

「十分わかつた、これより岩村に行き犬山一揆衆と合流する。」

「ありがとうございます、輝元殿。」

そう、輝元が宣言している姿を見た後、銀時は桂の後を追つた。

「よう、銀時元氣にしてたか。」

「あゝ元氣にしてたよ、でもまさか幽霊に会うとは思つてもいなかつたぜ、ズラ。」

「ズラじゃない桂だ、でもお前が毛利に仕えているなんて思わなかつたぜ、お前は誰かに仕えるのはあれほど嫌がつていたのにな。」
そう銀時と桂が話していた。

「うるせなゝどうだつていいじゃねゝかゝ、それより高杉や坂本は

生きてんのか。ズラ」

「ズラじゃない桂だ、あゝ生きているさ。」

「そうかそれは良かった、あんどきにもう全員死んだのかと思っただぜ。」

「まゝな、俺も死んだのかと思っていたぜ。」

「でもまさか、一揆衆を率いているとは思わなかったよ、でも全滅寸前だけだな。」

「それでも抵抗はしてたんだぞ、ま、結局こんな状態になったけどな。」

「まゝ今日は、酒飲んで今の思い出について話そうじゃないか、なゝズラ。」

「ズラじゃない桂だ、何度も言わせるなその呼び方はやめろって昔から言ってるじゃないか。」

「わかった、わかった。」

そう、銀時と桂が二人で飲みながら会話していた。そして、日が昇り出発のときが来た。

「これより、犬山一揆衆と合流しに行く。皆のもの遅れをとるなよ。」

「オー！」

そう輝元が、言い岩村に向かった。

毛利軍が一揆衆の使者に会い岩村に向かっていた。そして、岩村に到着し一揆衆の使者が岩村城の廃城のどこまで案内した。そして、その門の前で使者が

「桂小太郎だ、毛利軍を連れてきた門を開いてくれ。」

そう、大きな声で言う目目の前の大きな門が開き桂は城の中に入ったそれに続くように毛利軍も入城した。そして、城の中に入ったら一人の男がいた。

「これは、毛利輝元様、わざわざ遠い安芸の国からのご足労まことにありがとうございます。申し遅れましたそれがし、織田に反逆する一揆衆、犬山一揆衆の頭領高杉晋助と申します。」

「うむ、大儀である。早速我ら毛利軍に合流することで良いな。」

「は、是非毛利軍に合流させてもらいます。」

「よし、それでは早速この城を我が毛利軍がこたびの遠征の基地として徴用させてもらうぞ。」

そう、輝元が大声で犬山一揆衆との合流を宣言し岩村城を遠征基地にすると毛利軍に伝えた。

「どうだ高杉、俺のこの大将は？」

銀時が高杉に話した。

「まゝいいじゃないか、兵士たちには信頼されているし、しかも一揆衆をすんなりと受け入れるなんて、

どんだけうつわがでかいことが。」

「そうか、そういえば坂本元気にしてるか？」

「あゝ今、屋敷の中で酒飲んでるわ、まったくあいつはいつも酒飲んで寝てそしてまた酒でいつもそうしてるさ、ま、戦のときはあゝ見えて結構強いからな。」

「そうか、それは良かった、みんなあの時にみんな殺されていたと思っていたよ。」

「俺らが、あんなやつにやられるわけないだろ、ただ他のやつらは死にしまったけどな。」

「・・・・・・・・」

「ま、今頃そんな話しても死んだやつらは帰ってこないよ、さてと、屋敷に行つて坂本と桂と一緒に飲もうや。」

「あー、そうだなよし今日はいっぱい飲むぞ。」

そう言いながら高杉と銀時は桂と坂本がいる屋敷に向かった。

「あはは、よう金時元気にしてたか？」

「うるせよ、俺は銀時だてめガキのころからまったく成長してないな。」

「あははは、まゝそう怒らずほれ酒でも飲めや。」

「たく、坂本お前それで今日何本目だ、あんま飲むなよ。」

「そうだぞ、辰馬いつ敵が攻めてくるかわからんだぞ。」

「大丈夫じゃ、おまんらが（お前らが）50人敵倒したら俺が100人倒しちゆきね、あははー」

そう、銀時と桂、高杉、坂本が話していた。そして彼らは、朝まで飲んで酔いつぶれていた。そして四人ともぐすつりと寝ていた。

毛利軍が犬山一揆衆と合流してから数日後銀時はのんびりと美濃の岩村城で過ごしていた。

「よゝ銀時起きてるか？」

「あゝだれだ、なんだ高杉かなんかようか？」

「ちよつとお前と話したくてな、なゝ銀時覚えてるか俺たちが初めて会った時のこと。」

「あゝ覚えてるさ、それがどうした？」

「あんときは今より結構楽しかったな。」

「まゝ確かにそうだけど今も楽しいぜ。」

「松陽先生が死んでもか。」

「・・・・・・」

「ま、お前がどう思っ生きてるかなんてどうだっていい、ただ、俺は先生を奪ったあの織田の野郎は絶対許さないあいつが先生を奪ったように俺はあいつから何もかも奪って壊してやるて決めたんだ、なゝ銀時お前は信長の奴を憎んでいないのか、お前は信長の奴を倒すために毛利に仕官したのだろうだつたら俺についてこい、俺はこの一揆衆を合流させた理由教えてやろうか俺は新しい義勇軍を作りたいんだこの一揆衆よりもはるかに強い俺の軍を作りたいんだ銀時お前今じゃ「白夜叉」とか呼ばれてるんだろうお前さえいれば織田を倒した後天下統一だってできるのだぞ、どうだ銀時この話乗るか？」

そう高杉が銀時に聞くと銀時は高杉の方向に向き

「俺はパスするわ、だて俺は織田なんか今じゃどうだっていいし、もちろん天下なんかどうだっていい、

ただ俺は安いものの為に戦っているんじゃない俺は守りたいものがある

るから戦っているんだよ今の時代は敵

なんかとっているひまがあるなら俺はのんびりと過ごしたいわ、
だがな高杉俺は織田を許したわけじゃ　ねもちろん恨んでいるさ、
松陽先手を奪ったやつだからなでも、憎しみはまた別の憎しみを生
むだけだ

そんなんだつたら憎まないほうがいいと思ってさ、そして少し
でも樂できるだろう、ま、そういうことだ高杉てめがなにしよう
と好きにするがいいただ俺が守ってるもんには傷つけたらてめを許さ
ないから　な、いちよういったからな氣をつけろよ」

そう銀時が高杉に言うのと銀時はその場を後にした、そして

「ふゝん、昔から変わっていないバカだな。」

そう言い残し高杉は岩村城を後にした。

翌日

「これより、長篠に向うぞ織田・徳川・浅井連合軍が武田・上杉・
伊達連合軍と対立してゐるらしいそこに

我らが毛利軍が参戦する伊達には以前の借りもあるしな、これか
ら大戦が始めるみながんばって生き残　ってくれ、よいな。」

「おー！」

毛利軍10000の軍が岩村城を出発した犬山一揆衆を合流させ
大軍となった毛利軍は長篠に向った。

浅井・徳川・織田連合軍と伊達・武田・上杉連合軍が長篠で対立
していた。にらみ合いの状態が続いていた。だが伊達軍・浅井軍が
衝突し長篠の戦いが始まった、織田・徳川連合軍と武田・上杉連合
軍の間でも戦いが始まった、双方互角の戦いが続いていた伊達・浅
井の方も互角の戦いが続いていた。

「HA、こんなもんじゃねだろうがもつとかかってこい。」

そう戦場で叫んでいたのは奥州の独眼竜伊達政宗であつた、彼は次
々と浅井・徳川・織田連合軍の兵士を次々と斬っていた、そして政
宗が敵軍の兵士を斬って馬にまたがって移動していたら前方から紅
白の鎧を着た武将が前方より接近していたのであつた。

「HA、なんだありや変な奴だが強そうじゃねか。」

「悪は削除する、それが我が使命である。」

そう叫びながらお互い同時にさやから刀を抜き「カキン」という音が戦場に響いた。

「HA、やるじゃねかたいていの奴はもうここでやられてるのにあんたどこのどいつだ。」

「我が名は浅井長政、悪を削除するものなり。」

「浅井長政？」

「いかにもそういう貴様は？」

「俺か、俺は奥州筆頭伊達政宗だ。」

「貴様があの独眼流かだったら悪とみなし即刻削除するのみ。」

「まゝそんなに熱くなるなよ、もっとCOOLに行こうぜ。」

「奥州筆頭伊達政宗推して参る。」

「来い、貴様を即刻削除する。」

そして、政宗と長政の一騎打ちが始まった、お互い息をする暇もなく刀を振っていた、政宗は久しぶりに竜の爪で戦っていた、長政も懸命に政宗に対抗した、二人が熾烈の戦いを繰り返していたころ、毛利軍は馬をもつごいスピードで走らせ長篠に向っていた。

伊達軍・浅井軍が戦っていたころ武田・上杉連合軍・織田・徳川連合軍は、猛烈な戦いを繰り返していた、上杉・武田は自分らが得意とする戦術で織田・徳川連合軍と戦っていた。

「お館さまー！！」

そう叫びながら敵兵士を斬っていたのは、武田の若き虎真田幸村であつた幸村は次々と徳川・織田連合軍の兵士を斬っていた。

「ほゝあ奴やるなゝだが、戦国最強本多忠勝出撃せよ！」

「本多忠勝だ、逃げるゝ」「冗談じゃない」そう、上杉・武田連合軍の兵士は次々と逃げ出して行った。しかし、本多忠勝の前に一人の武将がいた。そう、真田幸村であつた。

「貴殿が本多忠勝殿か。」

「あゝ戦国最強本多忠勝だ。」

「ということは、貴殿が徳川家康殿か？」

「いかに、それがし三河の徳川家康だ。」

「お館様、忠勝殿ことはそれがしに任せてくださいお館様は家康殿相手をお頼み申す。」

「分かった、幸村この場は預ける。」

「心得申した、お館様。」

そう、幸村が武田信玄に言うとき幸村は忠勝に向って突っ込んでいった。

「忠勝殿いざ参る。」

「……」

「久しぶりだな、家康。」

「信玄公、お久しぶりです。」

「家康、まだ織田に着くか？」

「はい、まだ徳川と織田は同盟を結んでいます、絆の力で天下を治めるためそれがしはその絆を裏切ることはできませんぬ。」

「だが、織田は恐怖で天下を統一しようとしておるそんな奴が絆で天下を治めるお前がこのまま同盟を結んでいてもいずれば、滅ぼされるのが目に見えておる家康最後の勧告だ今ここで織田との同盟を破棄し 我らにつけとも織田を倒そうではないか。」

「それは、出来申さん。」

「それは、なぜだ家康？」

「もしここで織田との同盟を破棄したら盟約違反になるとちみち戦わなくてはならない、それがしは、絆の力で天下を治めるそれを邪魔をするなら容赦はしない信玄公。」

「そうか、ならばわしも容赦はしない。」

「行くぞ、家康！！」

「来い、信玄公！！」

そのころ、長篠に向っていた毛利軍はもうすぐ長篠に着こうとしていただが、その毛利軍の前に一つの軍が現れたそれは

「毛利よ、これより先は我が北条家がの名のもとに貴様に制裁を下

す。」

「あれは、関東の覇者北条氏政、北条め織田に着いたか。」

「それゆけ、毛利の軍を蹴散らせ。」

「オー!!!」

「仕方ない、行け北条軍を撃破する行くぞ。」

「オー!!!」

北条軍と毛利軍の戦いが長篠の郊外で始まった。長篠の方も熾烈の戦いを繰り広げていた。戦の果てに勝つのは東か西か東西の戦いが長篠で繰り広げていた。

長篠郊外では、関東の覇者北条氏政と中国の覇者毛利輝元が戦っていた、お互い互角の戦いを繰り広げていた銀時は次々と北条軍の兵士を斬っていた。

「どけどけえー!!!ざこは引っ込みな。」

銀時は白夜叉の名前のままの姿だった、銀色の髪に血を攻め戦場を駆ける姿はまるで鬼のようだった。そんな、銀時の姿を見て逃げ出す兵士もいた。だが、銀時は自分に斬りかかってくる北条軍の兵士ども斬り捨てていった、しかし北条軍も負けておらず次々と兵士を戦場へと送り出しただが、毛利軍も旧犬山一揆衆と合流し戦力はかなり上がったていた。

「銀時!」

「何だ、ズラなんか用があるのか?」

「ズラじゃない、桂だ。お前以前より強くなってるねえか。」

「うるせな、そんなことしゃべってる暇あったらもっと集中しやがれえ、コノヤロー!!!」

「だまれ、銀時後ろ。」

「おっと、危ねな。」

「お前もちゃんと集中しろ、死ぬぞ。」

「うるせな、んなこと分かってるわ。」

銀時と桂がお互いの背中を預けて北条軍のど真ん中で戦っていた。

「おーやってるの、よしそろそろわしも本気を出すかの。あはは

！。」

そう言いながら敵兵士を斬っていたのは坂本辰馬だった、彼は銀時にももちろん桂に劣らない強さだった辰馬は、次々と斬りかかってくるものを斬っていた。

毛利軍本陣

「輝元様、さすがですね犬山一揆衆は。」

「うむ、あれが反織田勢力だった一揆衆強すぎるあれだったら織田と対等に戦えたのに。」

「輝元様、大変です、北条軍が長篠方に向っています」

「なに。」

「おそらく、織田軍と合流して一気に伊達・武田・上杉・毛利をまとめたたくつもりかと。」

「輝元様、どうしますかこのまま追撃しますか？」

「我々毛利軍はこのまま北条軍を追撃し長篠で勝敗を決める。」

「心得申した。」

北条軍が長篠に向っていると知り毛利軍は追撃を開始し長篠で勝敗を決めるつもり北条軍を追撃した。

そのころ長篠では浅井・伊達軍の戦いがより一層過激を増していた。

「HA、そんなんじゃ竜の鱗一枚も取れねえぞ。」

「悪は削除するのみ、それが私の使命！！」

「上等、だぜえ！！」

長政と政宗一騎打ちはお互い互角の戦いを繰り広げていた政宗は六本の刀で戦っていた。だが、伊達政宗の家臣片倉小十郎が浅井の兵士を斬って浅井長政の方を見るとその後ろに織田の軍勢が接近してきたのであった。

「政宗様、織田の軍勢が迫ってきています。」

「ああ？」

政宗が長政の方を向くと鉄砲を持った織田の軍が迫っていたのであった。

「この戦、我が浅井の勝利よ。」

「まだ、勝負はついてねぜ。」

「この、状況でまだつかぬともうすか。」

「あゝその通りだ、この独眼竜が地に伏せるまで、奥州伊達は負けはしねえぜ、YOU, see?」

そう、浅井長政と話していたら

「バーン!!」

と銃声音が長篠全体に広がった

「な、なんだと。」

長政が地に倒れた、織田の鉄砲隊が浅井背後から撃ったのであった。織田軍は次々と浅井軍・伊達軍の兵士に向って発砲したのであった。浅井軍は全滅した浅井と同盟関係にあった織田が突如と浅井を裏切ったのであった、浅井軍を全滅させた後織田軍はまだ生きていた伊達軍と戦った。

「バーン!!」

伊達政宗と浅井長政が戦っていたときだった、浅井長政の背後で織田軍の鉄砲隊が浅井長政率いる浅井軍と伊達政宗率いる伊達軍を狙撃したのであったそして、政宗と戦っていた長政はその銃撃に合いい地に伏せた。

「なぜだ、どうして味方の軍を狙撃する我が浅井軍は正義のために戦ってきたのにどうして」

「まだ、わからないのですか。あなた方はもう必要ないということですよ。」

「明智殿！」

長政の目の前に織田軍の武將明智光秀が現れた。

「我々にとってあなた方は邪魔な存在なんですよ、浅井が滅べば近江は我が織田の物になるそもそも、浅井との同盟は越前の朝倉を攻めるための道具だったのですよ。」

「そんな、では、我はずっと騙されてきたのか？」

「そうです、あなた方は正義のためと言ってわれ我々織田軍のため

に良く働いてくれました、ご苦労様でした。」

「貴様!!!」

「さて、そろそろあの世へ行く時間が来たようですね。」

「まだ、死ねぬ、うう」

浅井長政は息を引き取った、正義のために戦ってきた長政だったが最後は皮肉な死に方であった。

「さてと、皆さんこれより浅井の残党と奥州伊達軍を殲滅しなさい。」

「おおー!!!」

「政宗様、織田の者たちが攻めてきました。」

「上等だ、人が楽しんでいたPartyを邪魔するなんていい度胸じゃねか、奥州筆頭伊達政宗、推して参る」

政宗は近づいてくる織田軍に突っ込んでいった。

「まったく、おめえら政宗さまの後に続けー!!!」

「おおー!!!」

伊達軍と織田軍の戦いが始まった、政宗は浅井長政とPartyしていたのに織田軍に邪魔され腹が立っていたため政宗は、織田軍の兵士たちを次々と斬っていた伊達軍の兵士も「筆頭!」「片倉様ー!!!」と叫びながら織田軍の兵士たちと戦っていた。

「やりますね、独眼竜だがもうあなた方の負けはもう決まっています。」

「明智様、北条軍がこちらに向っているとのこと。」

「そうですね、分かりましたそれでは後のことはまかせますよ。」

「お任せください。」

光秀は、織田軍本陣戻った。

そのころ、織田・徳川連合軍と武田・上杉連合軍は若干武田・上杉連合軍が優勢になっていた。

「いまじゃ、一気に徳川本陣を落とすのだ。」

「おおー!!!」

「私たちは、織田本陣を叩くのです私に続きなさい。」

「了解しました。」

武田は徳川本陣を上杉は織田本陣を目指し進軍していた。

徳川本陣

「何という強さだ、我が押されている。」

「さすがだ、信玄公強すぎる。」

「家康様、どうしますか撤退しますか？」

「いや、まだ撤退しないここで今撤退すれば盟約違反になる。」

「しかし、ここまま戦い続けると全滅します。」

「家康様、大変です。」

「どうした、なんかあったか。」

「浅井軍が織田軍に狙撃され全滅しました。」

「なに、それはまことか。」

「まことでございます、現在伊達軍と織田軍が戦っています。」

「家康様、我々もそのようなことになるかもしれませんがここは撤退すべきです。」

「仕方ない、徳川軍全軍に伝える全軍撤退せよ。」

「撤退だ、引けえ引けえ！！」

徳川軍は浅井軍の全滅を受けて撤退を開始した。武田軍は徳川軍を追撃を開始した。

「これより、武田軍はこのまま徳川軍を追撃する、わしに続けえ！！」

「心得申した、お館様。」

徳川軍が撤退を開始したところ毛利軍は北条軍を追って長篠について北条軍と戦っていた

「しつこいな、てめえらに要はないって言ってるだろうが。」

銀時は、そう言いながらバツサと北条軍の兵士を斬った毛利軍と北条軍の戦いはより一層ヒートアップしていた。

徳川軍が撤退した後長篠では、織田・北条連合軍と上杉・伊達・毛利連合軍が戦っていた武田軍は撤退した徳川軍を追撃していた織田・

北条連合軍はより一層不利な戦いになっていた、だが、織田軍はこのとき美濃から派遣していた大軍の鉄砲隊が到着しており織田の鉄砲隊は次々と上杉・伊達・毛利連合軍を狙撃した、圧倒的な差だった兵士の数では上杉・伊達・毛利連合軍が有利だが戦術では織田・北条連合軍が有利だった織田本陣に突撃した上杉軍は到着した鉄砲隊に狙撃され全滅必死だった。

「なんという、鉄砲の数だこのままだと全滅してしまう全軍一時撤退せよ！！」

「了解しました。」

上杉軍は織田軍の鉄砲隊の狙撃をもろ受け全滅寸前になり上杉軍はよぎなく撤退した、これで長篠で戦っているのが伊達・毛利連合軍と織田・北条連合軍だった。

「HA、もつと食らいつきな。」

独眼竜伊達政宗は、織田・北条連合軍の兵士と戦っていた。

「政宗様！！」

「何だ、小十郎。」

「上杉軍が撤退しました。」

「軍神が引いたか、小十郎今この長篠にいる軍は？」

「現在、味方は伊達軍と毛利軍しかいません。」

「おい、武田のおっさんはどうした？」

「武田軍は徳川軍を追撃しています。」

「なにやってんだ、武田のおっさん、あんたがいないとこの戦い負けるぞ。」

そう、小十郎に話していると政宗の背後から鎌のようなものが政宗の背中を斬り裂こうとしていた、だがそれにいち早くきずいた小十郎はすかさず政宗を守った。

「おいしいですね、あと少しだったのに。」

「てめえは、明智光秀。」

「これはこれは、奥州の若き竜ではありませんか。」

「なんでてめえがこんなところにいるんだ。」

「いいじゃありませんか、あなたがたを一気に殲滅できるのですから。」

そう言った明智光秀の背後には大軍の鉄砲隊が狙撃の準備を始めていた、光秀は一気に伊達軍を全滅させようとしていたのであった。

「HA、そんなことはさせね奥州伊達軍は不滅だぜ。」

「政宗様、一端兵を引きましようあの鉄砲の数は半端じゃありません不滅で言ってもあの数ではとても勝てませんここはいったん引きましよう。」

「・・・撤退だ小十郎!!」

「撤収!!」 「撤退だ!」 そう伊達軍の兵士が叫び撤退のホラ貝がなった、政宗は自分の愛馬にまたがり長篠の地をもうダッシュで馬を走らせ後にした、そのころ武田軍は徳川家康が織田を裏切ると申し長篠に向っていた、だが、武田軍はこの知らせを聞き甲斐に撤退した、毛利軍は伊達軍の撤退する姿を見て勝ち目なしと判断し長篠の地を後にした、長篠戦いは織田軍が勝利した。大きな犠牲を出して、武田軍は負傷した兵士を受け入れると申し上杉軍・伊達軍・毛利軍・徳川軍はこれを受け入れ四軍は甲斐に向った。

毛利軍・徳川軍・上杉軍・伊達軍の四力国軍は甲斐の国の武田軍の本拠地にいた、四力国軍は先の長篠の戦いで負傷した兵士たちの手当てをしていたその間四国軍の総大将が話し合いをしていた。

「長篠の戦いで多くの兵士が死んでいったの、謙信よ。」

「そうですね、多くの者たちがなくなってしまいましたね。」

「HA、まったく魔王のおっさんのせいで怪我してしまっただぜ、な、小十郎。」

「は、今回の失態申し訳ありません。」

「別にいいさ。」

「皆の衆、わしから意見があるのじゃが良いか?」

「どうした武田のおっさんなんかあるのか?」

「うむ、今回の戦で分かった通り織田の脅威分かっていただけだと思う、このまま織田を放置しておれば」

日の本はやがて焦土となってしまうだろうそこで、織田を包囲する同盟を結びたい、東は伊達・武田・上杉・徳川とそして西は本当は浅井と同盟を結びたかったのじゃが長政が死んでしまった以上浅井とは

組めないとなると残るは毛利・長曾我部・島津と組んで一気に織田領に攻め込み信長の首を取る。」

「壮大な、織田包囲網だな。」

「だが、たとえ東国が同盟を結んだとしても西国の島津と長曾我部がわが毛利と同盟をすんなりと結んでくれないと思う、二国とは昔からにらみ合っているから、なかなか承諾してくれないと思う。」
「確かに、東国はなんとかなるでしょうが西国の二国が手を組んでくれると思わない。」

「長曾我部は俺に任せてくれ元親とは昔から仲がいいんだ、俺が仲裁してやるよ。」

「そうか、では任せたぞ家康。」

「任せておけ。」

「あとは、島津ですね。」

そう、島津について話し合っていると「お館様、一大事です!!」と叫びながら会談の場に現れた。

「なんだ、佐助なんかあった？」

「お館様、九州の島津が織田に討たれました。」

「なにそれはまことか。」

「はい、魔王は長篠より大急ぎに兵士を引き上げ体制を整えて九州遠征に出陣し島津軍を壊滅させ九州全土を焼け野原にし引き上げたそうです。」

「これで、南端は。」

「魔王のおっさんの物に。」

「皆様方、我が毛利は一端安芸に撤退します今後対策も練る必要がありますので、これで失礼します。」

「お気を付けて。」

「言い忘れていましたが、我が毛利は織田包囲網に参加しますのでお忘れなく。」

「武田のおっさん俺も奥州に引き上げるぜ。俺も包囲網には参加するからな、じゃあな」

「分かった。」

「信玄公、それがしも三河に帰らせてもらいます。わしも参加しますからな。」

「信玄、私も越後に一端引き上げます。」

「分かった。」

四力国軍が包囲網に参加すると表明しそれぞれ本国に引き上げた。

毛利軍が長篠の戦いで敗北し武田の甲斐の国で織田包囲網について話していたが、織田軍が日の本の最南端島津が撃破され西国は毛利・長曾我部の二国だけとなり毛利軍は大急ぎで中国地方に引き上げていった。

島津が撃破されてから、数週間後、輝元は各地の情報を集めていた。そして、輝元は銀時と将棋をしていた

「いやゝしかし困ったもんだ、まさかあの島津が織田に撃破されるとは思わなかった、銀時よ。」

「本当、あの鬼島津がねゝ王手飛車取り。」

「え、ちよつと待ってくれ。」

「だめだ、輝元これで待った何回目だと思ってんだ。」

「いいじゃん別に。」

「ダメ。」

「輝元様、大変です!!」

「どうした、何かあったのか？」

「は、四国の長曾我部元親から書状が届いています。」

「ほう、あの長曾我部が珍しいこともあるの。」

「それで、なんて書いているんだ輝元。」

そう、銀時に言われ輝元は書状に書かれた文を読んだ。

「今回の織田軍による九州大遠征である鬼島津がやられた、しかも

織田の野郎は今軍を整えてこの四国を

攻めようとしているもしこの状況で、織田軍が四国を攻められたら西国のほとんどは織田の物になりあんなのともすぐに攻められる、そこでだ輝元、一端対織田の共闘を結ぶために一端休戦しよう。」

「って書いてる。」

「あの西海の鬼がね、休戦を要請するとはね。」

「ま、これで織田包囲網が完全なものとなった、東国は伊達・徳川・武田・上杉それに対し西国は毛利・長曾我部の二国、ま、我が毛利がいれば確実に織田を滅せることができる。」

「いよいよ、織田と本格的に戦うんだな。」

「あゝ、そうだ銀時、おい元春。」

「は、何でしょうか、輝元様。」

「この長曾我部の同盟をほかの国に知らせを出せ。」

「は、心得申した。」

「さてと、銀時行くぞ。」

「行くってどこに？」

「何言ってんだ、長曾我部に会いに行く。」

「へゝそれでどこに行くんだ、まさか四国ってことはないよな。」

「厳島に向う、お前もついてこい。」

「分かった。」

書状が届いてから数日後、輝元は厳島の厳島神社にいたここで西海の鬼と会うことになっていた。

「よゝ久しぶりだな輝元。」

「これはこれは、元親久しいの。」

「あゝ久しぶりだな、早速なんだがそっちはこの同盟に乗るか、乗らないのかどつちなんだ輝元？」

「何を申す我がこの同盟を承諾してなければこんな場所にはいない。」

「ま、そうりゃそうだ、んで、あんたこれからどうするんだ？」

「我はこれより織田領に向けて進軍を開始するつもりだが貴様はどうする。」

「俺は、海から織田領を攻めるつもりだがそれでいいだろう。」

「よし、では長曾我部は織田包囲網に参加するのだろ。」

「もちろん、織田を倒すためにはあんたらの仲間になった方が得だぜ。」

「分かった、では、これにて失礼する。」

「それじゃな、毛利よ。」

こうして、毛利と長曾我部の同盟は成立した瀬戸内を守る者同士が織田を倒すために結託したのであった。毛利は陸側から攻め、長曾我部は海から織田領に進軍した。

「野郎ども、この富岳で織田の野郎をぶっ飛ばすぜ。」

「アニキー!!」

「いいか、我が毛利はこれより陸路から織田領に向けて進軍する、吉川・小早川は姫路方面から穴戸・赤川は鳥取方面から進軍せよ、なお、本隊は、時が過ぎ次第出陣する。」

「おー!!!」

毛利・長曾我部は一斉に織田領に進軍した、一方東国の奥州の伊達軍が軍を整えて第六天魔王織田信長の首を取るために奥州を出陣し織田信長がいる本能寺に向った、徳川・武田・上杉の軍も一斉に織田領に進軍した。

毛利・長曾我部・徳川・伊達・武田・上杉が一斉に織田信長が治める領土に一斉になだれ込んだ、毛利軍は、陸側から長曾我部軍は海から織田領に進軍した一方東国の徳川・伊達・武田・上杉は武田軍は織田軍と同盟を結んでいた北条軍と戦っていた、上杉軍は北陸から進軍し徳川軍は武田軍に対して援軍を送ったり西へ進軍したりしていた、そのころ奥州伊達軍は奥州より直接第六天魔王織田信長の首を取ろうと考え伊達軍総帥伊達政宗は6500の兵士を引き連れて奥州を出発した、政宗は魔王の本拠地京の本能寺に向った一方一斉に自国の領土に敵軍がなだれ込んだとことを受けて魔王こと信

長は各地に軍を送り進軍を阻止しようとしていた、そして中国地方から織田領に進軍していた毛利軍と織田軍が播磨の国の赤穂で対立していた、姫路方面から進撃していた吉川・小早川は毛利輝元に援軍を要請し輝元は早速10000の軍を率いて赤穂に出陣した、もちろんその中には銀時の姿もあったそして、毛利軍本隊が赤穂に到着し軍議が始まった。

「これより、軍議を始める敵の動きつかめたか？」

「物見からの知らせではこれが現在の情勢です、敵総大将織田信忠は朝日というところに本陣を構えています、両軍の中央には千種川という川が流れています橋もおとさせておりここは一気に川を渡る以外ございません。」

「なるほど、小早川よ毛利水軍に播磨灘にすぐ来るよう伝えよ海から織田本陣に砲撃をする。」

「御意。」

「ほかの物は、明日一気に織田軍に攻めかかる良いな！」

「おー！！！」

そして、軍議が終わり皆敵の襲撃に備えて寝た、そして翌日空は鉛色のした雲がどんよりと広がっていたいかにも雨が降りそうな天気だった、そんななか毛利軍と織田軍が衝突した、千種川は倒された兵士たちの血で真っ赤に染まったそしてその川で銀時は織田軍の兵士たちを鬼のように斬っていた、織田軍は次々と兵士を送ってくるがそのたびに毛利軍に撃破されたそして輝元が要請していた毛利水軍が到着し海から織田本陣に対しほうげきが始まった、織田本陣は混乱状態に陥っていたそして銀時は織田軍兵士次々と斬りながら織田本陣にたどり着いた。

「てめえか、魔王のジジイが送ってきた織田軍総大将織田信忠とは？」

「あゝそうとも私がそうだ。」

「そうかい、だったらあんたの首この俺がとってやるぜコノヤロー！！！」

「私の首を取るか、おろかなそのような奴は私が退治してくれようぞ。」

「ようやくやる気になったみたいだな、いざ尋常に勝負!!」

「オー!!!」

双方の刃が互いに「カキン」という音を鳴らした。

「やるじゃね〜か、久しぶりにいい喧嘩になるぜ。」

「戦を喧嘩と呼ぶんじゃないよ、ここは命の取り合いなんだよ。」

「うるせえ、俺はただ喧嘩しに來ただけなんだよ俺はこの剣がある限り俺は守りものがある限り俺はずっと戦い続けるぜコノヤロウー!!!」

そして、再び二人の刃が重なり合った時「カキン」という音が合戦上に響きまわった銀時の後ろで血を出しながら地に倒れた織田信忠は銀時の一騎打ちに負けたのであった、銀時は信忠が倒れた方向を向いて信忠の亡骸を見て、

「あんたとは、もう一回やりたかったぜ。」

そういい、銀時は信忠の首を取った赤穂の戦いに勝利した毛利軍は姫路に向けて進軍を開始した、一方負けた織田軍は姫路に向けて大急ぎで撤退した。

織田軍が赤穂の戦いで毛利軍に撃破されてから数後日、毛利軍が姫路に到着し陣を敷いていた時毛利輝元に驚きの報告が入った。

「輝元様〜!!! 一大事です!!!」

「どうした、何かあったのか？」

「は、昨日6月2日京の本能寺にて織田信長が討たれました。」

「そうかそうか、ってなんじゃとそれはまことか。」

「は、昨夜に本能寺にて宿泊していた所を奇襲に会い本能寺で自殺したのところでございます。」

「それで、奇襲した奴は誰だいたいどのどいつじゃ？」

「は、報告によればもと犬山一揆衆に所属していた高杉晋介というものが鬼兵隊という義勇軍を編成し本能寺を襲撃した模様です。」

「おい、高杉がやったというのは本当か？」

「はい、おそらく本当でしょう。」

「あの高杉が第六天魔王を討つとは思わなかったな銀時よ。」

「あゝ、まさかあの野郎がもっと詳しく教えてくれ。」

「は、分かりました。」

1582年天正10年6月2日早朝 京の本能寺

「いいか、これより第六天魔王織田信長が宿泊している本能寺を襲撃する、魔王を恐れるな信長の首さえ取ればこの国は救われる恐怖による支配から解放される、俺たち鬼兵隊が魔王からこの国を開放するのだ、だから皆命をかけて戦うのだからいいな！」

「おおー！！！」

「敵は本能寺にあり！！！！」

「おおー！！！！！！」

そして、高杉率いる鬼兵隊が本能寺を完全包囲し終わると高杉が攻撃の合図をし本能寺を攻め始めた。

「上様、上様大変です。」

「どうした？」

「は、奇襲です。」

「敵は何者ぞ。」

「それが、どこの軍が分かりません。」

「ふん、まあいいさ蘭丸すぐ支度し奇襲をかけたものを蹴散らすぞ。」

「

「心得ました、上様。」

「おおー！信長の首を取れ。」

そう叫びながら織田軍と戦っていた鬼兵隊の隊員は次の瞬間「バーン！」という音を立てて地に倒れた。

「この、魔王には向かったには死ぬ覚悟できたであろうの。」

「あんたかい、第六天魔王を名乗っている大馬鹿ものは？」

「お主は何者ぞ？」

「俺かい、俺は尾張出身の高杉晋助だ第六天魔王織田信長の首を取りに来た男さ。」

「小童め、お主の首がなくなるやもしれんぞ今ならまだ間に合うぞ。」

「そうかい、だったらさっさとお前さんの首とらせてもらってさっさと引き上げますかね。」

「ごさかしい、貴様のような者はさっさと消え失せる。」

「そういいと信長は腰にさしてた刀をスツと出し戦闘状態に入った一方高杉も刀を鞘からだし先頭の構えを取った。そして、本能寺の本堂に火がつけられて本堂が激しく燃えだした。

「いくぜ、てめえーの死に場所にはふさわしいじゃねーか？」

「小童、その口永遠に聞けぬようにしてやる。」

「そう信長言った瞬間二人の刀が「カキン」という音を何度も何度もたせながら二人は斬り合ったお互いほぼ互角の戦いであったが高杉が信長が油断を許した瞬間風を切るような音たてて信長を斬った。

「ふん、貴様我を倒して貴様はなに求める？」

「決まってるじゃねーか、俺はただ天下ほしただけさあんたは邪魔だったしあんたは俺の師匠の命を奪った張本人だったからとらせてもらっただけさ。」

「ふん、貴様がつくる天下を見てみたかったの、我は第六天魔王織田信長ぞ我はこんな場所で死ぬわけにはいかぬ……」

第六天魔王織田信長は本能寺でこの戦国時代から去った、信長による恐怖による支配は終わった。

「第六天魔王はこの鬼兵隊首領高杉晋助が討ちとった、そしてこの瞬間信長が治めていた領土は我々鬼兵隊が統治するこれより鬼兵隊は天下統一を目指す。」

「おおー！！」

「で、以上でございます。」

「第六天魔王が死んだ今次はどうする輝元よ？」

「今、旧織田領を攻める理由がないこれより毛利軍は撤退する、すまぬが鳥取方面にも伝えてくれ。」

「御意。」

各地の織田領に進軍していた毛利・長曾我部・徳川・上杉・伊達は撤退を開始した武田軍は北条軍と和睦し甲斐の国引き上げた、第六天魔王織田信長による恐怖による支配は完全終わったそして日の本の中央には「織田」という文字は消え「鬼兵隊」という義勇軍の名前が中央にあった。こうして本能寺の変で織田信長は戦国の世から消えたのであった。

出演

坂田	銀時
毛利	輝元
島津	義弘
伊達	政宗
片倉	小十郎
浅井	長政
桂	小太郎
高杉	晋助
坂本	辰馬
武田	信玄
真田	幸村

戦国BASARA

銀魂

原作

坂田銀時

演出・シナリオ

長曾我部家臣

織田家臣

北条家臣

上杉家臣

武田家臣

徳川家臣

伊達家臣

島津家臣

毛利家臣

織田 信忠

山名 豊国

山 賊

屋敷の持ち主

織田 信長

長曾我部 元親

明智 光秀

北条 氏政

上杉 謙信

徳川 家康

猿飛 佐助

2010年6月28日

戦国乱世製作委員会

戦国乱世シーズン其ノ壱（総集編）（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回「戦国乱世」シーズン其の壱の総集編を送らせていただきます、結構長いので読むのに大変ですがどうぞお楽しみください。

霸王降臨（前書き）

前回の「本能寺の変」で最終回とさせていただきましたが、今回より「戦国乱世」のシーズンⅡを始めさせていただきます。

霸王降臨

第六天魔王織田信長が本能寺で散ってから4ヶ月後日の本は今だ戦乱の世であった、織田信長を倒した高杉晋助率いる鬼兵隊は中央を統治し少しずつ領土を増やしていった織田家と同盟を結んでいた北条家は織田が滅亡し少し勢力を弱めたが今だ関東を治める大名であった、三河の徳川家康は武田・北条・鬼兵隊が互いに戦力を削っているのただ見ているだけであった四国の長曾我部元親は四国で要塞富岳のさらなるパワーアップを目指し日々研究をしていた、そして甲斐の武田は越後の上杉と川中島で雌雄を決していた、そのころ奥州の独眼竜伊達政宗は勢力の拡大を目指して日々奥州周辺国に遠征に出陣していた。そして、銀時がいる中国の毛利は特に目立った動きを見せていなかった。

「銀時よ、この中国も以前より比べると平和な地になったの。」

「そうだな、城下もにぎやかだし周辺国も全く攻める気配もないし平和なとこだね。」

「まったくだ、そうだよなあははは。」

「王手飛車どり。」

「ちょっと待ってくれ。」

「ダメだ、これで何回目だと思っているだ。」

「まゝそこを何とか。」

「ダメ。」

そっさいながら銀時と輝元はのんびりと将棋を打っていた。

「たく、しょうがねゝな、今回ただぞ次はねえからな。」

「分かった、分かった。」

「輝元様、輝元様一大事でございます。」

「よゝズラ、どうしたそんな険しい顔して道端でなんか汚いもの踏んだのか。」

「ズラじゃない桂だ、そんなわけないだろうそんなことより輝元様大変です。」

「なんかあったのか？」

「はい、鬼兵隊の首領高杉晋助が討たれました。」

「なに、それはまことか。」

「おいおい、冗談きついぜあの高杉がやられわけねーじゃん。」

「嘘ではない本当だ。」

「で、誰にやられたんだ？」

「それがいまだつかめていません。」

「おい、そこが肝心のところだろうたつくだからお前はズラなんだ。」

「ズラじゃない桂だ、何回言っただけなら気が済むんだこの天然パー

マ野郎！！」

「まゝまゝ二人ともその辺にしとけ。」

銀時と桂が口喧嘩をしそれをなだめていた輝元だった。

「相変わらず、面白いことやるね。」

「「誰だ！！！！」」

そつ三人が口をそろえて言った。

「これは失礼、俺は武田軍真田忍者隊隊長猿飛佐助。」

「これはこれは、わざわざ甲斐の国から来たのかご苦労様。」

「それはどうも、それはさておき今回の高杉の討ち死には知っているか？」

「知っているが誰がやったのかは分からぬとこだ。」

「そうかい、だったら教えてやるさ。」

「高杉をやったのは豊臣秀吉だ。」

「豊臣秀吉？誰だそいつは？」

「大阪に拠点を置く奴でね、今までは信長が死ぬまでずっと息をひそめて軍勢力をためていた奴でね、今回信長が死んでから勢力を徐々に拡大させていた、そして旧織田領を治めていた高杉と戦うために山城の国山崎で言うところで戦ったらしいが圧倒的に豊臣側が優勢だったらしい。」

「それでどうなった？」

「それで、高杉側が負けて京都に退却中に豊臣軍の奇襲に会い打ち取られたらしい。」

「豊臣秀吉か、まこと恐ろしい男よ。」

「それで、毛利の旦那お館様から伝言を預かってきた。」

「甲斐の虎が。」

「我々武田は、今回のことを受けてしばらく動かぬようにしようと思うそうなれば豊臣はまず西国から攻略するであろうおそらく最初は毛利だと思うそこで今は西国で連携を保つ必要がある、そこで再び長曾我部と講和を結んではいかがと思う。」

「分かった、甲斐の虎にはこう伝えてくれ我が毛利は豊臣側に着くと伝えてくれ。」

「……分かったそう伝えるよそれじゃ。」

「輝元、豊臣につくのか。」

「そうだ、なんか文句があるのか？」

「いや、でもどうして？」

「中国の民を守るためじゃ、豊臣の軍事力は圧倒的だそんな奴らと戦っても無駄に全力を削るだけじゃ、銀時行くぞ。」

「行くってどこに？」

「大阪だ、豊臣に同盟を申し込む。」

「そうかい、分かった。」

霸王降臨（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。シーズン弐が始まりました。

同盟

毛利輝元は豊臣秀吉と同盟を結ぶために輝元は銀時ほか400人の兵士を引き連れて大坂城に入城した。入城した輝元は秀吉と会見するための部屋に案内された。

「ここでお待ちくだされ。」

「分かり申した。」

「輝元よ、しかし大坂ってこんなにも発展していただなんて思わなかった。」

「確かに、そうじゃなこんな大きな街だとは思わなかった。」

「上様の御入来。」

「我が豊臣秀吉である。」

「私が中国地方を治めている毛利輝元である、それでこつちが私の家来坂田銀時です。」

「分かった、今回は中国よりはるばる大阪まで来ていただき誠にありがとうございます。」

「こちらこそ、謁見していただきありがとうございます。」

「それで、今回はなに要で参られた？」

「豊臣に同盟の申し入れをしに参った。」

「我が豊臣と同盟をしたいと。」

「我が毛利は四国の長曾我部との雌雄の決着をつけたいと思っている、そこに東から豊臣軍が攻めてきたら我が毛利は滅んでしまう、さらに貴殿方も高杉から奪い取った領土の平定や東国の動きも監視しなくてはいけない状況かと思えます、だからここは我が毛利と豊臣が同盟を結び西は我が毛利そして東は豊臣という風にすればたやすく天下をとれると思います。」

「なるほど、半兵衛どう思う？」

「そうだね、ま、輝元君の意見はなかなかいいもんだ乗ってもいいんじゃないかな。」

「分かった、我が豊臣は毛利と同盟を結ぶ。」

「ありがとうございます、秀吉殿。」

こうして豊臣秀吉と毛利輝元は同盟を結んだのであった。

同盟（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

淡路島の戦い「上」

毛利軍が豊臣軍と同盟を結んで数日後輝元は大急ぎで安芸の国戻って軍を整え出陣した、毛利軍は豊臣軍と合流するため大坂に向った。そして大坂に到着後輝元は豊臣軍軍師竹中半兵衛に会い四国征伐の軍略を練るため二人だけで話が始まった。

「竹中殿、これが我が考えた四国征伐の戦略図だ。まず、我が毛利が伊予の国を占領するさらに姫路から進軍させ讃岐の国も占領する豊臣軍は淡路から進軍し阿波の国を占領してほしい、我が本隊は豊臣軍とともに大坂を出発し淡路島を占領し一気に四国に上陸する。」
「なるほど、でもこの讃岐方面なんだがここに我が豊臣軍配置したのだからどうだろう輝元君。」

「ま、いいだろうただし我が毛利軍の邪魔をすらならば豊臣軍も長曾我部軍と同じ運命をたどることになるだろう。」

「つまりそれは、僕たち豊臣軍も滅ばすということなんだね。」

「いかにも。」

「分かった、豊臣軍は毛利軍に邪魔なことしなさ。」

「それでよい、では、行こうか淡路島に。」

「うん、そうだねじゃ行こうか。」

毛利・豊臣連合軍は大坂城を出陣した、総勢15000の軍が出陣した。そのころ、安芸・姫路から攻める部隊が出陣し四国攻めが始まった長曾我部軍はあちこちに軍を送ったが豊臣・毛利連合軍は次々に撃破されていった、そして、長曾我部軍は淡路に出陣し淡路の防衛にあたった。

「アニキ、大変ですぜ。」

「どうした？」

「この島全体毛利・豊臣連合軍に包囲されていますぜ。」

「なんだと！」

「しかも、相手は最新の大砲を所有しておりこっちにバンバン撃つ

てますぜアニキ。」

「よし、こつちも富岳で応戦しろ富岳の力あいつらに教えてやろつぜ。」

「『アニキー……！』」

そつといいと長曾我部軍は自軍が発明した要塞富岳を敵の船に向けて12尺の大筒を向け砲撃を始めた、大筒の威力はとてつもなく強く次々に軍船が沈んでいった。

「これが富岳の力、あれを我の物したい。」

「ま、確かにあの富岳はものすごい強力な兵器だ、是非我が豊臣軍の物したい。」

「竹中、そろそろ総攻撃をしかけてもよいな。」

「うん、構わない、全軍淡路島に上陸せよ。」

「毛利軍も淡路島に上陸せよ。」

毛利・豊臣連合軍は淡路島に上陸を開始した。

淡路島の戦い「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、明日になります。

淡路島の戦い「下」

毛利・豊臣連合軍は淡路島に上陸し長曾我部軍と戦っていた、その中には銀時の姿があった。

「あの、白い陣羽織を着た男の首取れ！！」

「なんだ、俺の首がほしいのか？それは悪いな～だってその前にあんたらの首とらせてもらったぜコノヤロウ！！」

そう言いと銀時の周りにいた長曾我部軍の兵士を斬った、一方豊臣軍の兵士は統制された軍と言っていいほど集団戦に追い込み敵を倒していった。

毛利・豊臣連合軍本陣

「輝元君、だいぶ長曾我部軍の兵士を倒せたね。」

「まだまだ、この島全体を制圧したわけではない。」

「ま、そうだけどこで長曾我部軍を叩いておくと後々の作戦が楽になる。」

「申し上げます、淡路島の北部を完全制圧しました。」

「御苦労、それじゃ輝元君僕らも行こうか。」

「分かった、では参ろうか。」

そのころ、銀時は長曾我部軍本陣のすぐ近くまで来ていた。

「ここから先は一步も行かせん。」

「どけえー！！ザコは引ッ込んでなコノヤロウー！！」

そう言いと、本陣を守る最後の兵士を斬って自分の刀を鞘に納めてから本陣に乗り込んだ。

「あんたか、大将は？」

「俺が西海の鬼の長曾我部元親だ。」

「そうかお前が、だったらあんたの首とらせてもらっぜ。」

「ほう、俺の首をとるかい度胸じゃねえ～かいいぜ、やってやるぜこの西海の鬼が相手してやるっぜ。」

「そうじゃね～と楽しくないぜ、んじゃ一つ相手してもらっぜ。」

「おうよ！！」

そう言いと元親は自分の大槍を構え、銀時は自分の刀を鞘から出し戦闘の構えをとった。そして、二人は大きく振りかりその戦場に「力キーン！！！」という音が大きく鳴り響いた。

「あんた、結構やるじゃね〜か。」

「おうよ、西海の鬼をなめるんじゃねえよ。」

「それは悪かった、てつきり弱いやつかと思っていたぜ。」

「あんた、俺を怒らせると怖いぜ。」

「だったら、怒ってみろよ俺がその鬼を退治してやるぜコノヤロウ！！。」

「なめた口でいつてんじゃねえと言いたいとこだがこの戦もつ俺たちの負けだ引き上げさせてもらうぜ。」

「ちよつと、待て逃げんな。」

「じゃ〜な。」

そう言い残し元親はその場から退却した、連合軍は淡路島を占領した。連合軍は淡路島に城を築きそこを四国征伐の本拠地を置いた。

淡路島の戦い「下」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の回を読んでいただきありがとうございます。

上陸

豊臣・毛利連合軍が淡路島に四国征伐の拠点となる城を築城して数週間後、竹中半兵衛と毛利輝元は天守で四国征伐の最終作戦について話していた。

「さて、いよいよ四国を本格的に攻める準備が整ったね、輝元君」
半兵衛が輝元に言う。

「そうだな、この淡路島を拠点に四国の長曾我部を討伐できる」

「そう、だからこれから四国本土での合戦が多くなる」

「そう言つと半兵衛は、四国が載っている地図を取りだした。」

「だから、これからは各方面から攻めて行く。毛利軍は伊予国と讃岐国から四国本土に上陸しその二カ国を占領してほしい。そして僕ら豊臣軍は、阿波国から上陸し阿波を占領する」

と輝元に四国征伐の計画を言う。

「しかし、これでは我が毛利軍の損害が大きいのでは」

「それは分かっている。だから、四国征伐が成功し長曾我部が降伏したあかつきには、四国の半分を毛利に渡すよ」

「半兵衛よ、それは誠か？」

「そう輝元が聞くと、半兵衛は頷く。」

「分かった、では明後日から四国に上陸したそう」

「そう言い残し、輝元は部屋から出て行った。」

明後日、毛利軍は伊予・讃岐の二カ国に上陸し占領し豊臣もその翌日に阿波国に上陸、占領した。

降伏

毛利・豊臣連合軍が四国征伐を開始してから、数か月戦況は連合軍が優位だった。長曾我部軍は土佐の国に追い込まれもはや、この合戦は連合軍の勝ちが見えていた。

毛利・豊臣連合軍本陣

「これで、この四国は僕たちの物だね輝元君。」

「まだよ、あの長曾我部が滅びなければこの戦まだ勝っていない。」

「ま、そうだけどこの状況では我々の勝利は確定している。」

「申し上げます、長曾我部元親が来ています。」

「とうとう、降伏に来たか。」

「すぐに会おうここへ連れてこい。」

「ははー!!」

「もう、この四国征伐も終わりだね。」

「そうだな、終わったな。竹中殿、秀吉殿は呼んでこなくていいのか？」

「あゝ秀吉なら今、ここにはいない。」

「それでは、どこに行かれた？」

「三河だよ、今徳川家康と会談中だ。」

「ほう、あの徳川が。」

「徳川が僕たち豊臣と同盟を結びたいと申し出があった。それに答えるために三河に行った。」

「そうであったか、でもこれで東国もより一層制圧しやすくなったな。」

「でも、まだ上杉・武田・北条・伊達がいるからなかなか制圧はたやすくはないよ。」

「元親殿が見えられました。」

半兵衛と輝元の前には傷だらけの元親の姿があった。

「君が西海の鬼こと長曾我部元親だね。」

「おう、そうだ。」

「それで、こんなところになに用だ元親。」

「俺たち長曾我部軍はあんたらに降伏する。」

元親は、悔しそうな顔で降伏を宣言した。

「それが正しい判断だ、元親君。」

「貴様が我らの軍門に降ったおかげでおおくの者が救われた。」

「これからは、僕たち豊臣軍の一員となって天下統一のため協力を
するところで誓えるか？」

「あゝ、誓ってやるぜ。」

「そうか、分かったでは早速君の処分を言う元親君、君のこれからの領土は土佐と阿波の2カ国だけとする、讃岐は豊臣そして伊予は毛利が統治する、それが君の処分だ。」

「ま、しょうがなくてやる。」

「そうか、良かったね輝元君新たな領土が手に入って。」

「まゝな、これは当たり前前の措置だ。それより竹中、秀吉殿がいなのに勝手に決めていいのか？」

「大丈夫、ちゃんと秀吉から許可はとってる心配はない。」

「長曾我部、残念だったのう讃岐と伊予がなくなつてま、これが貴様の力よまだまだ弱いのだ。」

「なんだと、てめえー！」

「おっと、我逆らえば豊臣を敵に回すと一緒ぞ。」

「な！」

「貴様はこれから我々には逆らえぬことを覚えておくがよい。」

元親は輝元をにらんだ、四国征伐は豊臣・毛利連合軍の勝利に終わった。一方秀吉と家康が同盟を結び豊臣の勢力はより一層拡大した。

降伏（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。しばらくお休みをもらいます。

奥州筆頭

長曾我部軍が豊臣・毛利連合軍に降伏したところは東国の大名たちに豊臣の強さを見せたのであった。そして、豊臣は東海道の徳川家康と同盟を結びさらに東国への勢力を広げていた。これに危機感を感じた武田・上杉・北条は東国の連合を作ろうと武田信玄が提唱し上杉謙信・北条氏政は三国同盟を結んだ、信玄は奥州の伊達政宗にも同盟参加を促したが政宗はこれを無視し続けていた。

奥州米沢城

「筆頭、甲斐の虎から使者が来てますぜ。」

「今は、忙しいといっておけ。」

「ははあー!」

「よろしいのですか、政宗様?」

「あゝ別にいいさ俺はそんな同盟の一員なりたくないぜ。」

「ですが、今のこの現状を考えてみてもやはり甲斐の虎の申し入れを受け入れるべきでは。」

「お前もそんなこと言うのか小十郎よ。」

「今 四国の長曾我部が降伏しあの徳川まで豊臣に着いた今豊臣はこの日の本の半分を自分のものとしています。」

「んなこと、見れやあゝ誰だつて分かる。」

「今の豊臣とまともに戦っても我らの負けは見えています。」

「それはどうかな、戦はやってみないと分からないものだ。YOU, SEE?」

「では、逆にお聞きますが政宗さまは今後どうなさるきですか?」

「HA、この奥州から直接大坂に向って一気に山猿の首をとる。」

「な、・・・」

小十郎は、言葉を失った。政宗が直接大阪まで行きそのまま豊臣秀吉の首をとるつもりだと考えていたことに驚いていた。

「政宗様、正気ですか?」

「あゝ俺はいつだって本気だぜ小十郎。そうと分かったなら家臣を呼べ出陣するぞ。」

「お待ちください、政宗様。あなた本当に豊臣と戦って勝てると思ってるんですか？」

「なんだ、お前そんなに弱気な奴だったか小十郎。お前は俺の背中を守ってくれりゃいいんだ。」

「・・・分かりました、あなたのその思いに答えて見せましょうぞ。」

「thank you小十郎。」

そしてその翌日政宗は家臣を米沢城に召集し大坂に遠征すると家臣に知らせすぐ出陣の準備を始めた。

米沢城 政宗の部屋

政宗は、自分の部屋にいた。そして、政宗は壁に飾っていた刀を見ていた。

「・・・父上、俺はこれから奥州筆頭の名を賭けた大戦に言うてくるぜ。」

そう言うのと政宗は壁に飾っていた刀を自分の腰にさしていた鞘に納めて部屋を後にした。

米沢城追手門前

「Are You ready？」

「YEAH！！！！！」

「今から大坂に向う、今度の戦いは本気の戦いだぜ。死ぬ気で行くぜてめえらしいな！」

「おおー！！！」

「OK、んじゃ行くぜ。」

「YEAH！！！！！！！」

「HA！」

政宗率いる伊達軍は奥州を出陣した。総勢10000の軍を引き連れ大坂に向った。この知らせは全国各地の大名に知れた、無論この

ところは豊臣にも知れていた。

奥州筆頭（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回は珍しく英語を少し入れてみました。

集結

伊達軍が奥州を出発したころ甲斐の武田は上杉謙信と北条氏政と会談していた。

「さて、この三国が同盟したのは良いのだがなかなか独眼竜が我々と同盟してくれんのが問題よ。」

「本当にどうしようかね、謙信殿？」

「さて、どうしたものでしょうかね。」

三人が悩んでいた時、武田軍真田忍者隊猿飛佐助が現れた。

「お館様、奥州の伊達政宗が大阪に向けて出陣しました。直接秀吉の首をとる模様です。」

「それは、まことか佐助。」

「はい。」

「となると、信玄公・氏政どのここは独眼竜を先方にして、我らも大阪に向いましょう。」

「そうじゃな、謙信殿言うとおりかもしれんな。」

「よし、では早速我らも出陣する準備をしようぞ。」

武田・上杉・北条軍は、伊達軍を追うために出陣の準備を始めた。そのころ武蔵の国にいた伊達軍は馬を全力で走らせていた。

「小十郎、どうだ馬の調子は？」

「は、万全な状態です。」

「そうか、この分だと三日には大阪につきそうだな。」

そう、政宗と小十郎が話をしていた時目の前に突然一人の男が現れた。

「ちよつと待った！」

「な！！！」

政宗は、馬を止めた。

「あぶね〜じゃねえか。」

「それは失礼した、あんたと話するにはこうするしかなかったもんで。」

「おい、お前は一体誰だ？」

そう、小十郎が現れた男に聞いた。

「お、失礼。俺は、武田軍真田忍者隊隊長猿飛佐助。お館様より伝言を預かってる。」

「ほ、武田のおっさんが俺に何の用だ？」

「このまま、東海道を進軍していても徳川の軍が待っているだけだ。そこで、我が武田領の中山道を通つてはどうだ。」

「なんで俺たちが、東海道を通ること知ってたんだ。」

「だいたい、中山道より開けているし馬を全力で走らすにはちょうどいい道だしな。」

「そういうことが、んでどうして中山道を通つてほしいんだ？」

「伊達軍を先方にして、武田・北条・上杉が一気に大坂に向うためさ。」

「つまり俺たちは、おとりつていうことか。」

「ま、言葉を変えたらそうだな。」

「そんなことだったら、俺たちはこのまま進むぜ。」

「じゃあもしこのまま進軍してもあんたらには勝ち目はない。」

「なんだと、それはどういうことだ。」

「このまま進軍したら、豊臣・徳川・毛利・長曾我部の軍にやられるだけだ。」

「それはどういうことだ。」

「豊臣は西国を完全に制圧した今、次の狙いは東国だ。そこでいつでも攻めれるように徳川・毛利・長曾我部の軍が1か所に集められている。」

「どこだ、その場所は？」

「美濃の国の関ヶ原っていうとこだ、徳川・毛利・長曾我部の総勢は10万だそうだ、そこに堂々も行つても一瞬でつぶされるだけだ。そこで、一端俺たちに合流し関ヶ原で撃破してから大坂に向えばいい。」

「そうか、だったら悪いが俺たちはこのまま行かせてもらうぜ。俺

「私たちは奥州を出たときに最後の一人になるまで戦うって決めたんだ。」

「政宗様。」

政宗が、佐助と話をしていた時小十郎が政宗に言った。

「政宗様は、いったい何のために戦うんですか？」

「俺は守るべきがあるから剣を振ってるだけだ。」

「でしたら、なおさらで今回の申し入れを受け入れてください。」

「小十郎。」

そう小十郎が言ったと、小十郎は馬から降り政宗の前に行き膝を地面につけて土下座をした。

「この命に変えてでもこの願いを受け入れてください。」

「……分かった、それじゃあ一つだけ誓え。」

「は！」

「俺の背中を守れいな。」

「は、この命に変えてでも。」

「よし、いいかてめえーこれから中山道を通って武田・上杉・北条と合流し関ヶ原で一戦交えるぞ。」

「おおー！！！！」

「OK、行くぜ。HA！」

そう言うつと政宗は中山道の方に馬を走らせた。そして甲斐の国で武田・上杉・北条に合流し関ヶ原に向った。そのころこの動きを知った豊臣秀吉は、毛利輝元・長曾我部元親・徳川家康に出陣を命じた。そして、岐阜で合流し関ヶ原に陣を構えた。東軍10万・西軍11万の軍が関ヶ原に集結した。各地の大名が集まり今、ここで西か東かの天下分け目の戦いが始まるうとしていた。

集結（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回は、長編の関ヶ原の戦いになります。どうぞお楽しみに！

関ヶ原の戦い「上（上）」

九月十日その日は雲ひとつない青空だった、そしてその空の下では天下分け目の戦いが始まるうとしていた。西軍11万・東軍10万の軍がここ関ヶ原に集結したのであった。

松尾山毛利軍本陣

「こんな大戦、長篠の戦い以来だな銀時。」

「あゝ本当長篠以来だな。」

「申し上げます、半兵衛殿が本陣に集まってくださいとのことです。」

「分かった、銀時！ついてこい。」

「分かった。」

銀時を連れて半兵衛が待つ豊臣本陣に向った。

天満山豊臣本陣

「あ、やつつと来たね輝元君。」

「遅れ悪い、すまんが我が家臣も同行させてもらってよろしいですな。」

「構わないよ、それじゃ行こうか。」

「分かったでは参ろう。」

そして銀時を連れて輝元は半兵衛と一緒に軍議が行われる場所に向った。そして軍議が行われる豊臣本陣の中心に来た、そこには徳川家康・長曾我部元親そして総大将豊臣秀吉がいた。

「遅れて悪い、すこし半兵衛殿と談義を行っていました。」

「別に構わぬ、では軍議を始めよう。半兵衛頼む。」

「分かったよ、それじゃこれから作戦を説明する。まず先発は元親君、君が先発だ。」

「俺が先発でいいのか。」

「構わない、それでも元親君は小関村から出陣して上杉軍と戦ってほしい。」

「おうよ、任せておけ。」

「それで次は家康君、君は長曾我部軍と上杉軍が戦っている間に藤下村にいる武田軍と戦ってほしいんだがいいかな。」

「もちろん、いいさ。」

「それで残りの毛利軍は関の藤川にいる北条軍を叩いてほしい。」
「分かった。」

「残る伊達軍は僕たち豊臣軍が倒す。それじゃみんな作戦どうりに頼むによ。」

そう半兵衛が作戦の説明が終わると家康・元親・輝元は自分の本陣に戻った。そしてその数時間後、天下分け目の戦いが始まった。長曾我部軍と上杉軍が衝突したのであった。

「いくぜ、ヤローども！！上杉軍を一気に叩くぞ。」

「アニキー！！！」

「西海の鬼ですか、いいでしょう。全軍出撃敵を殲滅するのです。」

「おおー！！！」

上杉軍と長曾我部軍が衝突し天下分け目の戦いが始まった。

桃配山武田軍本陣

「お館様！！上杉軍と長曾我部軍が衝突しました。」

「そうか、謙信頼むぞ。」

「申し上げます、徳川軍がこちらに向ってきます。」

「家康・・・幸村！」

「は！！！」

「貴様が軍を率いて徳川軍を迎え撃ちのだ。」

「心得申した、お館様！各々方、それがしに続いてくだされ！」

「おおー！！！」

武田軍と徳川軍が藤下村の近くで衝突した。青空の下、関ヶ原で天下分け目の大戦が始まった。はたして勝ちのは西軍が東軍が今ここに天下をどちら握るかの戦いが始まったのであった。

関ヶ原の戦い「上（上）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

関ヶ原の戦い「上（中）」

豊臣軍本陣

「申し上げます、長曾我部軍が上杉軍に攻めかかりました。」

「いよいよ、始まったか半兵衛よ。」

「なんだい秀吉？」

「のろしを上げよ。」

「分かったよ、のろしを上げよ。」

そう半兵衛が兵士に命令しのろしが上がった。

徳川軍本陣

「殿、豊臣軍本陣からのろしが上がりました。」

「分かった、では我らも戦場に出よう忠勝！！」

「……………！！」

「頼んだぞ。」

「……………！！」

「全軍、武田軍に突撃せよ！」

「おおー！！」

そう家康が命令し徳川軍は武田軍に突撃した。

豊臣軍本陣

「申し上げます、徳川軍が武田軍に突撃しました。」

「そうかい分かった下がってよい。」

「はー！！」

「半兵衛。」

「分かてるよ、毛利軍に出撃せよと伝えてきなさい。」

「御意！」

「この戦、勝ち見えたよ、秀吉。」

「我々に敗北という文字はない。」

毛利軍本陣

「いよいよ始まったな、輝元。」

「始まったな天下分け目の戦いが。」

「申し上げます、半兵衛様が山を下りて北条軍を叩けということでございます。」

「分かったと伝えてくれ。」

「御意。」

「それじゃ行ってくるわ。」

「気をつけてな。」

「任せておけ。」

そして、毛利軍は松尾山を一気に駆け下り北条軍に衝突した。

「行けえー！！北条軍を蹴散らせ！」

「おおー！！」

「北条の名にかけて戦え。」

「おおー！！」

北条軍と毛利軍が松尾山のふもとで衝突した、毛利・長曾我部・徳川・武田・上杉・北条の軍が山に囲まれたここ関ヶ原で衝突したのであった。

伊達軍本陣

「政宗様、いよいよ始まりましたな。」

「HA、武田のおっさんと軍神と北条のじーさんが戦っている間に一気に突破し山猿の首とらせてもろうとするか。行くぜ、てめえら一気にこの場を突破し山猿の首とるぜHA！！」

「筆頭！！」

政宗が馬を走らせたならそのあとに続いて伊達軍の兵士がそれに続いて南宮山から一気に馬で駆け下り関ヶ原の中心を一気に走っていた、途中徳川軍が伊達軍に斬りかかってきたがそれをことごとく撃破し豊臣軍本陣に迫っていた。

豊臣軍本陣

「伊達軍が迫っています。」

「来たか、思った通りだ鉄砲隊伊達軍を狙撃せよ。」

「は！」

「伊達の若僧め我が豊臣軍に刃を向けるといい度胸をしとるわ、半兵衛！」

「なんだい秀吉。」

「貴様は前線で指揮しろ。」

「分かったそれじゃ行ってくるよ。」

そう秀吉にいい半兵衛は鉄砲隊を引き連れて本陣から出撃した。そして伊達軍が通る道に鉄砲隊を構え伊達軍が来るのを待った。そして数分後伊達軍が現れた。

「ようやくお出ましか、鉄砲隊構え！！！」

そう半兵衛が鉄砲隊に命令し伊達軍をいつでも撃てる準備をした。

「HA、あとちよつとで豊臣本陣だ楽しんで行こうぜ！」

そして伊達軍が豊臣軍の鉄砲隊がいるとは知らずに馬を全速力で走らせていた。そして

「鉄砲隊、放つてー！！！」

「バンバンバン！！！！！！！！！！！」

その周辺に鉄砲の音が響いた。

「ん、バカな……」「なんでこんなところ……」「と言いながら伊達軍の兵士が馬から落ちた。

「なんだと、なんでこんなところにいるんだ。」

「政宗様、どうなさりますか？」

「HA、ここを一気に突破する。」

「正気ですか？」

「俺はいつだって本気だぜ。」

「……分かりました、行くぜおめえーら政宗様の後に続け！」

「おおー！」

「上等、行くぜHA！！！」

そう政宗がいい馬を豊臣軍に向けて走らせた。そのあとに続いて伊達軍の兵士も続いた。

「やはりそのまま来たか、いいよ相手してやろう全軍伊達軍に突撃せよー！」

「おおー!!」

豊臣軍と伊達軍が衝突したのであった。

関ヶ原の戦い「上（中）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は来週の日曜日になります。

関ヶ原の戦い「上（下）」

豊臣軍が伊達軍に狙撃された後、豊臣軍は伊達軍に突撃した。

「やってくれるじゃねえか、てめえーら！！ここで仲間の仇とろ
うぜ、HA！！」

「筆頭！！！」

伊達軍と豊臣軍は衝突したのであった。

「やはりそう来たか、政宗君。全軍、伊達軍に突撃せよ。ここで伊
達軍を粉碎する。」

「おおー！！！」

豊臣軍は次々に伊達軍に斬りかかった。

「HA、いいね俺はそういうやつは好きだが仕える相手が気に
くわねえ！！」

「独眼竜だ、討ちとつて名を挙げろ！」

「おおー！！！」

政宗に挑んでくる豊臣軍の兵士は政宗の六爪で切り刻んだのであつ
た。

「さすが豊臣の山猿だ、すごい数だなこりゃ。」

「政宗様！」

政宗の背後に小十郎が来た。

「政宗様、敵兵は我らに任せ急ぎ豊臣本陣に向い秀吉の首をとつて
ください。」

「小十郎。」

「政宗様は、天下をとられるお方、ここは誰よりも先に秀吉の首を
とり伊達の名を天下に示さなければなりません、それは政宗様にし
かできないことですここはなにとぞ。」

「筆頭、行ってください。ここは俺たちに任せて。」

「・・・OK、ここはお前たちに任せませ！」

「は！」

「任せてください、筆頭！」

政宗が小十郎や伊達軍兵士にそう伝えたと政宗は豊臣本陣に向った。そのころ北条軍と戦っていた毛利軍は

「あの銀髪頭の男の首をとれ！」

「おおー！！！」

「てめえーらには用はねえんだよコノヤロウー！！！」

そう銀時が言っていると銀時は、北条軍の兵士を瞬殺で斬った。銀時は鬼神のごとく戦場を駆けまわっていた。銀時は武器を選ばない、刀の刃が折れて刀が使えないときは敵兵から奪って敵を倒したり槍で敵を突いたり二本の刀を持って敵を斬ったり、薙刀や弓やクナイを使つて戦っていた。

「銀時！」

銀時が北条軍の兵士を斬つてまた別の兵士に斬りかかろうとした時、どこかで聞いた声がした。

「なんだ、ズラか。」

「ズラじゃない桂だ、何度言ったら分らないんだ。」

「うるせーな、いいだろう今はそんなのどうだって。」

「よくない、まったくお前と言う奴は。ほら正面来てるぞ。」

銀時が正面を向くと北条軍の兵士が銀時に斬りかかろうとしていた。

「人が一息しようと思つたのに、どうしてこんなにくるんだ！」

そう銀時が言つた後銀時は自分が持っていた刀で北条軍の兵士をバツバツサと切り刻んでいた。

「戦とはそういうもんだ、いい加減学べ。」

「うるせえー！黙つてろズラ！」

「ズラじゃない桂だ！！！」

桂は、その怒りを敵にぶつけるように敵を斬りまくっていった。

関ヶ原の戦い「上（下）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日です。

関ヶ原の戦い「中」

関ヶ原では、全国の大名が集まり戦っていた。

「ズラ、こんなの久しぶりだな。」

「ズラじゃない桂だ、久しぶりだな。長篠の事を思い出す。」

「長篠ねえ、そう言えば辰馬はどうした、さつきからあいついねえじゃねえか。」

「あいつならどつかで戦ってるんだろう。」

銀時と桂が話していたら二人は北条軍の兵士に囲まれていた。

「あ、こりややべえな。ズラ。」

「とんでもない悪い状況だな。」

「あの二人の首をとれ！」

「おおー！！」

そう北条軍の武将が命令し敵兵が一気に斬りかかってきた。

「行くぜ、ズラ！」

「ズラじゃない、桂だー！！」

二人は敵兵に突撃し戦った。銀時はたとえ矢が何本も飛んでもそれよけ敵を斬っていった、刀が折れたら近くにある武器で応戦したのであった桂の方は、刀で敵を目が追いつかない早さで敵を斬り裂いていったそれは神業のような速さであった。

「ズラ！どっちが多く敵を斬るか勝負しようや。」

「勝負だと、こんなときにか！」

「負けたら勝った奴になんかおごるっていうのはどうだ！」

「いいだろう、そう勝負乗った！」

そう二人は戦いながら勝負をした、どっちが多く敵を斬るかの勝負をしたのであった。

「なんだあの二人、化けもんだぜありや。」

「おい、お前あいつらのこと知らないのか。あの銀髪頭の奴は「白夜叉」って呼ばれてて鬼神のごとく敵を斬り裂くからそう呼ばれて

るらしい。」

「じゃあ、もう一人の奴は？」

「あいつは、戦場の貴公子って呼ばれてるらしい。」

「おっかねえやつらだ。」

「あいつらとは戦いたくな……」

「おいどうした、だいじょ……」

二人は血を口出しながら地に倒れた。

「ズラ、今何人目だ？」

「これでちょうど150人目だ貴様は？」

「俺は180人だ、こりゃ俺の勝ちだな。」

「まだ、決まってるないぞ。まだ合戦は始まったばかりだ。」

「んなこと、分かってるさそれくらい。」

「今、どんな状況なんだろうなズラ？」

「まったく見当もつかん。」

「そうか。」

毛利軍本陣

「申し上げます、豊臣本陣付近で伊達軍と豊臣軍の戦闘が始まりました。」

「そうか、大義である。」

「は……」

「さてと今は、我が毛利軍は北条軍と戦い、徳川は武田、長曾我部は上杉、そして豊臣は伊達か。元春はいないか。」

「は！殿、なんでございましょう？」

「確か、大筒を持ってきてたよな。」

「たしかに、持ってきましたがそれなに用に。」

「北条本陣に撃ち込め、あのおじいさんに戦力の差を見せつけろ！」

「は！、大筒を北条軍本陣に向けて放て！」

北条軍本陣

「殿、我が押されていますぞ。」

「分かっているはそれくらい。」

「申し上げます、毛利本陣から大筒で撃たれております。」

「なんじゃと!？」

北条軍本陣には松尾山に陣を敷いていた毛利軍から大筒で攻撃されていた。

「退け!全軍ただちに撤退せよ!」

「殿!」

「全滅する前に撤退するのじゃ急げ!」

「は!撤退じゃ!」

北条氏政は馬に乗り大急ぎで関ヶ原から引き上げた。

「輝元様、北条軍が撤退しております。」

「そうか、全軍北条軍を追撃するのだ。」

「おおー!」

毛利軍により北条軍の追撃が始まった。

「銀時!北条軍を追うぞ!」

「分かった!それじゃ行くか!」

二人は馬にまたがり北条軍を追いかけたのであった。

関ヶ原の戦い「中」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来年になります。

関ヶ原の戦い「下（上）」

武田軍本陣

「お館様！北条軍が毛利軍に大筒で攻撃を受け現在、退却しております。」

「なに！それはまことか佐助！！」

「まことにございます。」

「それは困った、この戦、負けるやもしれん。」

信玄は困った顔で戦場を眺めた、北条軍が退却した今、この関ヶ原に残っているのは武田軍・上杉軍・伊達軍の三軍対して西軍は、毛利軍・徳川軍・長曾我部軍・豊臣軍の四軍が残っており東軍は少し不利な状況になっていた。

「佐助はおるか！」

「何でしょうか、お館様？」

「このこと謙信には。」

「今、配下の者を送っているもうじき帰ってくると思う。」

「そうか、佐助！貴様も幸村と一緒に戦線に出て戦ってこい。」

「分かりました。」

「さて、どうしたものか。」

そのころ、武田軍と徳川軍の戦いは徳川側が武田軍を押していたのであった。

「進め！今こそ武田の陣形を崩すのだ！！」

「おおー！！」

徳川軍は武田軍に総攻撃をしかけていた。そして武田と戦っていたのは徳川だけではなかった。

「今だ、鉄砲隊放つて！！」

関が原全体に聞こえる銃声が鳴った。

「豊臣の軍事力を東軍に見せつけよ！！」

「おおー！！」

豊臣軍の鉄砲隊が武田軍の騎馬隊に向けて鉄砲を撃っていた。そしてとうとう、武田軍の足輕が「ひ！こりや逃げるしかねえべ。」「ひくべ。」と次々に言いだし武田軍の足輕は次々に逃げ出した。

「逃げるな！敵に突撃しろ！！」

「逃げる、逃げる。」

武田軍の武将が士気を挙げようとしても兵士たちは次々に逃げつていた。

「えーい！貴様らが逃げても俺は突撃するぞ、私に続け！！」

数人の足輕と騎馬兵がその武将の後に続いたが

「放て！！」

「うぎゃー！！」

「無念……」

「武田の侍魂見せつけてやったぞ……」

豊臣軍の鉄砲隊によって討ち敗れたのであった。武田軍はもう総崩れていたのであった。武田軍の本陣では

「お館様、もう限界です。ここは退きましよう！」

「さよう、ここは一旦甲斐に退き再起をはかりましよう。」

武田軍の武将が信玄に撤退の進言をしていた。

「いやまだじゃ、まだ関ヶ原からは退けぬ！」

「お館様、もうそこに徳川軍が迫っていますぞ！」

「お館様……」

「どうした？」

一人の足輕が陣に来た。

「申し上げます、馬場信房様が豊臣の鉄砲隊の狙撃を受け討ち死！」

「なに！」

「馬場殿が。」

「お館様、撤退のご指示を！」

家臣らが信玄がいる方向を見た。

「……分かった、陣を引き払う。小山田・勝頼そなたらに殿を頼みたいのじゃが。」

「お任せくだされ!!!」

「全軍、退却せよ。」

関ヶ原の戦場に武田軍の撤退を知らせるホラ貝が鳴り響いた。

関ヶ原の戦い「下（上）」（後書き）

新年明けましておめでとございます、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

関ヶ原の戦い「下（中）」

武田軍が関ヶ原から撤退を開始したとき、上杉軍は長曾我部軍を押していたのであった。

「全軍、長曾我部軍本陣に突撃し敵本陣を落とすのです。」

「おおー！！」

謙信が上杉軍本陣で指揮をとっていたとき武田軍の撤退の知らせが届いたのであった。

「なにそれは、本当ですか？」

「はい、現在中山道方面に引き上げております。」

「そうですか、分かりました。下ってもいいですよ。」

「は！」

足輕はその場を後にした。

「謙信様、どうなさりますか？」

「今、この状況では我らが負けてしまいます。」

家臣が謙信に言った。

「・・・仕方ありません、全軍に伝えなさい。だたたに関ヶ原から引き上げなさい！！」

「は！！！！」

「景勝・兼続、殿は任せましたよ。」

「お任せあれ！！！！」

謙信は自分の愛馬にまたがり、関ヶ原を後にした。

豊臣軍本陣

「申し上げます、上杉・武田・北条軍が撤退しました。」

「そうか、これで残るは伊達のみである。全軍伊達軍に突撃せよ！！」

「おおー！！」

秀吉は、全軍に総攻撃を命じたのであった。そのころ、豊臣軍本陣を目指して馬を走らせていた政宗は次々に斬りかかってくる豊臣軍

の兵士を六爪で斬り裂いていった。

「雑魚には用はないって言ってるんだろぅが!!」

政宗は驚異的な速さで豊臣軍本陣に向っていた、そしてあと少しで敵本陣に着こうとした時後ろから伊達軍兵士が来たのであった。

「筆頭。」

「どうした、なんかあったか？」

「小十郎さまから伝言を預かっていますぜ。」

「伝言？」

「すぐに、この関ヶ原からお引きなさってくださいとのことでございます。」

「どういうことだ。」

「今、この場にはもう伊達軍しか残っていませんもうこの戦、勝ち目はありません。ここは兵のためにも撤退のご指示をと申したいました。」

政宗は、馬にまたがったまま戦場を見ると本当に伊達軍しか残っていないことに驚いていた。あの信玄と謙信が退却するとは思っていなかったのであった。

「・・・・撤退だ。」

「は？」

「撤退だ!!全軍に撤退って伝えろ!!!」

「は!!!」

「ha!」

政宗は、走っていた逆の方向を向いて馬を走らせていた。

「小十郎さま。」

伊達軍の兵士が小十郎を呼んだ。

「小十郎さま、筆頭が撤退の指示を出しました。」

「そうか、全軍撤退しろ!!」

関ヶ原全体に、伊達軍の撤退のホラ貝の音が響いた。

関ヶ原の戦い「下（中）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

関ヶ原の戦い「下（下）」

豊臣軍本陣

「申し上げます、伊達軍が引き上げ始めました」

「そうか、全軍深追い無用！もう我らの勝ちが決まったぞ！！」

伊達軍の退却で関ヶ原の戦いは西軍の勝利で終わったのであった。

「銀時！」

銀時が誰かに呼ばれ後ろを向いた。

「なんだ、ズラか」

「ズラじゃない桂だ、それよりも伊達軍が関ヶ原から退却したらしいぞ」

「何！そいつは本当か？」

「ほんとだ、輝元様が今陣に戻って来いと命令があった」

「んじゃ、陣に帰ろうか」

と銀時は毛利軍本陣に引き上げた。

毛利軍本陣

「銀時、無事であつたか！」

「ああ、なんとかな」

「明日、安芸に引き上げる。お前も準備しておけ」

「ん？この関ヶ原に滞在しなくていいのか？」

「先ほど軍議あつてな、こたびの合戦で多くの犠牲が出たので、一旦国元に帰ってもいいという事になったんじゃ、だがわしは大阪に向う」

「なんで、大阪なんだ？」

「各国の大名は大阪に滞在するように言われておるんじゃ」

「そうか、分かった」

関ヶ原の戦いが終わった夜、銀時と桂と坂本が話していた。

「おい、明日安芸に帰るらしいぞ」

「そうか、久しぶりにゆつくりできるのう桂」

「・・・・・・」

桂は黙り込んでいた。

「どうしたズラ、毒キノコでも喰ったか？」

「いや、実はお前たちに話しておきたいことがある」

「実を言うかわしも話しておきたいことがある」

「おいおい二人ともなんかあったのか？」

桂が話し出した。

「俺、実は毛利家から離反する」

「マジで言ってるのか？」

「ああ、本気で言ってる」

「どうして離反するんだ？」

「豊臣の一方的な戦い方を見たからさ、豊臣のやつらは降伏を申し入れた人を一方的に殺した、しかもそれは武器を持たない民衆も殺したこのまま豊臣に天下をとらせたらこの国は腐敗した国なる、俺はそいつを阻止するために毛利から離反した」

「それで、お前一体どうやって阻止するつもりだ？」

「高杉みたいに義勇軍を作るつもりさ」

「そうか、んで辰馬、お前の話はなんだ？」

「わしは、これから大阪に向う」

「大阪？」

「そうじゃ、んで大阪で商いをするつもりだ」

「なんでまた商いなんだ？」

銀時が坂本に聞いた。

「もうこの世はもう豊臣の天下じゃ、これ以上戦ってもいたずらに仲間を死なせるだけじゃあ。わしはもう仲間が死ぬところを見とうない。これからは、もっと高いところを目指さないかん日本の本の民全員が利益を持つことをやりたいんじゃ」

「そうかい、分かった。みんなそれぞれ違う道を行くけれどそれはお前らが決めた道だ、最後までそれを貫きとうすんだ」
「分かった！！」

「んじゃ、最後の宴会をしますかねえ」

と銀時・桂・坂本の三人がいる最後の夜は過ぎっていった。そして、朝を迎えた。三人は街道の分岐点にいた。

「んじゃ、元気でな」

「お前もな、銀時」

「それじゃ、二人とも先にわしは行くわ」

「おう、じゃな坂本」

「辰馬、元気でな」

坂本は、手を振りながら伊勢街道方面に歩いた。

「それじゃあ、元気にやれよ。ズラ」

「ズラじゃない桂だ！！最後の最後までそれだな」

「いいじゃねえか、ま、元気にやれよ」

「それじゃ」

桂は東海道街道方面に向いて歩いて行った。銀時は、安芸に向けて馬を走らせたのであった。

関ヶ原の戦い「下（下）」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

屋敷

関ヶ原の戦いが終わり、銀時は安芸に引き上げたのであった。そして自分の屋敷に戻り久々に家でのんびりと過ごしていた、そしてある日銀時は、広島城の城下町をぶらぶらと歩いていた。

「ああ、暇だな。久々に帰ってきてもすることねえしなあ」

そして、銀時は一軒の団子屋に立ち寄ったのであった。

「おい、団子二つくれ」

「はい、只今」

銀時は、団子を二つ頼んだのであった。そして、

「へいお待ち、団子二つね」

団子屋の主人が団子を二つ持ってきた、そして銀時は、団子を食べたのであった。

「さてと、これからどうしよつかねえ」

と呟きながら団子を食べた、団子をすべて食べた後銀時はまた城下町をぶらぶら歩いたそして、結局何にもせずに銀時は自分の屋敷に帰ったのであった、そして雨が降る夜、銀時が風呂から出てきて布団に入ろうとした時誰が

「ごめんください」

と屋敷の扉を叩いたので銀時が出て行くとそこには、一人の女がいた。

「あのどちら様ですか？」

「旅の者なんですが、どうか今晚泊めてはくれませぬか？」

銀時は、悩んだが雨が降ってる中女性を追い返すわけにはいけないと思うって

「もう夜も遅いし雨も降ってるしな、あんたが寝るとこ部屋狭いけどいいよな」

「ありがとうございます」

銀時はその女を屋敷の中に入れてやった、そして、囲炉裏がある部

屋に女を連れてきた。女は囲炉裏のどこに行き髪などを布でふいた。

「濡れてるだろう、ここに来て乾かせよ」

「ありがとうございます、あのすいません」

「ん？」

「あなた様にお名前は？」

「坂田銀時だ、んであんたの名前は？」

銀時は、囲炉裏にまきを入れて女に聞いた。

「志村妙と申します」

「どこの国出身？」

「摂津の大阪と言ったことです」

「あんた、大阪から旅してんの」

「はい、そうです」

「んで、これからどこに行くの？」

「いえ特に決まっていませんが、このまま西国を旅しようかなって
思っています」

「そうかい、ま、今日はゆっくりして行ってくれや」

「今日は本当にありがとうございます」

「いいって、もう俺寝るから」

「お休みなさい」

「お休み」

そう妙に言った後、銀時はその部屋から出て行き蒲団が敷いてある
自分の寝室に向い寝たのであった。

そして、翌日の朝、銀時が起きると台所の方から物音がするので
行ってみるとそこで妙が野菜を切っていたのであった。

「あんた、なにやってのんの？」

「あ！おはようございます、昨日の一泊の恩返しをしたくて」

「そうか、なんか悪いなそんなことさせてしちまって」

「いえ、あんなにやさしくしてくれたのはあなただけですから」

「なんか、手伝えることある？」

「いえ、もう少しでできるので待っててください」

「そうか、……分かった」

そう言い残し銀時は台所から出て行った、そして数分後囲炉裏がある部屋に妙は自分が作った料理を持ってきて銀時に食べさせた。

「どうぞ、召し上がってください」

「それじゃお言葉に甘えて、いただきます」

銀時は、妙が作った料理に箸を持って行って一口サイズに切られた野菜を箸で挟み口に運んだ。

「おいしいな、あんたすごい料理うまいな」

「そんなこと、ありませんよ」

銀時に褒められて妙は笑った。そして、妙は銀時に

「あの、銀時さん」

「ん？どうした」

「お願いがぁあります」

「お願い？」

「はい、今日一日広島城の御城下を案内してくれませんか？」

「ああ、別に構わんよ。いい暇つぶしになるしな」

「いろいろとありがとございます」

「いいってことよ」

そう妙と話しながら銀時は朝飯を食べたのであった。

屋敷（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

案内

朝飯を食べた後、銀時は妙に頼まれて広島城の城下町を案内をするために広島城の城下町に向ったのであった。そして、城下町に着くと銀時は妙に広島城の城下町を案内したのであった。

「この辺にもものすごいまい団子屋があるんだが行くか？」

「はい、行きましようちようどおなかも減ったし」

「そうか、んじゃ行くか」

そう言っていると銀時は妙を連れてその団子屋に向った。そして、団子屋について中に入って御座敷に座って

「親父、団子10個ちょうだい」

「へい、まいど」

「銀時さん、そんなに頼んで食べるんですか？」

妙は銀時に不思議そうに聞いた。銀時は厨房の方向いて

「ああ、大丈夫だ、いつもこれくらい食べてるしな。なあ親父」

「旦那はいつも結構食べてるからねえ、はい団子十個」

そう団子屋の主人が言っていると、主人は団子を机に置いて

「ごゆっくり」

といって厨房の方に戻っていった。そして、銀時は団子を次々に口の中へ放りこんでいった。その姿を見て妙はくすくす笑いながら銀時に言った。

「銀時さんは、甘いもんが好きなんですな」

「糖分とってないとなんか落ち着かなくてな、あんたも遠慮せずに食べな」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

そう言っていると妙は、団子のくしを持って団子を食べ始めた。そして、団子を食べ終わりお茶を飲んで一息ついて団子屋を出て

「次、どこ行きたい？」

銀時が妙に聞くと広島城からホラ貝の音が城下町全体に響いた。

「戦が始まりのですか？」

妙が不安そうな声で銀時に聞いた。

「分かんねえが、とりあえず城に行かなきゃいけねえからここでお別れだ、それじゃ」

そう妙に言い残し銀時は、城の方に向って走っていった。

城に着くと足軽たちが武器の点検をしていた、そして、吉川元春を見つけ声をかけた。

「元春様、今回はどこに出陣ですか？」

「おう、銀時か。川中島に出陣するらしい」

「川中島？」

「そうだ、今川中島に武田・上杉の連合軍が城を築いておるらしくそれを討伐するために出陣するらしい」

「そうか、分かった。それでいつ出陣するんだ？」

「明日だ、お前も家に帰って支度して来い」

「分かりました」

銀時は、広島城を出て支度をするために自分の屋敷に向った。そして、屋敷について屋敷の中に入る玄関の扉を開くとそこには

「おかえりなさい」

妙がそこにいた、銀時は驚いた。まさか自分地の屋敷にまだいたなんて思ってもいなかったからである。

「なんだ、まだいたのか？」

「はい、あのしばらく間ここにいてもいいでしょか？」

「ああ、構わんよ。どうせ俺はいまから信濃に行かなきゃなんねえから。屋敷を自由に使っていいぞ」

「そうなんですか、いつお戻りになるんですか？」

「さあ、分かんねえなあ」

そう言つと銀時は、戦に行く支度をし屋敷を大慌てで出て行つた。

そして、安芸を出陣した毛利軍は大坂城で豊臣軍・徳川軍・長曾我部軍と合流し川中島に向けて出陣したのであった。

案内（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、今週の日曜日です。

川中島の戦い「上」

豊臣・毛利・長曾我部・徳川の連合軍が大阪を出陣してから一週間後、連合軍は川中島に到着し陣を敷いて武田・上杉の軍とにらみ合いをしていたのであった。そして、にらみ合いに我慢を切らした豊臣秀吉は各大名を本陣に呼び軍議を始めたのであった。

「これ以上の、にらみ合いは時を無駄に使うだけぞ。これより上杉・武田軍を一気に叩き双方の大名をここ、川中島で潰す！」

と秀吉が言った後、秀吉の後ろにいた半兵衛が秀吉の前に出て「それじゃあ、これからの事について話すね。まずは、家康君、君はまず妻女山のふもとまで行き武田・上杉の背後についてほしい」「心得た」

家康はそういつて、首を縦に振った。

「次に、元親君。君たちの軍は海津城にいる敵を叩いてほしい」

「おうよ！任せておけ！！」

「それで次は、毛利軍は茶臼山の近くまで行き、敵の横腹をついてくれ」

「・・・・・・」

輝元は、無言で首を縦に振った。

「そして僕たち豊臣軍は、正面から敵を迎え撃つ。それじゃあ明日、各自がんばるように」

そして翌朝、雲ひとつない日本晴れをした天気だった。そして、八幡原に銃声が響いた。

「行けえー！！武田・上杉軍をここで粉碎しろ！！」

「おおー！！！！」

豊臣軍が武田・上杉の軍勢に鉄砲を放って戦いが始まった。

「申し上げます、豊臣の軍勢が高坂様の部隊に攻めかかりました」
伝令が武田軍本陣に敵が攻めかかってきたという知らせを信玄に伝えに来た。

「奴め、とうとうしびれを切らしたか」

「お館様、どうしまするか？」

幸村が槍を両手に持つて信玄に聞いた。

「よし、幸村よ。貴様今から、最前線に出てしばらくの間敵を食い止めるのじゃ」

「心得申した、お館様！」

そう幸村は信玄に言う、幸村は馬に乗り自分の部隊を率いて最前線に出たのであった。

「お館様」

「佐助か」

幸村が出た後、佐助が信玄の後ろに現れた。

「お館様、長曾我部軍が海津城方面に進軍していらしいです」

「そうか、山猿め。まずは、海津城を落城させて四方八方から攻めここで武田・上杉の両軍を叩くという戦法か」

「おそらく、すでに徳川軍が今妻女山方面からこちらに迫ってきています」

「竹千代……」

そう言う、信玄は、しばらく黙りこんで戦場の方を眺めていた。そして軍配を持つて

「佐助、全軍に伝えよ。敵軍を突破しここ八幡原から脱出する！！このこと謙信にも伝えよ」

「分かりました、お館様」

そう言い残し佐助は、その場から風邪のような音を残してその場から去った。そのころ、茶臼山方面から進軍していた毛利軍は上杉軍と戦っていた。

「一気に切り崩せ！！」

輝元は、全線で指揮をとっていた。そのころ、銀時は

「うおおー！！そこどけえー！！」

と叫びながら上杉軍の兵士を次々に斬り続けていた。いつもの銀色の髪は血で真っ赤になっていた。

川中島の戦い「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

川中島の戦い「中」

豊臣・徳川・毛利・長曾我部の連合軍が武田・上杉の連合軍に攻めかかって数時間後、形成は圧倒的に豊臣率いる連合軍の方が有利であった。豊臣方は最新式の鉄砲を使い次々に武田・上杉の兵士を討った。そして、豊臣軍本陣にある知らせが届いた。

「申し上げます、長曾我部軍が海津城を落としました」

それは、長曾我部元親率いる長曾我部軍が武田・上杉方の城を落としたいという知らせだった。

「そうか、分かった。下つていいよ」

「は！」

半兵衛が伝令の兵士に下がるように指示し伝令の兵をはその場を去った。

「これで、ようやく総攻撃ができそうだね。秀吉」

半兵衛は、秀吉が座っている方向を向いて言った。

「そうだな、半兵衛よ」

秀吉が、半兵衛の名前を低い声で呼んだ。

「なんだい、秀吉？」

「全軍に伝えよ、武田・上杉の軍に総攻撃を仕掛ける！」

「分かったよ秀吉」

そう半兵衛は、そう秀吉に言つと半兵衛は、陣の外に出て一息ついて大声で言った。

「豊臣・徳川・毛利・長曾我部の軍に伝える、全軍武田・上杉の軍に総攻撃をせよ……！」

「おおおおお……！」

半兵衛が全軍に総攻撃の命令を下すと豊臣・徳川・毛利・長曾我部の兵士たちが一斉に戦場に響く声でさげんだ。

「とうとう、来ましたか」

そう言ったのは、上杉軍本陣にいた謙信だった。

「謙信様、どうなさいまするか？」

上杉家の家臣が謙信に聞いた。

「……………武田の軍はどうなっていますか？」

「今のところ、長曾我部・徳川・豊臣の軍勢と戦っている模様です」
「そうですか、分かりました」

そう謙信が言くと、謙信は自分の愛刀を持って陣の外に出て愛馬にまたがり手綱を持って刀を鞘から抜いて刀を豊臣軍本陣を指した。

「全軍、突撃せよ！狙いはただ一つ、豊臣秀吉の首を取ることだけを考えなさい、その他の敵は構わずにただ秀吉の首を取ることだけを考えなさい、全軍突撃せよ！！は！」

そう謙信が全軍指示すると、謙信は馬を走らせ敵を斬りながら豊臣本陣に向けて馬をひたすら走らせた。

その様子を本陣で見ていた、信玄は自分が持っていた軍配を投げて「ん？謙信、一体何をやっている！？」
と言った。そしてそこに佐助が現れた。

「お館様、上杉軍が総攻撃を始めました」

「何？この状況でか」

「はい、上杉軍は、討ち死に覚悟で秀吉の首を取りに行ったそうです」

「謙信、正気か」

「お館様、どうなさいますか？」

「……………佐助、全軍に伝えよ」

そう信玄が言くと、信玄は自分の愛刀を持って刀を鞘から抜きそして

「全軍、上杉軍を援護しつつ上杉・武田両軍の退却口を確保せよ！」

「心得申した、お館様」

そう言い残し佐助は、その場を去り全軍に信玄の指示を伝えたのであった。

川中島の戦い「中」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

川中島の戦い「下」

上杉謙信率いる上杉軍は、討ち死に覚悟で豊臣軍本陣に攻めかかった。

「突撃せよ！大将首をとるのじゃ！」

と上杉家の家臣が最戦線に出て、指揮を取っていた。次々に豊臣軍の兵士に斬りかかった上杉軍だが、豊臣方の戦力は圧倒的だった。

「放つてえー！！！」

戦場に響く鉄砲の銃声音とその鉄砲の弾に当たって倒れる上杉軍の兵士の声が戦場に響いた。

「恐れるな！逃げるな！秀吉の首さえ取れば俺たちの勝ちだ！」

と叫びながら、豊臣軍の鉄砲隊に突っ込む上杉軍の兵士たちだが、鉄砲の弾に当たり地に伏せた。

「謙信様、もう限界です」

「まだです、秀吉の首を取るまでは退けません」

と謙信が家臣に言った時、伝令の兵士が背中から血を流して謙信のところに来た。

「申し上げます、北条高広様、敵方の鉄砲にあたり討ち死にしました！」

「何、それは誠か！！」

と上杉家の家臣が言った時、別の伝令の兵士が謙信のところに来た。

「申し上げます、直江実綱様が撤退しました」

「直江が撤退したと……」

謙信が、落胆とした声で言った。

「謙信様、ここは撤退を！このまま敵に突撃しても無意味ですぞ」
「……………」

謙信は、黙り込んだ。自分が豊臣軍本陣に突撃せよという命令をしたことで、多くの兵士や家臣が討ち死にしまったことを悔やんでいたのであった。

「謙信様、なにとぞ！」

「全軍に伝えなさい、全軍生きて越後に撤退せよ！」

「は！伝令、撤退のホラ貝を鳴らせ！！」

「心得ました」

と伝令の兵士が言くと、伝令の兵士は腰にぶら下げていたホラ貝を手に持って思いっきり、息を吸いホラ貝を吹いた。その音色は、鉄砲の銃声音よりもでかつた。

「退けえ、全軍引きあげろ！！」

最戦線で指揮を取っていた、上杉家の家臣が撤退の命令をした。

「お館様、上杉軍が撤退を始めました」

と上杉軍の動きを見ていた、佐助が信玄に伝えた。

「うむ、佐助！わしらも撤退するぞ」

「了解しました、お館様」

と佐助は信玄の命令を武田軍の全軍に伝え、武田・上杉の軍は川中島より撤退したのであった。

「秀吉、僕たちの勝ちだよ」

半兵衛が川中島より撤退する武田・上杉の軍を見ながら、秀吉に言った。

「これで、いよいよ東国征伐が始まるね」

「我らの天下統一も近いの、半兵衛」

「うん、天下を取った後はもう二度と戦は起こらないだろうね」

と半兵衛は、笑みを浮かべた。

武田・上杉の軍勢は、川中島より撤退したことにより、この戦いは豊臣方の勝利で幕を閉じたのであった。

川中島の戦い「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

軍議（前書き）

こんにちは、「戦国乱世」の作者坂田銀時です。このたび、3月11日の宮城県三陸沖を震源とした「東北地方太平洋沖地震」におきまして、津波・地震の被害などで多くの行方不明者・負傷者・死者が多く出ています、さらに福島的第一原発事故によりさらに被害が広がっています、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々とご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。一日でも、早い復興を心からお祈りいたします。

軍議

川中島の戦いは豊臣方の勝利に終わり、武田・上杉軍は敗走したのであった。そして、合戦が終わって数時間後秀吉は輝元・元親・家康を豊臣本陣に召集したのであった。輝元が豊臣本陣の周りには、豊臣の兵士が目を凝らして見張っていた。そして、そんな中をすたすたと歩いて行き、軍議が始まる場所に行った。軍議が始まる場所に行くと、そこには家康・元親・秀吉がもう座っていた。

「あ、やつと来たか輝元君」

と半兵衛が言った。

「遅れすまぬ」

と言いながら輝元は椅子に座った。

「これより、東国征伐の計画を皆に言う。よく、聞くように半兵衛。説明を」

「分かったよ秀吉。それじゃ、今から東国征伐の計画を説明するね」
そういうと半兵衛は、椅子から立ち上がり机の上に日本地図を広げたのあった。地図には、これからの、進軍先を示す線があちこちに東国に引かれていたのであった。

「まず武田方面は、徳川軍が征伐し上杉は長曾我部軍に討伐してほしい」

そう半兵衛は、甲斐と越後を指して言った。

「おうよ、この西海の鬼任せておけ!!」

「任せてください」

と家康と元親は言った。

「うん、次に北条だがここについてはもう話がついている。北条家は小田原城を開け渡すとともに僕たちに降伏することになっている」
半兵衛は、地図の関東一帯を指し棒で指しながら言った。

「それ残るは、奥州一帯を治める政宗君だが。ここは僕たち豊臣軍と毛利軍で征伐する。いいね、輝元君？」

奥州を指して、輝元に聞いた。

「分かった」

と輝元は頷きながら言った。

「家康君。もし君が早期に武田を滅ぼしたのなら北条軍と合流して僕たち伊達征伐の軍に合流してほしい」

「分かった」

家康は、腕を組んでいった。

「以上が、東国征伐の計画だ。この征伐が成功すれば日の本は一気に僕たちの手中に入る僕たち豊臣の天下統一だ」

半兵衛は、手を握って言った。

「皆のもの、明日より東国征伐を開始する。それまで、出陣の準備をするように」

そう言い残し秀吉は、陣の奥へと消えて行った。

軍議が終わり、輝元は毛利軍の本陣に戻り家臣たちに東国征伐の内容を伝えたのであった。

「以上が、東国征伐の内容だ。明日から我々は豊臣軍と随行し奥州に向う」

「奥州ということは、伊達をやるのか？」

銀時が、頭をかきながら言った。

「その通りだ。我々は豊臣軍と協力し伊達を征伐する。天下平定のために皆のもの、明日から頼むぞ！」

「っは!!」

毛利家臣一同は、輝元の号令に返事したのであった。

軍議（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。本日より、再開させていただきます。
次回投稿は、来週の日曜日になります。

出陣

豊臣軍による東国征伐が開始されたころ、奥州の伊達家では軍議が開かれていた。

「さてと、どうしたものかねえ」

政宗が、頭を抱え小声でつぶやいた。

「噂じゃ、関東の北条が豊臣と手を組んだとか」

と一人の家臣が言った。

「政宗様、ここは兵力を整えるのが得策かと」

小十郎が言った。今の伊達軍は、関ヶ原の戦いの大敗により兵力を多く失っていたのであった。

「……そうだな今、大坂の山猿とやってもやられるだけだしな。小十郎、内政の方はお前に任せる」

「分かりました」

「んじゃ、今日はこれで解散だ」

と政宗は言って、その場から出ていこうとした時鎧を着た足軽がその場で大慌てで入ってきた。

「筆頭！つた、大変です。豊臣の連中が、進撃を開始しました！」

「なに、それは本当か！」

と政宗は、驚いた表情をして言った。

「はい、現在、徳川軍は武田軍を長曾我部軍は上杉方面に進軍し、豊臣・毛利の両軍は関東を通過してこの奥州に向けて南から進軍しております」

「いよいよ始まりましたね、政宗様。これはもう……」

「……出陣だ」

「は？」

「出陣だ！目指すは、関東と奥州の境の宇都宮だ。絶対に奥州に山猿を入れるな！」

豊臣・毛利の両軍が奥州に向けて進軍していることを知り、政宗は

奥州の地を荒らされるのを阻止するために伊達軍は、関東と奥州の境である宇都宮で迎え撃つことにしたんであった。

「お待ちください政宗様！今ここで、出陣しても我らには勝ち目などありませんぞ！」

小十郎が、大声で言った。

「そんなこと百の承知だ。でも、ここで出なきゃ俺が今まで守ってきたのもがあの山猿たちの連中に壊されてしまう、だから俺は民を守るために出るんだ」

そう言った後、政宗は家臣たちがいる方を向いた。

「お前ら、今ここで決めて欲しい。俺について来て豊臣と戦うかそれともお前たちの家族を守るために伊達軍を離れるか決めてくれ。出陣は、明日の朝だそれまでに決めてくれ」

そう言い残し、家臣たちが戸惑っている中政宗はその場間を後にした。

翌日、政宗は鎧兜をつけ6本の刀を腰につけ城の追手門に行くとそこには、鎧をつけた家臣たちがざっと一万人くらいいた。

「筆頭、俺たち全員筆頭についていきますぜ」

「俺たちは、あんたと一緒にいると決めていますぜ。筆頭」と次々に家臣たちが、言っていた。

「お前ら……」

「政宗様、なにぼつと立っているんですか」

後ろから聞きなれた声がしたので、政宗は後ろを振り向いた。そこには、鎧を着た小十郎がいた。

「小十郎」

「私は、あなたの背中を守ると心の中で決めています」

「そうか、そうだったな。小十郎、俺の背中お前に預けるぞ」

「は、おませください」

「上等、お前ら、出陣だ！」

「おお……」

伊達軍は、宇都宮に向けて出陣したのであった。

出陣（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

宇都宮の戦い「上」

伊達軍が奥州を出発し、豊臣・毛利の連合軍は奥州へ進軍していた。そして、豊臣・毛利連合軍は伊達政宗率いる伊達軍が布陣している宇都宮で睨みあいの状態が続いていた。そんな中、豊臣・毛利連合軍は軍議をしていた。

「これより、軍議を始める。今から作戦を説明するからよく聞いてほしい」

そう言いながら、半兵衛は宇都宮周辺の地図を広げて説明を شدした。

「宇都宮は、平原地帯だ。このまま、正面から戦っても僕たちが勝つのが見えているが、早期に戦を終わらしたいそこで今回は、挟み撃ちにする。僕たち豊臣軍の鉄砲隊が横から狙撃し、毛利軍は後退している伊達軍を攻撃してほしい」

「分かった」

と輝元は頷いた。

「そうしたら、伊達軍は奥州に向けて退却するはずだ。そこに、北条軍の登場だ。一気に伊達軍を殲滅し政宗君の首を取る」と半兵衛は胸を張って言った。

「よいか」

そう言うとき秀吉は、立ち上がり

「この戦いに勝利すれば、一気に我が豊臣の天下統一ぞ。皆のもの拔かりなく戦うように」

「はは！！」

そして、雲ひとつない青空のもと戦いが始まった。豊臣軍が伊達軍に攻めかかった。

「HA！上等だぜ、この伊達に喧嘩売るといい度胸だぜ！テメエら死ぬ気で戦え！」

政宗は、馬にまたがり攻めかかってくる豊臣軍に突撃した。

「筆頭！」

家臣たちも政宗の後に続いて、豊臣軍に突撃した。

「H A！」

次々に斬りかかって来る、豊臣軍の兵士を政宗は自慢の六爪で敵兵士を切り裂いていった。

「これが、独眼竜か……」

「強すぎ……」

と次々に血を出しながら豊臣軍の兵士は地に倒れていった。だが、政宗が、たとえ五百人斬ったとしても豊臣・毛利連合軍は、五万の軍。その差は圧倒的だった、その中で伊達軍の兵士たちは必死に戦っていた。たとえ仲間が倒れようともたとえ矢が体に刺さろうとも伊達軍の兵士たちは逃げなかった。負けるのは目に見えていたが、誰ひとり逃げなかった。それほどにも、政宗を信頼していたのだ。そして、政宗も自分が今まで守ってきたものを守り通すために、必死に敵を斬っていった。

宇都宮の戦い「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

宇都宮の戦い「中」

伊達軍と豊臣軍が戦いを始めたころ、毛利軍は半兵衛の指示のもと伊達軍の横腹を突くために移動していた。

「皆もの、急ぐのだ」

と輝元が、毛利軍兵士に指示していた。

「この合戦で勝てば、戦いは終わるのか」

銀時が輝元の横に行き言った。この宇都宮での戦いで豊臣側が勝てば、ほぼ日の本は豊臣の手中に入ることになるのだ。

「ああ、伊達軍に勝てば戦いは終わる」

「そうか、ならこの戦い勝てなきゃいけないな」

そう言うとき銀時は、馬にまたがり馬を走らせて行った。

「やれやれ」

輝元が、小声でつぶやくと一人の兵士が輝元のところにやってきた。
「殿、半兵衛様から伝言です。のろしが上がり次第、攻撃を開始せよとの事でございます」

「分かった、伝えてくれ」

「はは」

そう言った後、その兵士は豊臣本陣に向った。

「さあ、皆もの急ぐのじゃ」

と言った後、輝元は自分の愛馬にまたがり移動を開始したのであった。

毛利軍が移動しているころ、豊臣軍と伊達軍は豊臣軍側の圧倒的な軍事力そして兵力により伊達軍は敗北一色であった。

「押さええ、伊達軍を押しつぶせ！」

と豊臣軍の家臣が、兵士の士気を上げるために軍配を振っていた。

「こんなところで、山猿の連中に負けてたまるか！」

と伊達軍は自分たちで士気を挙げ、豊臣軍に突撃したが次々に圧倒的な兵の数にやられていったのであった。

「無念……」

「ちくしょつ、こんなところで死ぬわけにはいか……」

と伊達軍の兵士は次々に倒れていったのであった。

「……これが、合戦なのか」

伊達軍の家臣で、政宗の軍師でもある小十郎が豊臣軍の兵士を斬り倒して周りの状況を見渡して言った。周りには、自分たちの仲間が血を流して倒れてて息を引き取っていた。そして、また次に豊臣軍の兵士たちにやられている兵士たちがいた。

「もう、これは合戦じゃない。だたの虐殺ではないか……」

と膝を地面に着き、落胆としていると後ろから

「あれは、片倉小十郎じゃないか」

「討ちとつて、名を挙げろ！」

そう言うのと豊臣軍の兵士は背後から、小十郎に斬りかかってきた。

「……雑魚は、引っ込んでな」

小十郎は、目にも追いつけない早さで斬りかかってきた豊臣軍の兵士を斬った。

「政宗様、どうかご無事でいてください」

と言うと小十郎は、豊臣軍に突撃したのであった。

「HA」

政宗は、豊臣軍の奥深くまで突撃しており次々に斬りかかって来る豊臣軍の兵士を馬にまたがったまま自慢の六爪で切り裂いて行った。「独眼竜だ、ここで討ちとれば戦いは終わるぞ！」

「おおー！」

と豊臣軍の家臣の命令で兵士たちは政宗に向けて弓矢を放ったり、直接槍で攻撃した。

「雑魚には、用はないって言うているだろうが！」

自分に攻撃をしてくる、敵を次々になぎ倒しながら政宗は豊臣本陣に向けて馬を走らせていた。

宇都宮の戦い「中」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です、次回投稿は、未定です。

宇都宮の戦い「下」

政宗が、豊臣軍本陣に向けて馬を走らせていたところ豊臣軍本陣では、総攻撃を知らせるのろし上げようとしていた。

「半兵衛、総攻撃を開始せよ」

秀吉が、半兵衛に総攻撃の命令をした。

「分かったよ秀吉、全軍に告ぐ総攻撃を開始せよ！毛利軍に知らせるのろしを上げよ！！」

と半兵衛は、兵士に命じて毛利軍に総攻撃を開始するという意味がある真黒いのろしを上げた。

豊臣軍本陣からのろしが上がった頃、毛利軍は伊達軍の背後にいた。

「輝元様、本陣よりのろしが上がりました」

と伝令の兵士が輝元に伝えてきた。

「上がった、みなもの突撃するのだ！！」

輝元は、毛利軍全軍に突撃の命令を下した。命令が下ると毛利軍は伊達軍の背後から伊達軍に突撃した。

「ど、どうして毛利が後ろに」

伊達軍の兵士は、背後から突撃してきた毛利軍に驚いていた。

「豊臣め、挟み撃ちにする気か」

と、小十郎が言う。

「お前ら、うるたえるな。奥州の民のために戦うぞ」

と小十郎が、伊達軍の兵士の士気を上げようとして言った。

「分かっていますぜ、小十郎様！！」

兵士たちは、豊臣・毛利軍に突撃した。

毛利軍が背後から突撃したところ、政宗は豊臣軍本陣の手前で止まっていた。政宗の目の前には銀時がいた。

「よ、天然パーマ。久しぶりだな、元気になっていたか？」

「ああ、元気になっていたぜ。独眼竜」

銀時と政宗は、互いを見ながら言う。

「どうだ、独眼竜。あの時の決着ここでつけないか？」

と銀時が、刀を鞘から抜き戦闘態勢に入る。

「……ふん、いいだろう。あの時の決着ここでつけようぜ」

政宗はそう言うと、六爪を鞘から出し政宗も戦闘態勢に入った。そして、お互い相手に向って走り出し二人は斬りかかった。互いの刀が、激しいつばぜり合いが何度も繰り返された。

「独眼竜、あんたこのまま秀吉と戦うのか？」

「そうだ、なんか文句あるのか？」

「やめとけ」

「どう言う事だ？」

政宗が、銀時を睨みつけて言う。

「このまま、秀吉とやり合っても意味がない。もうこの戦いは、勝敗を決した。だから独眼竜、降伏してくれ、これ以上血を流すのはごめんなんだ」

「ふん、俺は奥州を出た時に俺は命をかけて民を守るって決めたんだ。だから、俺は降伏なんかしないぜYOU SEE？」

「お前が死んだら、一番誰が悲しむと思っているんだ！奥州全体の民が悲しむぞ。それでもいいのか」

そう銀時は言うと、お互い距離をとるために離れた。そして、さらに銀時は

「民を守るなら、こんなところで戦っていないで奥州の民のために生きろ！」

「……」

政宗は戦闘態勢を解き、黙り込んだ。

「政宗様」

政宗の背後から、小十郎の声がし政宗は振り向いた。

「小十郎」

「政宗様、降伏してください。もう、これ以上無駄な血を流さないためにも」

小十郎は、政宗に豊臣に降伏するように進言した。合戦上では、もう伊達軍はほとんど残っていないかった。

「……小十郎、白旗あるか？」

「ございます」

小十郎がそう言うと、政宗は六爪を鞘に戻し

「分かった、全軍に告ぐ伊達軍は豊臣軍に降伏する」

「承知いたしました」

政宗は、豊臣に降伏すると宣言したのであった。

宇都宮の戦い「下」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です、次回投稿は、来週の日曜日になります。

征伐

伊達政宗は、豊臣・毛利連合軍に降伏すると宣言した。伊達政宗は、豊臣秀吉と会見するため豊臣軍本陣にやってきた。

「秀吉様、伊達政宗が参られました」

一人の足軽が秀吉に言う。

「通せ」

「は！」

そう言つて足軽が下がると、足軽と交代に伊達政宗が入ってきた。

「……貴様が、奥州の竜か」

「そつだ、俺が奥州筆頭伊達政宗だ」

「ふん、無様だな。竜が雷に撃たれて地に落ちたか」

「……」

政宗は無言だった。

「もし、貴様が我ら豊臣に降伏しなければその命なかったであろう」
そう言つと秀吉は、その場から出ていき陣の奥へ行った。

「さてと、政宗君」

半兵衛が政宗に近づいて言う。

「君には、これから豊臣軍のために働いてもらつよ」

「……」

「これから伊達軍は、越後に行つて長曾我部軍と合流して上杉軍を討伐してもらつ。敗北など許されないからね」

「……」

政宗は、半兵衛の命令に対して返事をしない。

「政宗君、君たちは僕たち豊臣に負けたんだよ、それを認めないと何も始まらない。それくらい分かっているだろう」

そう言い残し、半兵衛はその場から去りその場には政宗ただ一人しかいなかった。

政宗と会つた後秀吉は、輝元と話していた。

「この度の働き大義であつた。毛利よ」

「これくらい、たいした働きではない。しかし、あの独眼竜が降伏するとは思わなかつた」

「あの竜もそこまで落ちたということよ。それより毛利よ、今から甲斐に行つてほしい」

輝元率いる毛利軍は、甲斐に出陣するよう命じられる。

「甲斐という事は、徳川軍の援軍か？」

「そうだ、ここで一気に日の本を統一する」

「分かつた、ではこれより甲斐に出陣する。ところで豊臣はどこに行かれる？」

「我々は今から奥州に行き、奥州を統一する」

「そうか、分かつた」

そう言つと輝元はその場から去り、毛利軍本陣に戻つた。

宇都宮の戦いの翌日、豊臣軍は奥州へ伊達軍は越後へ、毛利軍は甲斐へと向かつた。伊達軍が豊臣軍に降伏し東国の巨大勢力は、甲斐の武田信玄・越後の上杉謙信だけとなつた。今、戦国の世は終わりを告げようとしていた。

征伐（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

終息

宇都宮の戦いで伊達軍が敗北し豊臣軍に降伏したという知らせは全国に回った。そしてその知らせは、甲斐の国にも伝わった。

甲斐の国の武田軍は、豊臣軍に命じられた徳川軍の攻撃により衰退していた。そんな状況で、宇都宮のことが知らされた。

「それは、誠か」

「はい」

武田軍本陣で、猿飛と信玄が話していた。

「あの、独眼竜が……」

「これで残るは、我ら武田と越後の軍神のみとなりました」

「今、豊臣秀吉はどこにいる？」

信玄は、猿飛に秀吉の居場所を聞く。

「秀吉は今、奥州を平定しに奥州に向いました」

「そうか、それで佐助。独眼竜は今、どこに？」

今度は、政宗の居場所を聞く。

「独眼竜は、秀吉の命で上杉を討伐に」

「豊臣め、いよいよ天下統一に向けて総仕上げをしようとしておるな」

そう信玄が言うと、佐助は何も言うわずにうなずいた。

「お館様！政宗殿が、降伏したというのは本当にございましょうか
！！」

扉を思いっきり開けて、幸村が入って来る。

「本当だ、幸村よ」

幸村の問いに信玄が答えた。

「あの政宗殿が……」

「それほど、豊臣が強いということじゃ。佐助！」

「秀吉に、この書状を送ってくれ」

そう言つて信玄は、佐助に書状を渡した。

「……承知しました、お館様」

そう言々と佐助は、姿を消した。

「お館様、先ほどの書状は？」

「武田の名を残すための、大事な書状じゃ」

「武田の、名を残すため？お館様、まさか」

「そうじゃ、もうこの日の本を治める者は決まった。決まったのなら、我らはそれに従う」

「……無念でございませう、お館様」

幸村は、床に膝をついた。

「確かに無念だ。だが、我らが降伏すればこれ以上無駄な血を流さなくても済む。幸村、家康に休戦の申し入れをしてまいれ、家康なら分かってくれるはずだ」

「承知いたしました、お館様」

と行つて幸村は、その部屋から出ていった。

それから数日後、徳川軍と武田軍の間で休戦の条約が結ばれ武田軍は、本拠地である躑躅ヶ崎館を徳川軍と合流した毛利軍を加えた徳川・毛利連合軍に開け渡した。

終息（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

6月28日にブログで、「二次小説発表会（夏）」をやりたいと思います。「二次小説発表会」は簡単にいえば、報告会みたいなものです。

ブログのURLは←

二次小説の館←

<http://ameblo.jp/sakaginntoki/>

二次小説の屋敷←

<http://sakatagintoki.blog.so->

[net.ne.jp/](http://sakatagintoki.blog.so-net.ne.jp/)

統一

甲斐の武田軍が徳川・毛利連合軍に降伏したことは、荒れ果てた奥州を平定しに行った豊臣秀吉に伝えられた。

「申し上げます、武田軍が躑躅ヶ崎館を徳川・毛利連合軍に開け渡しました」

一人の伝令が秀吉に言う。

「分かった。徳川・毛利には、そのまま甲斐に待機せよと伝えよ」

「はは！！」

そう言つて伝令は、その場から出ていった。

「これで残るは、越後の上杉だけとなったね。奥州も平定したしもうすぐ日の本は僕たち豊臣のものになる」

秀吉の後ろにいた、半兵衛が言う。

「そうだな、もうじき我らの力により天下は統一する」

「申し上げます」

秀吉と半兵衛が話していると、一人の伝令が入ってきた。

「どうしたんだい」

半兵衛が聞く。

「越後の上杉軍が、長曾我部・伊達連合軍に降伏したということでございます」

「越後の軍神が降伏したか」

そう半兵衛が言つと伝令は、何も言わずに頷いた。

「御苦労、長曾我部・伊達には越後で待機と伝えてくれ」

「承知」

そう言つて、伝令は出て行つた。

「秀吉、僕たちの夢が叶つたよ。これで、戦国乱世は終わったよ」

「そうだな、半兵衛。大坂に引き上げるぞ」

「分かったよ。秀吉」

豊臣軍本隊は、奥州より引き上げ大坂に戻り、甲斐の国・越後

の国に滞在していた毛利軍・長曾我部軍・徳川軍・伊達軍もそれぞれ自分たちの領土に引き上げた。日の本は今、豊臣の圧倒的な軍力の手によって統一されたのであった。長きにわたって争われていた戦国の世は終わりを迎え今、新しい世が生まれようとしていた。

統一（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になり、次回で最終回となります。

終末

武田・上杉・伊達が豊臣軍に降伏し豊臣秀吉が日の本を統一してから数日後、秀吉・半兵衛は全国の大名を大坂城に呼び出し評定を行った。

「これより、日本の本大名配置をする」

そう言う秀吉は、自分の目の前にいる伊達政宗・武田信玄・上杉謙信・長曾我元親・毛利輝元・北条氏政・徳川家康らを見渡す。

「では、僕から発表させてもらう」

と秀吉の隣にいた半兵衛が言い、秀吉の前に行き懷から大名の配置を書いた紙を取り出し言いだした。

「まず、中国の毛利君には今まで通り中国地方を統治してほしい」

輝元がいる方を向いて言う。

「は！」

輝元は、半兵衛に一礼して言う。

「次に四国の長曾我部君だが、君には土佐と阿波を治めて欲しい」

「ちよつと待て！ 讃岐と伊予は誰が統治するんだ！」

元親が大きな声を出して言う。

「元親君、君は一度僕たち豊臣に反逆しているんだよ、領地没収くらいあたりまえじゃないか。讃岐と伊代については豊臣が統治する。いいね元親君」

「……分かった」

元親は、小声でいい承諾した。

「それでいい、次に徳川君。君には、東海道の三河・遠江・駿河・尾張・美濃・伊勢・を統治してほしい」

「心得申した」

家康が納得した顔をして言う。

「北条君、君には関東を今まで通り統治してもらう」

「任してくだされ」

「上杉君、越後を統治してもらおう」

「……」

謙信は、何も言わずに首を縦に振る。

「次に、武田君には甲斐と信濃を統治してもらおう」

「……」

信玄も何も言わずに、首を縦に振るだけだった。

「最後に、奥州の政宗君だが。君には、今まで通り奥州を統治してもらおう。その代わり、大幅な軍縮をしてもらおう。いいね、政宗君」

そう言いながら半兵衛は、政宗を睨むような目をして見る。

「……OK」

といつもより、トーンが低い声で言う。

「九州や他の領土については、僕たち豊臣が統治する。以上で、発表を終わる」

そう言うつと半兵衛は、紙を折りたたみ懐に入れ最初に座っていたところに戻り再び座る。

「よいか、これからは我が豊臣のため日本の本のため皆の力を合わせ豊かな国にしようぞ!!」

と豊臣秀吉は、宣言した。

日の本は今、豊臣の圧倒的な軍事力の手によって統一されたのであった。長きにわたって争われていた戦国の世は豊臣秀吉の手によって終わりを迎え今、新しい世が築かれようとしていた。

出 演

坂田 銀時

坂本 辰馬

桂 小太郎

毛利 輝元

伊達 政宗

片倉小十郎

武田 信玄

真田 幸村

猿飛 佐助

徳川 家康

上杉 謙信

北条 氏政

長曾我部 元親

豊臣 秀吉

竹中半兵衛

志村妙

毛利家家臣

島津家家臣

伊達家家臣

徳川家家臣

武田家家臣

上杉家家臣

北条家家臣

豊臣家家臣

長曾我部家臣

演出・シナリオ

坂田銀時

原作

銀魂

戦国BASARA

2010年6月28日

戦国乱世製作委員会

終末（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の51話をもちまして最終回とさせていただきますが、シーズン其ノ弐の総集編を投稿したいと思います。

戦国乱世シーズン其ノ式（総集編）

第六天魔王織田信長が本能寺で散ってから4ヶ月後日の本は今だ戦乱の世であった、織田信長を倒した高杉晋助率いる鬼兵隊は中央を統治し少しずつ領土を増やしていった織田家と同盟を結んでいた北条家は織田が滅亡し少し勢力を弱めたが今だ関東を治める大名であった、三河の徳川家康は武田・北条・鬼兵隊が互いに戦力を削っているのただ見ているだけであった四国の長曾我部元親は四国で要塞富岳のさらなるパワーアップを目指し日々研究をしていた、そして甲斐の武田は越後の上杉と川中島で雌雄を決していた、そのころ奥州の独眼竜伊達政宗は勢力の拡大を目指して日々奥州周辺国に遠征に出陣していた。そして、銀時がいる中国の毛利は特に目立った動きを見せていなかった。

「銀時よ、この中国も以前より比べると平和な地になったの。」

「そうだな、城下もにぎやかだし周辺国も全く攻める気配もないし平和なとこだね。」

「まったくだ、そうだよなあははは。」

「王手飛車どり。」

「ちょっと待ってくれ。」

「ダメだ、これで何回目だと思っているだ。」

「まゝそこを何とか。」

「ダメ。」

そっさいながら銀時と輝元はのんびりと将棋を打っていた。

「たく、しょうがねゝな、今回ただぞ次はねえからな。」

「分かった、分かった。」

「輝元様、輝元様一大事でございます。」

「よゝズラ、どうしたそんな険しい顔して道端でなんか汚いもの踏んだのか。」

「ズラじゃない桂だ、そんなわけないだろうそんなことより輝元様大変です。」

「なんかあったのか？」

「はい、鬼兵隊の首領高杉晋助が討たれました。」

「なに、それはまことか。」

「おいおい、冗談きついぜあの高杉がやられわけねーじゃん。」

「嘘ではない本当だ。」

「で、誰にやられたんだ？」

「それがいまだつかめていません。」

「おい、そこが肝心のところだろうたつくだからお前はズラなんだ。」

「ズラじゃない桂だ、何回言っただけなら気が済むんだこの天然パー

マ野郎！！」

「まゝまゝ二人ともその辺にしとけ。」

銀時と桂が口喧嘩をしそれをなだめていた輝元だった。

「相変わらず、面白いことやるね。」

「「誰だ！！！！」」

そつ三人が口をそろえて言った。

「これは失礼、俺は武田軍真田忍者隊隊長猿飛佐助。」

「これはこれは、わざわざ甲斐の国から来たのかご苦労様。」

「それはどうも、それはさておき今回の高杉の討ち死には知っているか？」

「知っているが誰がやったかのは分からぬとこだ。」

「そうかい、だったら教えてやるさ。」

「高杉をやったのは豊臣秀吉だ。」

「豊臣秀吉？誰だそいつは？」

「大阪に拠点を置く奴でね、今までは信長が死ぬまでずっと息をひそめて軍事力をためていた奴でね、今回信長が死んでから勢力を徐々に拡大させていた、そして旧織田領を治めていた高杉と戦うために山城の国山崎で言うところで戦ったらしいが圧倒的に豊臣側が優勢だったらしい。」

「それでどうなった？」

「それで、高杉側が負けて京都に退却中に豊臣軍の奇襲に会い打ち取られたらしい。」

「豊臣秀吉か、まこと恐ろしい男よ。」

「それで、毛利の旦那お館様から伝言を預かってきた。」

「甲斐の虎が。」

「我々武田は、今回のことを受けてしばらく動かぬようにしようと思っそうなれば豊臣はまず西国から攻略するであろうおそらく最初は毛利だと思っそこで今は西国で連携を保つ必要がある、そこで再び長曾我部と講和を結んではいかがと思っ。」

「分かった、甲斐の虎にはこう伝えてくれ我が毛利は豊臣側に着くと伝えてくれ。」

「・・・分かったそう伝えるよそれじゃ。」

「輝元、豊臣につくのか。」

「そうだ、なんか文句があるのか？」

「いや、でもどうして？」

「中国の民を守るためじゃ、豊臣の軍事力は圧倒的だそんな奴らと戦っても無駄に全力を削るだけじゃ、銀時行くぞ。」

「行くつてどこに？」

「大阪だ、豊臣に同盟を申し込む。」

「そうかい、分かった。」

毛利輝元は豊臣秀吉と同盟を結ぶために輝元は銀時ほか400人の兵士を引き連れて大坂城に入城した。入城した輝元は秀吉と会見するための部屋に案内された。

「ここでお待ちください。」

「分かり申した。」

「輝元よ、しかし大坂つてこんなにも発展していただなんて思わなかった。」

「確かに、そうじゃなこんな大きな街だとは思わなかった。」

「上様の御入来。」

「我が豊臣秀吉である。」

「私が中国地方を治めている毛利輝元である、それでこつちが私の家来坂田銀時です。」

「分かった、今回は中国よりはるばる大阪まで来ていただき誠にありがとうございます。」

「こちらこそ、謁見していただきありがとうございます。」

「それで、今回はなに要で参られた？」

「豊臣に同盟の申し入れをしに参った。」

「我が豊臣と同盟をしたいと。」

「我が毛利は四国の長曾我部との雌雄の決着をつけたいと思つていゝる、そこに東から豊臣軍が攻めてきたら我が毛利は滅んでしまふ、さらに貴殿方も高杉から奪い取つた領土の平定や東国の動きも監視しなくてはいけない状況かと思ひます、だからここは我が毛利と豊臣が同盟を結び西は我が毛利そして東は豊臣という風にすればたやすく天下をとれると思ひます。」

「なるほど、半兵衛どう思ふ？」

「そうだね、ま、輝元君の意見はなかなかいいもんだ乗つてもいいんじゃないかな。」

「分かつた、我が豊臣は毛利と同盟を結ぶ。」

「ありがとうございます、秀吉殿。」

こうして豊臣秀吉と毛利輝元は同盟を結んだのであつた。

毛利軍が豊臣軍と同盟を結んで数日後輝元は大急ぎで安芸の国戾つて軍を整え出陣した、毛利軍は豊臣軍と合流するため大坂に向つた。そして大坂に到着後輝元は豊臣軍軍師竹中半兵衛に会い四国征伐の軍略を練るため二人だけで話が始まつた。

「竹中殿、これが我が考へた四国征伐の戦略図だ。まず、我が毛利が伊予の国を占領するさらに姫路から進軍させ讃岐の国も占領する豊臣軍は淡路から進軍し阿波の国を占領してほしい、我が本隊は豊臣軍とともに大坂を出発し淡路島を占領し一気に四国に上陸する。」
「なるほど、でもこの讃岐方面なんだがここに我が豊臣軍配置した

いのだがどうだろう輝元君。」

「ま、いいだろうただし我が毛利軍の邪魔をすらならば豊臣軍も長曾我部軍と同じ運命をたどることになるだろう。」

「つまりそれは、僕たち豊臣軍も滅ぼすということなんだね。」

「いかにも。」

「分かった、豊臣軍は毛利軍に邪魔なことしなさ。」

「それでよい、では、行こうか淡路島に。」

「うん、そうだねじゃ行こうか。」

毛利・豊臣連合軍は大坂城を出陣した、総勢15000の軍が出陣した。そのころ、安芸・姫路から攻める部隊が出陣し四国攻めが始まった長曾我部軍はあちこちに軍を送っただが豊臣・毛利連合軍は次々に撃破されていった、そして、長曾我部軍は淡路に出陣し淡路の防衛にあたった。

「アニキ、大変ですぜ。」

「どうした？」

「この島全体毛利・豊臣連合軍に包囲されていますぜ。」

「なんだと！」

「しかも、相手は最新の大砲を所有しておりこっちにバンバン撃つてますぜアニキ。」

「よし、こっちも富岳で応戦しろ富岳の力あいつらに教えてやろうぜ。」

「「「アニキー！！！」」」」

そういいと長曾我部軍は自軍が発明した要塞富岳を敵の船に向けて12尺の大筒を向け砲撃を始めた、大筒の威力はとてつもなく強く次々に軍船が沈んでいった。

「これが富岳の力、あれを我の物したい。」

「ま、確かにあの富岳はものすごい強力な兵器だ、是非我が豊臣軍の物したい。」

「竹中、そろそろ総攻撃をしかけてもよいな。」

「うん、構わない、全軍淡路島に上陸せよ。」

「毛利軍も淡路島に上陸せよ。」

毛利・豊臣連合軍は淡路島に上陸を開始した。

毛利・豊臣連合軍は淡路島に上陸し長曾我部軍と戦っていた、その中には銀時の姿があった。

「あの、白い陣羽織を着た男の首取れ!!」

「なんだ、俺の首がほしいのか？それは悪いな〜だってその前にあんたらの首とらせてもらったぜコノヤロウ!!!」

そう言いと銀時の周りにいた長曾我部軍の兵士を斬った、一方豊臣軍の兵士は統制された軍と言っていいほど集団戦に追い込み敵を倒していった。

毛利・豊臣連合軍本陣

「輝元君、だいぶ長曾我部軍の兵士を倒せたね。」

「まだまだ、この島全体を制圧したわけではない。」

「ま、そうだけどこで長曾我部軍を叩いておくと後々の作戦が楽になる。」

「申し上げます、淡路島の北部を完全制圧しました。」

「御苦労、それじゃ輝元君僕らも行こうか。」

「分かった、では参ろうか。」

そのころ、銀時は長曾我部軍本陣のすぐ近くまで来ていた。

「ここから先は一步も行かせん。」

「どけえー!!ザコは引ッ込んでなコノヤロウ!!!」

そう言いと、本陣を守る最後の兵士を斬って自分の刀を鞘に納めてから本陣に乗り込んだ。

「あんたか、大將は？」

「俺が西海の鬼の長曾我部元親だ。」

「そうかお前が、だったらあんたの首とらせてもらっぜ。」

「ほう、俺の首をとるかい度胸じゃねえ〜かいいぜ、やってやるぜこの西海の鬼が相手してやるっぜ。」

「そうじゃね〜と楽しくないぜ、んじゃ一つ相手してもらっぜ。」

「おうよ!!!」

そう言いと元親は自分の大槍を構え、銀時は自分の刀を鞘から出し戦闘の構えをとった。そして、二人は大きく振りかりその戦場に「カキンーン!!!」という音が大きく鳴り響いた。

「あんた、結構やるじゃねーか。」

「おうよ、西海の鬼をなめるんじゃねえよ。」

「それは悪かった、てつきり弱いやつかと思っっていたぜ。」

「あんた、俺を怒らせると怖いぜ。」

「だったら、怒ってみろよ俺がその鬼を退治してやるぜコノヤロウ!!!。」

「なめた口でいつてんじゃねえと言いたいとこだがこの戦もつ俺たちの負けだ引き上げさせてもらっぜ。」

「ちよつと、待て逃げんな。」

「じゃーな。」

そう言い残し元親はその場から退却した、連合軍は淡路島を占領した。連合軍は淡路島に城を築きそこを四国征伐の本拠地を置いた。豊臣・毛利連合軍が淡路島に四国征伐の拠点となる城を築城して数週間後、竹中半兵衛と毛利輝元は天守で四国征伐の最終作戦について話していた。

「さて、いよいよ四国を本格的に攻める準備が整ったね、輝元君」
半兵衛が輝元に言う。

「そうだな、この淡路島を拠点に四国の長曾我部を討伐できる」

「そう、だからこれから四国本土での合戦が多くなる」

「そう言うつと半兵衛は、四国が載っている地図を取り出した。

「だから、これからは各方面から攻めて行く。毛利軍は伊予国と讃岐国から四国本土に上陸しその二力国を占領してほしい。そして僕ら豊臣軍は、阿波国から上陸し阿波を占領する」

と輝元に四国征伐の計画を言う。

「しかし、これでは我が毛利軍の損害が大きいのでは」

「それは分かっている。だから、四国征伐が成功し長曾我部が降伏したあかつきには、四国の半分を毛利に渡すよ」

「半兵衛よ、それは誠か？」

そう輝元が聞くと、半兵衛は頷く。

「分かった、では明後日から四国に上陸したそう」

そう言い残し、輝元は部屋から出て行った。

明後日、毛利軍は伊予・讃岐の二カ国に上陸し占領し豊臣もその翌日に阿波国に上陸、占領した。

毛利・豊臣連合軍が四国征伐を開始してから、数か月戦況は連合軍が優位だった。長曾我部軍は土佐の国に追い込まれもはや、この合戦は連合軍の勝ちが見えていた。

毛利・豊臣連合軍本陣

「これで、この四国は僕たちの物だね輝元君。」

「まだよ、あの長曾我部が滅びなければこの戦まだ勝っていない。」

「ま、そうだけどこの状況では我々の勝利は確定している。」

「申し上げます、長曾我部元親が来ています。」

「とうとう、降伏に来たか。」

「すぐに会おうここへ連れてこい。」

「ははー!!!」

「もう、この四国征伐も終わりだね。」

「そうだな、終わったな。竹中殿、秀吉殿は呼んでなくていいのか？」

「あゝ秀吉なら今、ここにはいない。」

「それでは、どこに行かれた？」

「三河だよ、今徳川家康と会談中だ。」

「ほう、あの徳川が。」

「徳川が僕たち豊臣と同盟を結びたいと申し出があった。それに答えるために三河に行った。」

「そうであつたか、でもこれで東国もより一層制圧しやすくなったな。」

「でも、まだ上杉・武田・北条・伊達がいるからなかなか制圧はたやすくはないよ。」

「元親殿が見えられたました。」

半兵衛と輝元の前には傷だらけの元親の姿があった。

「君が西海の鬼こと長曾我部元親だね。」

「おう、そうだ。」

「それで、こんなところになに用だ元親。」

「俺たち長曾我部軍はあんたらに降伏する。」

元親は、悔しそうな顔で降伏を宣言した。

「それが正しい判断だ、元親君。」

「貴様が我らの軍門に降ったおかげでおおくの者が救われた。」

「これからは、僕たち豊臣軍の一員となって天下統一のため協力をするところで誓えるか？」

「あゝ、誓ってやるぜ。」

「そうか、分かったでは早速君の処分を言う元親君、君のこれからの領土は土佐と阿波の2カ国だけとする、讃岐は豊臣そして伊予は毛利が統治する、それが君の処分だ。」

「ま、しょうがなくてやる。」

「そうか、良かったね輝元君新たな領土が手に入って。」

「まゝな、これは当たり前前の措置だ。それより竹中、秀吉殿がいないのに勝手に決めていいのか？」

「大丈夫、ちゃんと秀吉から許可はとってる心配はない。」

「長曾我部、残念だったのう讃岐と伊予がなくなつてま、これが貴様の力よまだまだ弱いのだ。」

「なんだと、てめえー！」

「おっと、我逆らえば豊臣を敵に回すと一緒ぞ。」

「な！」

「貴様はこれから我々には逆らえぬことを覚えておくがよい。」

元親は輝元をにらんだ、四国征伐は豊臣・毛利連合軍の勝利に終わった。一方秀吉と家康が同盟を結び豊臣の勢力はより一層拡大した。長曾我部軍が豊臣・毛利連合軍に降伏したところは東国の大名たちに豊臣の強さを見せたのであった。そして、豊臣は東海道の徳川家

康と同盟を結びさらに東国への勢力を広げていた。これに危機感を感じた武田・上杉・北条は東国の連合を作ろうと武田信玄が提唱し上杉謙信・北条氏政は三国同盟を結んだ、信玄は奥州の伊達政宗にも同盟参加を促したが政宗はこれを無視し続けていた。

奥州米沢城

「筆頭、甲斐の虎から使者が来てますぜ。」

「今は、忙しいといっておけ。」

「ははあー！」

「よろしいのですか、政宗様？」

「あゝ別にいいさ俺はそんな同盟の一員なりたくないぜ。」

「ですが、今のこの現状を考えてみてもやはり甲斐の虎の申し入れを受け入れるべきでは。」

「お前もそんなこと言うのか小十郎よ。」

「今 四国の長曾我部が降伏しあの徳川まで豊臣に着いた今豊臣はこの日の本の半分を自分のものとしています。」

「んなこと、見れやあゝ誰だって分かる。」

「今の豊臣とまともに戦っても我らの負けは見えています。」

「それはどうかな、戦はやってみないと分からないものだ。YOU SEE？」

「では、逆にお聞きしますが政宗さまは今後どうなさるきですか？」

「HA、この奥州から直接大坂に向って一気に山猿の首をとる。」

「な、・・・・。」

小十郎は、言葉を失った。政宗が直接大阪まで行きそのまま豊臣秀吉の首をとるつもりだと考えていたことに驚いていた。

「政宗様、正気ですか？」

「あゝ俺はいつだって本気だぜ小十郎。そうと分かったなら家臣を呼べ出陣するぞ。」

「お待ちください、政宗様。あなた本当に豊臣と戦って勝てると思ってるんですか？」

「なんだ、お前そんなに弱気な奴だったか小十郎。お前は俺の背中

を守ってくれりゃいいんだ。」

「・・・分かりました、あなたのその思いに答えて見せましょうぞ。」

「thank you小十郎。」

そしてその翌日政宗は家臣を米沢城に召集し大坂に遠征すると家臣に知らせすぐ出陣の準備を始めた。

米沢城 政宗の部屋

政宗は、自分の部屋にいた。そして、政宗は壁に飾っていた刀を見ていた。

「・・・父上、俺はこれから奥州筆頭の名を賭けた大戦に言ってくるぜ。」

そう言うと政宗は壁に飾っていた刀を自分の腰にさしていた鞘に納めて部屋を後にした。

米沢城追手門前

「Are You ready?」

「YEAH!!!!!!」

「今から大坂に向う、今度の戦いは本気の戦いだぜ。死ぬ気で行くぜてめえらしいな！」

「おおー!!」

「OK、んじゃ行くぜ。」

「YEAH!!!!!!」

「HA!!」

政宗率いる伊達軍は奥州を出陣した。総勢10000の軍を引き連れ大坂に向った。この知らせは全国各地の大名に知れた、無論このところは豊臣にも知れていた。

伊達軍が奥州を出発したころ甲斐の武田は上杉謙信と北条氏政と会談していた。

「さて、この三国が同盟したのは良いのだがなかなか独眼竜が我々と同盟してくれんのが問題よ。」

「本当にどうしよううかね、謙信殿？」

「さて、どうしたものでしょうかね。」

三人が悩んでいた時、武田軍真田忍者隊猿飛佐助が現れた。

「お館様、奥州の伊達政宗が大阪に向けて出陣しました。直接秀吉の首をとる模様です。」

「それは、まことか佐助。」

「はい。」

「となると、信玄公・氏政どのここは独眼竜を先方にして、我らも大阪に向いましょう。」

「そうじゃな、謙信殿言うとおりかもしれんな。」

「よし、では早速我らも出陣する準備をしようぞ。」

武田・上杉・北条軍は、伊達軍を追うために出陣の準備を始めた。そのころ武蔵の国にいた伊達軍は馬を全力で走らせていた。

「小十郎、どうだ馬の調子は？」

「は、万全な状態です。」

「そうか、この分だと三日には大阪につきそうだな。」

そう、政宗と小十郎が話をしていた時目の前に突然一人の男が現れた。

「ちよつと待った！」

「な――！」

政宗は、馬を止めた。

「あぶねーじゃねえか。」

「それは失礼した、あんたと話するにはこうするしかなかったもんで。」

「おい、お前は一体誰だ？」

そう、小十郎が現れた男に聞いた。

「お、失礼。俺は、武田軍真田忍者隊隊長猿飛佐助。お館様より伝言を預かってる。」

「ほー、武田のおっさんが俺に何の用だ？」

「このまま、東海道を進軍していても徳川の軍が待っているだけだ。そこで、我が武田領の中山道を通ってはどうか。」

「なんで俺たちが、東海道を通ること知ってたんだ。」

「だいたい、中山道より開けているし馬を全力で走らすにはちょうどいい道だしな。」

「そういうことか、んでどうして中山道を通ってほしいんだ？」

「伊達軍を先方にして、武田・北条・上杉が一気に大坂に向うためさ。」

「つまり俺たちは、おとりっていうことか。」

「ま、言葉を変えたらそうだな。」

「そんなことだったら、俺たちはこのまま進むぜ。」

「じゃあもしこのまま進軍してもあんた方には勝ち目はない。」

「なんだと、それはどういうことだ。」

「このまま進軍したら、豊臣・徳川・毛利・長曾我部の軍にやられるだけだ。」

「それはどういうことだ。」

「豊臣は西国を完全に制圧した今、次の狙いは東国だ。そこでいつでも攻めれるように徳川・毛利・長曾我部の軍が1か所に集められている。」

「どこだ、その場所は？」

「美濃の国の関ヶ原っていうとこだ、徳川・毛利・長曾我部の総勢は10万だそうだ、そこに堂々行っても一瞬でつぶされるだけだ。そこで、一端俺たちに合流し関ヶ原で撃破してから大坂に向えばいい。」

「そうか、だったら悪いが俺たちはこのまま行かせてもらうぜ。俺たちは奥州を出たときに最後の一人になるまで戦うって決めたんだ。」

「政宗様。」

政宗が、佐助と話をしていた時小十郎が政宗に言った。

「政宗様は、いったい何のために戦うんですか？」

「俺は守るべきがあるから剣を振ってるだけだ。」

「でしたら、なおさらで今回の申し入れを受け入れてください。」

「小十郎。」

そう小十郎が言ったと、小十郎は馬から降り政宗の前に行き膝を地面につけて土下座をした。

「この命に変えてでもこの願いを受け入れてください。」

「……分かった、それじゃあ一つだけ誓え。」

「は！」

「俺の背中を守れいな。」

「は、この命に変えてでも。」

「よし、いいかてめえーらこれから中山道を通って武田・上杉・北条と合流し関ヶ原で一戦交えるぞ。」

「おおー！！！！」

「OK、行くぜ。HA！」

そう言うのと政宗は中山道の方に馬を走らせた。そして甲斐の国で武田・上杉・北条に合流し関ヶ原に向った。そのころこの動きを知った豊臣秀吉は、毛利輝元・長曾我部元親・徳川家康に出陣を命じた。そして、岐阜で合流し関ヶ原に陣を構えた。東軍10万・西軍11万の軍が関ヶ原に集結した。各地の大名が集まり今、ここで西か東かの天下分け目の戦いが始まるうとしていた。

九月十日その日は雲ひとつない青空だった、そしてその空の下では天下分け目の戦いが始まるうとしていた。西軍11万・東軍10万の軍がここ関ヶ原に集結したのであった。

松尾山毛利軍本陣

「こんな大戦、長篠の戦い以来だな銀時。」

「あゝ本当長篠以来だな。」

「申し上げます、半兵衛殿が本陣に集まってくださいとのことです。」

「分かった、銀時！ついてこい。」

「分かった。」

銀時を連れて半兵衛が待つ豊臣本陣に向った。

天満山豊臣本陣

「あ、やつつと来たね輝元君。」

「遅れ悪い、すまんが我の家臣も同行させてもらってよろしいですな。」

「構わないよ、それじゃ行こうか。」

「分かったでは参ろう。」

そして銀時を連れて輝元は半兵衛と一緒に軍議が行われる場所に向った。そして軍議が行われる豊臣本陣の中心に来た、そこには徳川家康・長曾我部元親そして総大将豊臣秀吉がいた。

「遅れて悪い、すこし半兵衛殿と談義を行っていました。」

「別に構わぬ、では軍議を始めよう。半兵衛頼む。」

「分かったよ、それじゃこれから作戦を説明する。まず先発は元親君、君が先発だ。」

「俺が先発でいいのか。」

「構わない、それでも元親君は小関村から出陣して上杉軍と戦ってほしい。」

「おうよ、任せておけ。」

「それで次は家康君、君は長曾我部軍と上杉軍が戦っている間に藤下村にいる武田軍と戦ってほしいんだがいいかな。」

「もちろん、いいさ。」

「それで残りの毛利軍は関の藤川にいる北条軍を叩いてほしい。」

「分かった。」

「残る伊達軍は僕たち豊臣軍が倒す。それじゃみんな作戦ど通りに頼むによ。」

そう半兵衛が作戦の説明が終わると家康・元親・輝元は自分の本陣に戻った。そしてその数時間後、天下分け目の戦いが始まった。長曾我部軍と上杉軍が衝突したのであった。

「いくぜ、ヤローども！！上杉軍を一気に叩くぞ。」

「アニキー！！！！」

「西海の鬼ですか、いいでしょう。全軍出撃敵を殲滅するのです。」
「おおー！！！！」

上杉軍と長曾我部軍が衝突し天下分け目の戦いが始まった。

桃配山武田軍本陣

「お館様！！上杉軍と長曾我部軍が衝突しました。」

「そうか、謙信頼むぞ。」

「申し上げます、徳川軍がこちらに向ってきます。」

「家康・・・幸村！」

「はー！！」

「貴様が軍を率いて徳川軍を迎え撃ちのだ。」

「心得申した、お館様！各々方、それがしに続いてくだされ！」

「おおー！！」

武田軍と徳川軍が藤下村の近くで衝突した。青空の下、関ヶ原で天下分け目の大戦が始まった。はたして勝ちのは西軍が東軍が今ここに天下をどちら握るかの戦いが始まったのであった。

豊臣軍本陣

「申し上げます、長曾我部軍が上杉軍に攻めかかりました。」

「いよいよ、始まったか半兵衛よ。」

「なんだい秀吉？」

「のろしを上げよ。」

「分かったよ、のろしを上げよ。」

そう半兵衛が兵士に命令し、のろしが上がった。

徳川軍本陣

「殿、豊臣軍本陣からのろしが上がりました。」

「分かった、では我らも戦場に出よう忠勝！！」

「・・・！！」

「頼んだぞ。」

「・・・！！」

「全軍、武田軍に突撃せよ！」

「おおー！！」

そう家康が命令し、徳川軍は武田軍に突撃した。

豊臣軍本陣

「申し上げます、徳川軍が武田軍に突撃しました。」

「そうかい分かった下がってよい。」

「は——！」

「半兵衛。」

「分かつてるよ、毛利軍に出撃せよと伝えてきなさい。」

「御意！」

「この戦、勝ち見えたよ、秀吉。」

「我々に敗北という文字はない。」

毛利軍本陣

「いよいよ始まったな、輝元。」

「始まったな天下分け目の戦いが。」

「申し上げます、半兵衛様が山を下りて北条軍を叩けということで
ございます。」

「分かったと伝えてくれ。」

「御意。」

「それじゃ行ってくるわ。」

「気をつけてな。」

「任せておけ。」

そして、毛利軍は松尾山を一気に駆け下り北条軍に衝突した。

「行けえ——！！北条軍を蹴散らせ！」

「おお——！！」

「北条の名にかけて戦え。」

「おお——！！」

北条軍と毛利軍が松尾山のふもとで衝突した、毛利・長曾我部・徳川・武田・上杉・北条の軍が山に囲まれたここ関ヶ原で衝突したのであった。

伊達軍本陣

「政宗様、いよいよ始まりましたな。」

「HA、武田のおっさんと軍神と北条のじーさんが戦っている間に
一気に突破し山猿の首とらせてもろうとするか。行くぜ、てめえら

一気にこの場を突破し山猿の首とるぜHA!!」

「筆頭!!」

政宗が馬を走らせたならそのあとに続いて伊達軍の兵士がそれに続いて南宮山から一気に馬で駆け下り関ヶ原の中心を一気に走っていた、途中徳川軍が伊達軍に斬りかかってきたがそれをことごとく撃破し豊臣軍本陣に迫っていた。

豊臣軍本陣

「伊達軍が迫っています。」

「来たか、思った通りだ鉄砲隊伊達軍を狙撃せよ。」

「は!」

「伊達の若僧め我が豊臣軍に刃を向けるといい度胸をしとるわ、半兵衛!」

「なんだい秀吉。」

「貴様は前線で指揮しろ。」

「分かったそれじゃ行ってくるよ。」

そう秀吉にいい半兵衛は鉄砲隊を引き連れて本陣から出撃した。そして伊達軍が通る道に鉄砲隊を構え伊達軍が来るのを待った。そして数分後伊達軍が現れた。

「ようやくお出ましか、鉄砲隊構え!!」

そう半兵衛が鉄砲隊に命令し伊達軍をいつでも撃てる準備をした。

「HA、あとちよつとで豊臣本陣だ楽しんで行こうぜ!」

そして伊達軍が豊臣軍の鉄砲隊がいるとは知らずに馬を全速力で走らせていた。そして

「鉄砲隊、放つてー!!」

「バンバンバン!!!!!!」

その周辺に鉄砲の音が響いた。

「ん、バカな……」「なんでこんなところ……」「と言いながら伊達軍の兵士が馬から落ちた。

「なんだと、なんでこんなところにいるんだ。」

「政宗様、どうなさりますか?」

「H A、ここを一気に突破する。」

「正気ですか？」

「俺はいつだって本気だぜ。」

「……分かりました、行くぜおめえーら政宗様の後に続け！」

「おおー！」

「上等、行くぜH A！ー！」

そう政宗がいい馬を豊臣軍に向けて走らせた。そのあとに続いて伊達軍の兵士も続いた。

「やはりそのまま来たか、いいよ相手してやろう全軍伊達軍に突撃せよ！」

「おおー！！！」

豊臣軍と伊達軍が衝突したのであった。

豊臣軍が伊達軍に狙撃された後、豊臣軍は伊達軍に突撃した。

「やってくれるじゃねえーか、てめえーら！！ここで仲間の仇とろうぜ、H A！！！」

「筆頭！！！」

伊達軍と豊臣軍は衝突したのであった。

「やはりそう来たか、政宗君。全軍、伊達軍に突撃せよ。ここで伊達軍を粉砕する。」

「おおー！！！」

豊臣軍は次々に伊達軍に斬りかかった。

「H A、いいねー俺はそういうやつは好きだが仕える相手が気に入くわねえ！！！」

「独眼竜だ、討ちとって名を挙げろ！」

「おおー！！！」

政宗に挑んでくる豊臣軍の兵士は政宗の六爪で切り刻んだのであった。

「さすが豊臣の山猿だ、すごい数だなこりゃ。」

「政宗様！」

政宗の背後に小十郎が来た。

「政宗様、敵兵は我らに任せ急ぎ豊臣本陣に向い秀吉の首をとってください。」

「小十郎。」

「政宗様は、天下をとられるお方、ここは誰よりも先に秀吉の首をとり伊達の名を天下に示さなければなりません、それは政宗様にしかできないことですここはなにとぞ。」

「筆頭、行ってください。ここは俺たちに任せて。」

「・・・OK、ここはお前たちに任せませ！」

「は！」

「任せてください、筆頭！」

政宗が小十郎や伊達軍兵士にそう伝えたと政宗は豊臣本陣に向った。そのころ北条軍と戦っていた毛利軍は

「あの銀髪頭の男の首をとれ！」

「おおー！！！」

「てめえーらには用はねえんだよコノヤロウー！！！」

そう銀時が言うとき銀時は、北条軍の兵士を瞬殺で斬った。銀時は鬼神のごとく戦場を駆けまわっていた。銀時は武器を選ばない、刀の刃が折れて刀が使えないときは敵兵から奪って敵を倒したり槍で敵を突いたり二本の刀を持って敵を斬ったり、薙刀や弓やクナイを使っ

て戦っていた。

「銀時！」

銀時が北条軍の兵士を斬ってまた別の兵士に斬りかかろうとした時、

どこかで聞いた声がした。

「なんだ、ズラか。」

「ズラじゃない桂だ、何度言ったら分からないんだ。」

「うるせーな、いいだろう今はそんなのどうだって。」

「よくない、まったくお前と言う奴は。ほら正面来てるぞ。」

銀時が正面を向くと北条軍の兵士が銀時に斬りかかろうとしていた。

「人が一息しようと思ったのに、どうしてこんなにくるんだ！」

そう銀時が言った後銀時は自分が持っていた刀で北条軍の兵士をバ

ツサバツサと切り刻んでいた。

「戦とはそういうもんだ、いい加減学べ。」

「うるせえ！！黙ってるズラ！」

「ズラじゃない桂だ！！！」

桂は、その怒りを敵にぶつけるように敵を斬りまくっていった。

関ヶ原では、全国の大名が集まり戦っていた。

「ズラ、こんなの久しぶりだな。」

「ズラじゃない桂だ、久しぶりだな。長篠の事を思い出す。」

「長篠ねえ、そう言えば辰馬はどうした、さつきからあいついねえじゃねえか。」

「あいつならどつかで戦ってるんだろう。」

銀時と桂が話していたら二人は北条軍の兵士に囲まれていた。

「あ、こりややべえな。ズラ。」

「とんでもない悪い状況だな。」

「あの二人の首をとれ！」

「おおー！！！」

そう北条軍の武将が命令し敵兵が一気に斬りかかってきた。

「行くぜ、ズラ！」

「ズラじゃない、桂だ！！！」

二人は敵兵に突撃し戦った。銀時はたとえ矢が何本も飛んでもそれよけ敵を斬っていった、刀が折れたら近くにある武器で応戦したのであった桂の方は、刀で敵を目が追いつかない早さで敵を斬り裂いていったそれは神業のような速さであった。

「ズラ！どっちが多くの敵を斬るか勝負しようや。」

「勝負だと、こんなときにか！」

「負けたら勝った奴になんかおごるっていうのはどうだ！」

「いいだろう、そう勝負乗った！」

そう二人は戦いながら勝負をした、どっちが多くの敵を斬るかの勝負をしたのであった。

「なんだあの二人、化けもんだぜありや。」

「おい、お前あいつらのこと知らないのか。あの銀髪頭の奴は「白夜叉」って呼ばれてて鬼神のごとく敵を斬り裂くからそう呼ばれてるらしい。」

「じゃあ、もう一人の奴は？」

「あいつは、戦場の貴公子って呼ばれてるらしい。」

「おっかねえやつらだ。」

「あいつらとは戦いたくな……」

「おいどうした、だいじょ……」

二人は血を口出しながら地に倒れた。

「ズラ、今何人目だ？」

「これでちょうど150人目だ貴様は？」

「俺は180人だ、こりゃ俺の勝ちだな。」

「まだ、決まってるないぞ。まだ合戦は始まったばかりだ。」

「んなこと、分かってるさそれくらい。」

「今、どんな状況なんだろうなズラ？」

「まったく見当もつかん。」

「そうか。」

毛利軍本陣

「申し上げます、豊臣本陣付近で伊達軍と豊臣軍の戦闘が始まりました。」

「そうか、大義である。」

「は!!」

「さてと今は、我が毛利軍は北条軍と戦い、徳川は武田、長曾我部は上杉、そして豊臣は伊達か。元春はいないか。」

「は!殿、なんでございましょう?」

「確か、大筒を持ってきたよな。」

「たしかに、持ってきましたがそれなに用に。」

「北条本陣に撃ち込め、あのおじいさんに戦力の差を見せつけろ!」

「は!、大筒を北条軍本陣に向けて放て!」

北条軍本陣

「殿、我が押されていますぞ。」

「分かつておるはそれくらい。」

「申し上げます、毛利本陣から大筒で撃たれております。」

「なんじゃと!？」

北条軍本陣には松尾山に陣を敷いていた毛利軍から大筒で攻撃されていた。

「退け!全軍ただちに撤退せよ!」

「殿!」

「全滅する前に撤退するのじゃ急げ!」

「は!撤退じゃ!」

北条氏政は馬に乗り大急ぎで関ヶ原から引き上げた。

「輝元様、北条軍が撤退しております。」

「そうか、全軍北条軍を追撃するのだ。」

「おおー!」

毛利軍により北条軍の追撃が始まった。

「銀時!北条軍を追うぞ!」

「分かった!それじゃ行くか!」

二人は馬にまたがり北条軍を追いかけたのであった。

武田軍本陣

「お館様!北条軍が毛利軍に大筒で攻撃を受け現在、退却しております。」

「なに!それはまことか佐助!」

「まことにございます。」

「それは困った、この戦、負けるやもしれん。」

信玄は困った顔で戦場を眺めた、北条軍が退却した今、この関ヶ原に残っているのは武田軍・上杉軍・伊達軍の三軍対して西軍は、毛利軍・徳川軍・長曾我部軍・豊臣軍の四軍が残っており東軍は少し不利な状況になっていた。

「佐助はおるか!」

「何でしょうか、お館様?」

「このこと謙信には。」

「今、配下の者を送っているもうじき帰ってくると思う。」

「そうか、佐助！貴様も幸村と一緒に戦線に出て戦ってこい。」

「分かりました。」

「さて、どうしたものか。」

そのころ、武田軍と徳川軍の戦いは徳川側が武田軍を押ししていたのであった。

「進め！今こそ武田の陣形を崩すのだ！！」

「おおー！！」

徳川軍は武田軍に総攻撃をしかけていた。そして武田と戦っていたのは徳川だけではなかった。

「今だ、鉄砲隊放って！！」

関が原全体に聞こえる銃声が鳴った。

「豊臣の軍勢力を東軍に見せつけよ！！」

「おおー！！」

豊臣軍の鉄砲隊が武田軍の騎馬隊に向けて鉄砲を撃っていた。そしてとうとう、武田軍の足軽が「ひ！こりや逃げるしかねえべ。」「ひくべ。」と次々に言いだし武田軍の足軽は次々に逃げ出した。

「逃げるな！敵に突撃しろ！！」

「逃げる、逃げる。」

武田軍の武将が士気を挙げようとしても兵士たちは次々に逃げ去っていた。

「えい！貴様らが逃げても俺は突撃するぞ、私に続け！！」

数人の足軽と騎馬兵がその武将の後に続いたが

「放て！！」

「うぎゃー！！」

「無念……」

「武田の侍魂見せつけてやったぞ……」

豊臣軍の鉄砲隊によって討ち敗れたのであった。武田軍はもう総崩れていたのであった。武田軍の本陣では

「お館様、もう限界です。ここは退きましょう！」

「さよう、ここは一旦甲斐に退き再起をはかりましょう。」

武田軍の武将が信玄に撤退の進言をしていた。

「いやまだじゃ、まだ関ヶ原からは退けぬ！」

「お館様、もうそこに徳川軍が迫っていますぞ！」

「お館様……！」

「どうした？」

一人の足軽が陣に来た。

「申し上げます、馬場信房様が豊臣の鉄砲隊の狙撃を受け討ち死！」

「なに！」

「馬場殿が。」

「お館様、撤退のご指示を！」

家臣らが信玄がいる方向を見た。

「……分かった、陣を引き払う。小山田・勝頼そなたらに殿を頼みたいのじゃが。」

「お任せくだされ……！」

「全軍、退却せよ。」

関ヶ原の戦場に武田軍の撤退を知らせるホラ貝が鳴り響いた。

武田軍が関ヶ原から撤退を開始したとき、上杉軍は長曾我部軍を押していたのであった。

「全軍、長曾我部軍本陣に突撃し敵本陣を落とすのです。」

「おお……！」

謙信が上杉軍本陣で指揮をとっていたとき武田軍の撤退の知らせが届いたのであった。

「なにそれは、本当ですか？」

「はい、現在中山道方面に引き上げております。」

「そうですか、分かりました。下ってもいいですよ。」

「は！」

足軽はその場を後にした。

「謙信様、どうなさりますか？」

「今、この状況では我らが負けてしまいます。」

家臣が謙信に言った。

「……仕方ありません、全軍に伝えなさい。だたに関ヶ原から引き上げなさい!!」

「は!!」

「景勝・兼続、殿は任せましたよ。」

「お任せあれ!!」

謙信は自分の愛馬にまたがり、関ヶ原を後にした。

豊臣軍本陣

「申し上げます、上杉・武田・北条軍が撤退しました。」

「そうか、これで残るは伊達のみである。全軍伊達軍に突撃せよ!!」

「おお!!」

秀吉は、全軍に総攻撃を命じたのであった。そのころ、豊臣軍本陣を目指して馬を走らせていた政宗は次々に斬りかかってくる豊臣軍の兵士を六爪で斬り裂いていった。

「雑魚には用はないって言うてるんだろうが!!」

政宗は驚異的な速さで豊臣軍本陣に向っていた、そしてあと少しで敵本陣に着こうとした時後ろから伊達軍兵士が来たのであった。

「筆頭。」

「どうした、なんかあったか？」

「小十郎さまから伝言を預かっていますぜ。」

「伝言？」

「すぐに、この関ヶ原からお引きなさってくださいとのことでございます。」

「どういうことだ。」

「今、この場にはもう伊達軍しか残っていませんもうこの戦、勝ち目はありません。ここは兵のためにも撤退のご指示をと申ししていました。」

政宗は、馬にまたがったまま戦場を見ると本当に伊達軍しか残って

いないことに驚いていた。あの信玄と謙信が退却するとは思って
なかったのであった。

「・・・・・・撤退だ。」

「は？」

「撤退だ！！全軍に撤退つて伝えろ！！！」

「は！！！」

「ha！」

政宗は、走っていた逆の方向を向いて馬を走らせていた。

「小十郎さま。」

伊達軍の兵士が小十郎を呼んだ。

「小十郎さま、筆頭が撤退の指示を出しました。」

「そうか、全軍撤退しろ！！！」

関ヶ原全体に、伊達軍の撤退のホラ貝の音が響いた。

豊臣軍本陣

「申し上げます、伊達軍が引き上げ始めました」

「そうか、全軍深追い無用！もう我らの勝ちが決まったぞ！！！」

伊達軍の退却で関ヶ原の戦いは西軍の勝利で終わったのであった。

「銀時！」

銀時が誰かに呼ばれ後ろを向いた。

「なんだ、ズラか」

「ズラじゃない桂だ、それよりも伊達軍が関ヶ原から退却したらし
いぞ」

「何！そいつは本当か？」

「ほんとだ、輝元様が今陣に戻つて来いと命令があつた」

「んじゃ、陣に帰ろうか」

と銀時は毛利軍本陣に引き上げた。

毛利軍本陣

「銀時、無事であつたか！」

「ああゝなんとかな」

「明日、安芸に引き上げる。お前も準備しておけ」

「ん？この関ヶ原に滞在しなくていいのか？」

「先ほど軍議あつてな、こたびの合戦で多くの犠牲が出たので、一旦国元に帰ってもいいという事になったんじゃ、だがわしは大阪に向う」

「なんで、大阪なんだ？」

「各国の大名は大阪に滞在するように言われておるんじゃ」

「そうか、分かった」

関ヶ原の戦いが終わった夜、銀時と桂と坂本が話していた。

「おい、明日安芸に帰るらしいぞ」

「そうか、久しぶりにゆつくりできるのう桂」

「・・・」

桂は黙り込んでいた。

「どうしたズラ、毒キノコでも喰ったか？」

「いや、実はお前たちに話しておきたいことがある」

「実を言うとなしも話しておきたいことがある」

「おいおい二人ともなんかあったのか？」

桂が話し出した。

「俺、実は毛利家から離反する」

「マジで言つてんのか？」

「ああ、本気で言つてる」

「どうして離反するんだ？」

「豊臣の一方的な戦い方を見たからさ、豊臣のやつらは降伏を申し入れた人を一方的に殺した、しかもそれは武器を持たない民衆も殺したこのまま豊臣に天下をとらせたらこの国は腐敗した国なる、俺はそいつを阻止するために毛利から離反した」

「それで、お前一体どうやって阻止するつもりだ？」

「高杉みたいに義勇軍を作るつもりさ」

「そうか、んで辰馬、お前の話はなんだ？」

「わしは、これから大阪に向う」

「大阪？」

「そうじゃ、んで大阪で商いをするつもりだ」

「なんでまた商いなんだ？」

銀時が坂本に聞いた。

「もうこの世はもう豊臣の天下じゃ、これ以上戦ってもいたずらに仲間を死なせるだけじゃあ。わしはもう仲間が死ぬところを見とうない。これからは、もつと高いところを目指さないかん日の本の民全員が利益を持つことをやりたいんじゃ」

「そうかい、分かった。みんなそれぞれ違う道を行くけれどそれはお前らが決めた道だ、最後までそれを貫きとうすんだ」

「分かった！！」

「んじゃ、最後の宴会をしますかねえ」

と銀時・桂・坂本の三人がいる最後の夜は過ぎっていった。そして、朝を迎えた。三人は街道の分岐点にいた。

「んじゃ、元気だな」

「お前もな、銀時」

「それじゃ、二人とも先にわしは行くわ」

「おう、じゃな坂本」

「辰馬、元気だな」

坂本は、手を振りながら伊勢街道方面に歩いた。

「それじゃあ、元気にやれよ。ズラ」

「ズラじゃない桂だ！！最後の最後までそれだな」

「いいじゃねえか、ま、元気にやれよ」

「それじゃ」

桂は東海道街道方面に向いて歩いて行った。銀時は、安芸に向けて馬を走らせたのであった。

関ヶ原の戦いが終わり、銀時は安芸に引き上げたのであった。そして自分の屋敷に戻り久々に家でのんびりと過ごしていた、そしてある日銀時は、広島城の城下町をぶらぶらと歩いていた。

「ああ、暇だな。久々に帰ってきててもすることねえしなあ」

そして、銀時は一軒の団子屋に立ち寄ったのであった。

「おい、団子二つくれ」

「はい、只今」

銀時は、団子を二つ頼んだのであった。そして、

「へいお待ち、団子二つね」

団子屋の主人が団子を二つ持ってきた、そして銀時は、団子を食べたのであった。

「さてと、これからどうしよっかねえ」

と呟きながら団子を食べた、団子をすべて食べた後銀時はまた城下町をぶらぶら歩いたそして、結局何にもせずに銀時は自分の屋敷に帰ったのであった、そして雨が降る夜、銀時が風呂から出てきて布団に入ろうとした時誰が

「ごめんください」

と屋敷の扉を叩いたので銀時が出て行くとそこには、一人の女がいた。

「あの〜どちら様ですか？」

「旅の者なんです、どうか今晚泊めてはくれませぬか？」

銀時は、悩んだが雨が降ってる中女性を追い返すわけにはいかないと思つて

「もう夜も遅いし雨も降ってるしな、あんたが寝るとこ部屋狭いけどいいよな」

「ありがとうございます」

銀時はその女を屋敷の中に入れてやった、そして、囲炉裏がある部屋に女を連れてきた。女は囲炉裏のどこに行き髪などを布でふいた。

「濡れてるだろう、ここに来て乾かせよ」

「ありがとうございます、あのすいません」

「ん？」

「あなた様にお名前は？」

「坂田銀時だ、んであんなの名前は？」

銀時は、囲炉裏にまきを入れて女に聞いた。

「志村妙と申します」

「どこの国出身？」

「摂津の大阪と言うところです」

「あんた、大阪から旅してんの」

「はい、そうです」

「んで、これからどこに行くの？」

「いえ特に決まっていませんが、このまま西国を旅しようかなって
思っています」

「そうかい、ま、今日はゆっくりして行ってくれや」

「今日は本当にありがとうございます」

「いいって、もう俺寝るから」

「お休みなさい」

「お休み」

そう妙に言った後、銀時はその部屋から出て行き蒲団が敷いてある
自分の寝室に向い寝たのであった。

そして、翌日の朝、銀時が起きると台所の方から物音がするので
行ってみるとそこで妙が野菜を切っていたのであった。

「あんた、なにやってのんの？」

「あ！おはようございます、昨日の一泊の恩返しをしたくて」

「そうか、なんか悪いなそんなことさせてしまつて」

「いえ、あんなにやさしくしてくれたのはあなただけですから」

「なんか、手伝えることある？」

「いえ、もう少しでできるので待っていてください」

「そうか、・・・分かつた」

そう言い残し銀時は台所から出て行った、そして数分後囲炉裏があ
る部屋に妙は自分が作った料理を持ってきて銀時に食べさせた。

「どうぞ、召し上がってください」

「それじゃお言葉に甘えて、いただきます」

銀時は、妙が作った料理に箸を持って行って一口サイズに切られた
野菜を箸で挟み口に運んだ。

「おいしいな、あんたすごい料理うまいな」

「そんなこと、ありませんよ」

銀時に褒められて妙は笑った。そして、妙は銀時に

「あの、銀時さん」

「ん？どうした」

「お願いがぁあります」

「お願い？」

「はい、今日一日広島城の御城下を案内してくれませんか？」

「ああ、別に構わんよ。いい暇つぶしになるしな」

「いろいろとありがとございます」

「いってことよ」

そう妙と話しながら銀時は朝飯を食べたのであった。

朝飯を食べた後、銀時は妙に頼まれて広島城の城下町を案内をするために広島城の城下町に向ったのであった。そして、城下町に着くと銀時は妙に広島城の城下町を案内したのであった。

「この辺にものすごいまい団子屋があるんだが行くか？」

「はい、行きましようちようどおなかも減ったし」

「そうか、んじゃ行くか」

そう言うとき銀時は妙を連れてその団子屋に向った。そして、団子屋について中に入って御座敷に座って

「親父、団子10個ちょうだい」

「へい、まいど」

「銀時さん、そんなに頼んで食べるんですか？」

妙は銀時に不思議そうに聞いた。銀時は厨房の方向いて

「ああ、大丈夫だ、いつもこれくらい食べてるしな。なあ親父」

「旦那はいつも結構食べてるからねえ、はい団子十個」

そう団子屋の主人が言うと、主人は団子を机に置いて

「ごゆっくり」

といって厨房の方に戻っていった。そして、銀時は団子を次々に口の中へ放りこんでいった。その姿を見て妙はくすくす笑いながら銀時に言った。

「銀時さんは、甘いもんが好きなんですね」

「糖分とってないとなんか落ち着かなくてな、あんたも遠慮せずに食べな」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

そう言うところ妙は、団子のくしを持って団子を食べ始めた。そして、団子を食べ終わってお茶を飲んで一息ついて団子屋を出て

「次、どこ行きたい？」

銀時が妙に聞くと広島城からホラ貝の音が城下町全体に響いた。

「戦が始まりのですか？」

妙が不安そうな声で銀時に聞いた。

「分かんねえが、とりあえず城に行かなきゃいけねえからここでお別れた、それじゃ」

そう妙に言い残し銀時は、城の方に向って走っていった。

城に着くと足軽たちが武器の点検をしていた、そして、吉川元春を見つけ声をかけた。

「元春様、今回はどこに出陣ですか？」

「おう、銀時か。川中島に出陣するらしい」

「川中島？」

「そうだ、今川中島に武田・上杉の連合軍が城を築いておるらしくそれを討伐するために出陣するらしい」

「そうか、分かった。それでいつ出陣するんだ？」

「明日だ、お前も家に帰って支度して来い」

「分かりました」

銀時は、広島城を出て支度をするために自分の屋敷に向った。そして、屋敷について屋敷の中に入る玄関の扉を開くとそこには

「おかえりなさい」

妙がそこにいた、銀時は驚いた。まさか自分地の屋敷にまだいたなんて思ってもいなかったからである。

「なんだ、まだいたのか？」

「はい、あのしばらく間ここにいてもいいでしょうか？」

「ああ、構わんよ。どうせ俺はいまから信濃に行かなきゃなんねえから。屋敷を自由に使っていいぞ」

「そうなんですか、いつお戻りになるんですか？」

「さあ、分かんねえなあ」

そう言うとき銀時は、戦に行く支度をし屋敷を大慌てで出て行った。

そして、安芸を出陣した毛利軍は大坂城で豊臣軍・徳川軍・長曾我部軍と合流し川中島に向けて出陣したのであった。

豊臣・毛利・長曾我部・徳川の連合軍が大坂を出陣してから一週間後、連合軍は川中島に到着し陣を敷いて武田・上杉の軍とにらみ合いをしていたのであった。そして、にらみ合いに我慢を切らした豊臣秀吉は各大名を本陣に呼び軍議を始めたのであった。

「これ以上の、にらみ合いは時を無駄に使うだけぞ。これより上杉・武田軍を一気に叩き双方の大名をここ、川中島で潰す！」

と秀吉が言った後、秀吉の後ろにいた半兵衛が秀吉の前に出て

「それじゃあ、これからの事について話すね。まずは、家康君、君はまず妻女山のふもとまで行き武田・上杉の背後についてほしい」
「心得た」

家康はそういつて、首を縦に振った。

「次に、元親君。君たちの軍は海津城にいる敵を叩いてほしい」

「おうよ！任せておけ！！」

「それで次は、毛利軍は茶臼山の近くまで行き、敵の横腹をついてくれ」

「・・・・・・」

輝元は、無言で首を縦に振った。

「そして僕たち豊臣軍は、正面から敵を迎え撃つ。それじゃあ明日、各自かんばるように」

そして翌朝、雲ひとつない日本晴れをした天気だった。そして、八幡原に銃声が響いた。

「行けえー！！武田・上杉軍をここで粉碎しろ！！」

「おおー！！！！」

豊臣軍が武田・上杉の軍勢に鉄砲を放って戦いが始まった。

「申し上げます、豊臣の軍勢が高坂様の部隊に攻めかかりました」

伝令が武田軍本陣に敵が攻めかかってきたという知らせを信玄に伝えに来た。

「奴め、とうとうしびれを切らしたか」

「お館様、どうしまするか？」

幸村が槍を両手に持って信玄に聞いた。

「よし、幸村よ。貴様今から、最前線に出てしばらくの間敵を食い止めるのじゃ」

「心得申した、お館様――！」

そう幸村は信玄に言っていると、幸村は馬に乗り自分の部隊を率いて最前線に出たのであった。

「お館様」

「佐助か」

幸村が出た後、佐助が信玄の後ろに現れた。

「お館様、長曾我部軍が海津城方面に進軍していらしいです」

「そうか、山猿め。まずは、海津城を落城させて四方八方から攻めここで武田・上杉の両軍を叩くという戦法か」

「おそらく、すでに徳川軍が今妻女山方面からこちらに迫ってきています」

「竹千代……」

そう言っていると信玄は、しばらく黙りこんで戦場の方を眺めていた。そして軍配を持って

「佐助、全軍に伝えよ。敵軍を突破しここ八幡原から脱出する――！このこと謙信にも伝えよ」

「分かりました、お館様」

そう言い残し佐助は、その場から風邪のような音を残してその場から去った。そのころ、茶臼山方面から進軍していた毛利軍は上杉軍と戦っていた。

「一気に切り崩せ――！」

輝元は、全線で指揮をとっていた。そのころ、銀時は

「うおおおー！！そこどけえー！！」

と叫びながら上杉軍の兵士を次々に斬り続けていた。いつもの銀色の髪は血で真っ赤になっていた。

豊臣・徳川・毛利・長曾我部の連合軍が武田・上杉の連合軍に攻めかかって数時間後、形成は圧倒的に豊臣率いる連合軍の方が有利であった。豊臣方は最新式の鉄砲を使い次々に武田・上杉の兵士を討った。そして、豊臣軍本陣にある知らせが届いた。

「申し上げます、長曾我部軍が海津城を落としました」

それは、長曾我部元親率いる長曾我部軍が武田・上杉方の城を落としたいという知らせだった。

「そうか、分かった。下っていいよ」

「は！」

半兵衛が伝令の兵士に下がるように指示し伝令の兵をはその場を去った。

「これで、ようやく総攻撃ができそうだね。秀吉」

半兵衛は、秀吉が座っている方向を向いて言った。

「そうだな、半兵衛よ」

秀吉が、半兵衛の名前を低い声で呼んだ。

「なんだい、秀吉？」

「全軍に伝えよ、武田・上杉の軍に総攻撃を仕掛ける！」

「分かったよ秀吉」

そう半兵衛は、そう秀吉に言々と半兵衛は、陣の外に出て一息ついて大声で言った。

「豊臣・徳川・毛利・長曾我部の軍に伝える、全軍武田・上杉の軍に総攻撃をせよ！！！」

「おおおおお！！！」

半兵衛が全軍に総攻撃の命令を下すと豊臣・徳川・毛利・長曾我部の兵士たちが一斉に戦場に響く声でさけんだ。

「とうとう、来ましたか」

そう言ったのは、上杉軍本陣にいた謙信だった。

「謙信様、どうなさいますか？」

上杉家の家臣が謙信に聞いた。

「……………武田の軍はどうなっていますか？」

「今のところ、長曾我部・徳川・豊臣の軍勢と戦っている模様です」

「そうですか、分かりました」

そう謙信が言くと、謙信は自分の愛刀を持って陣の外に出て愛馬にまたがり手綱を持って刀を鞘から抜いて刀を豊臣軍本陣を指した。

「全軍、突撃せよ！狙いはただ一つ、豊臣秀吉の首を取ることだけを考えなさい、その他の敵は構わずにただ秀吉の首を取ることだけを考えなさい、全軍突撃せよ！！は！」

そう謙信が全軍指示すると、謙信は馬を走らせ敵を斬りながら豊臣本陣に向けて馬をひたすら走らせた。

その様子を本陣で見ていた、信玄は自分が持っていた軍配を投げて「ん？謙信、一体何をやっている！？」
と言った。そしてそこに佐助が現れた。

「お館様、上杉軍が総攻撃を始めました」

「何？この状況でか」

「はい、上杉軍は、討ち死に覚悟で秀吉の首を取りに行ったそうです」

「謙信、正気か」

「お館様、どうなさいますか？」

「……………佐助、全軍に伝えよ」

そう信玄が言くと、信玄は自分の愛刀を持って刀を鞘から抜きそして「全軍、上杉軍を援護しつつ上杉・武田両軍の退却口を確保せよ！！」

「心得申した、お館様」

そう言い残し佐助は、その場を去り全軍に信玄の指示を伝えたのであった。

上杉謙信率いる上杉軍は、討ち死に覚悟で豊臣軍本陣に攻めかか

った。

「突撃せよ！大将首をとるのじゃ！！」

と上杉家の家臣が最戦線に出て、指揮を取っていた。次々に豊臣軍の兵士に斬りかかった上杉軍だが、豊臣方の戦力は圧倒的だった。「放つてえー！！！」

戦場に響く鉄砲の銃声音とその鉄砲の弾に当たって倒れる上杉軍の兵士の声が戦場に響いた。

「恐れるな！逃げるな！秀吉の首さえ取れば俺たちの勝ちだ！」

と叫びながら、豊臣軍の鉄砲隊に突っ込む上杉軍の兵士たちだが、鉄砲の弾に当たり地に伏せた。

「謙信様、もう限界です」

「まだです、秀吉の首を取るまでは退けません」

と謙信が家臣に言った時、伝令の兵士が背中から血を流して謙信のところに来た。

「申し上げます、北条高広様、敵方の鉄砲にあたり討ち死にしました！」

「何、それは誠か！！」

と上杉家の家臣が言った時、別の伝令の兵士が謙信のところに来た。

「申し上げます、直江実綱様が撤退しました」

「直江が撤退したと・・・・・・」

謙信が、落胆とした声で言った。

「謙信様、ここは撤退を！このまま敵に突撃しても無意味ですぞ」
「・・・・・・」

謙信は、黙り込んだ。自分が豊臣軍本陣に突撃せよという命令をしたことで、多くの兵士や家臣が討ち死にしてしまったことを悔やんでいたのであった。

「謙信様、なにとぞ！」

「全軍に伝えなさい、全軍生きて越後に撤退せよ！」

「は！伝令、撤退のホラ貝を鳴らせ！！」

「心得ました」

と伝令の兵士が言つと、伝令の兵士は腰にぶら下げていたホラ貝を手に持って思いつきり、息を吸いホラ貝を吹いた。その音色は、鉄砲の銃声音よりもでかつた。

「退けえ、全軍引きあげろ！！」

最戦線で指揮を取っていた、上杉家の家臣が撤退の命令をした。

「お館様、上杉軍が撤退を始めました」

と上杉軍の動きを見ていた、佐助が信玄に伝えた。

「うむ、佐助！わしらも撤退するぞ」

「了解しました、お館様」

と佐助は信玄の命令を武田軍の全軍に伝え、武田・上杉の軍は川中島より撤退したのであつた。

「秀吉、僕たちの勝ちだよ」

半兵衛が川中島より撤退する武田・上杉の軍を見ながら、秀吉に言つた。

「これで、いよいよ東国征伐が始まるね」

「我らの天下統一も近いの、半兵衛」

「うん、天下を取った後はもう二度と戦は起こらないだろうね」

と半兵衛は、笑みを浮かべた。

武田・上杉の軍勢は、川中島より撤退したことにより、この戦いは豊臣方の勝利で幕を閉じたのであつた。

川中島の戦いは豊臣方の勝利に終わり、武田・上杉軍は敗走したのであつた。そして、合戦が終わって数時間後秀吉は輝元・元親・家康を豊臣本陣に召集したのであつた。輝元が豊臣本陣の周りには、豊臣の兵士が目凝らして見張っていた。そして、そんな中をすたすたと歩いて行き、軍議が始まる場所に行った。軍議が始まる場所に行くと、そこには家康・元親・秀吉がもう座っていた。

「あ、やつと来たか輝元君」

と半兵衛が言つた。

「遅れすまぬ」

と言いながら輝元は椅子に座つた。

「これより、東国征伐の計画を皆に言う。よく、聞くように半兵衛。説明を」

「分かったよ秀吉。それじゃ、今から東国征伐の計画を説明するね」
そういうと半兵衛は、椅子から立ち上がり机の上に日本地図を広げたのあった。地図には、これからの、進軍先を示す線があちこちに東国に引かれていたのであった。

「まず武田方面は、徳川軍が征伐し上杉は長曾我部軍に討伐してほしい」

そう半兵衛は、甲斐と越後を指して言った。

「おうよ、この西海の鬼任せておけ!!」

「任せてください」

と家康と元親は言った。

「うん、次に北条だがここについてはもう話がついている。北条家は小田原城を開け渡すとともに僕たちに降伏することになっている」
半兵衛は、地図の関東一帯を指し棒で指しながら言った。

「それ残るは、奥州一帯を治める政宗君だが。ここは僕たち豊臣軍と毛利軍で征伐する。いいね、輝元君？」

奥州を指して、輝元に聞いた。

「分かった」

と輝元は頷きながら言った。

「家康君。もし君が早期に武田を滅ぼしたのなら北条軍と合流して僕たち伊達征伐の軍に合流してほしい」

「分かった」

家康は、腕を組んでいった。

「以上が、東国征伐の計画だ。この征伐が成功すれば日の本は一気に僕たちの手中に入る僕たち豊臣の天下統一だ」

半兵衛は、手を握って言った。

「皆のもの、明日より東国征伐を開始する。それまで、出陣の準備をするように」

そう言い残し秀吉は、陣の奥へと消えて行った。

軍議が終わり、輝元は毛利軍の本陣に戻り家臣たちに東国征伐の内容を伝えたのであった。

「以上が、東国征伐の内容だ。明日から我々は豊臣軍と随行し奥州に向う」

「奥州ということは、伊達をやるのか？」

銀時が、頭をかきながら言った。

「その通りだ。我々は豊臣軍と協力し伊達を征伐する。天下平定のために皆のもの、明日から頼むぞ！」

「っは！！」

毛利家臣一同は、輝元の号令に返事したのであった。

豊臣軍による東国征伐が開始されたころ、奥州の伊達家では軍議が開かれていた。

「さてと、どうしたものかねえ」

政宗が、頭を抱え小声でつぶやいた。

「噂じゃ、関東の北条が豊臣と手を組んだとか」と一人の家臣が言った。

「政宗様、ここは兵力を整えるのが得策かと」

小十郎が言った。今の伊達軍は、関ヶ原の戦いの大敗により兵力を多く失っていたのであった。

「……そうだな今、大坂の山猿とやってもやられるだけだしな。小十郎、内政の方はお前に任せる」

「分かりました」

「んじゃ、今日はこれで解散だ」

と政宗は言って、その場から出ていこうとした時鎧を着た足軽がその場に大慌てで入ってきた。

「筆頭！つた、大変です。豊臣の連中が、進撃を開始しました！」

「なに、それは本当か！」

と政宗は、驚いた表情をして言った。

「はい、現在、徳川軍は武田軍を長曾我部軍は上杉方面に進軍し、豊臣・毛利の両軍は関東を通過してこの奥州に向けて南から進軍し

ております」

「いよいよ始まりましたね、政宗様。これはもう……」

「……出陣だ」

「は？」

「出陣だ！目指すは、関東と奥州の境の宇都宮だ。絶対に奥州に山猿を入れるな！」

豊臣・毛利の両軍が奥州に向けて進軍していることを知り、政宗は奥州の地を荒らされるのを阻止するために伊達軍は、関東と奥州の境である宇都宮で迎え撃つことにしたんであった。

「お待ちください政宗様！今ここで、出陣しても我らには勝ち目などありませんぞ！」

小十郎が、大声で言った。

「そんなこと百の承知だ。でも、ここで出なきゃ俺が今まで守ってきたのもがあの山猿たちの連中に壊されてしまふ、だから俺は民を守るために出るんだ」

そう言った後、政宗は家臣たちがいる方を向いた。

「お前ら、今ここで決めて欲しい。俺について来て豊臣と戦つかそれともお前たちの家族を守るために伊達軍を離れるか決めてくれ。出陣は、明日の朝だそれまでに決めてくれ」

そう言い残し、家臣たちが戸惑っている中政宗はその場間を後にした。

翌日、政宗は鎧兜をつけ6本の刀を腰につけ城の追手門に行くとそこには、鎧をつけた家臣たちがざつと一万くらいいた。

「筆頭、俺たち全員筆頭についていきますぜ」

「俺たちは、あんたと一緒にいると決めていますぜ。筆頭」と次々に家臣たちが、言っていた。

「お前ら……」

「政宗様、なにぼつと立っているんですか」

後ろから聞きなれた声だったので、政宗は後ろを振り向いた。そこには、鎧を着た小十郎がいた。

「小十郎」

「私は、あなたの背中を守ると心の中で決めています」

「そうか、そうだったな。小十郎、俺の背中お前に預けるぞ」

「は、おませください」

「上等、お前ら、出陣だ！」

「おおー！」

伊達軍は、宇都宮に向けて出陣したのであった。

伊達軍が奥州を出発し、豊臣・毛利の連合軍は奥州へ進軍していた。そして、豊臣・毛利連合軍は伊達政宗率いる伊達軍が布陣している宇都宮で睨みあいの状態が続いていた。そんな中、豊臣・毛利連合軍は軍議をしていた。

「これより、軍議を始める。今から作戦を説明するからよく聞いてほしい」

そう言いながら、半兵衛は宇都宮周辺の地図を広げて説明を شدした。

「宇都宮は、平原地帯だ。このまま、正面から戦っても僕たちが勝つのが見えているが、早期に戦を終わらしたいそこで今回は、挟み撃ちにする。僕たち豊臣軍の鉄砲隊が横から狙撃し、毛利軍は後退している伊達軍を攻撃してほしい」

「分かった」

と輝元は頷いた。

「そうしたら、伊達軍は奥州に向けて退却するはずだ。そこに、北条軍の登場だ。一気に伊達軍を殲滅し政宗君の首を取る」

と半兵衛は胸を張って言った。

「よいか」

そう言うとき秀吉は、立ち上がり

「この戦いに勝利すれば、一気に我が豊臣の天下統一ぞ。皆のものの拔かりなく戦うように」

「ははー！」

そして、雲ひとつない青空のもと戦いが始まった。豊臣軍が伊達

軍に攻めかかった。

「HA！上等だぜ、この伊達に喧嘩売るといい度胸だぜ！テメエら死ぬ気で戦え！」

政宗は、馬にまたがり攻めかかってくる豊臣軍に突撃した。

「筆頭！」

家臣たちも政宗の後に続いて、豊臣軍に突撃した。

「HA！」

次々に斬りかかって来る、豊臣軍の兵士を政宗は自慢の六爪で敵兵士を切り裂いていった。

「これが、独眼竜が……」

「強すぎ……」

と次々に血を出しながら豊臣軍の兵士は地に倒れていった。だが、政宗が、たとえ五百人斬ったとしても豊臣・毛利連合軍は、五万の軍。その差は圧倒的だった、その中で伊達軍の兵士たちは必死に戦っていた。たとえ仲間が倒れようとたとえ矢が体に刺さるうとも伊達軍の兵士たちは逃げなかった。負けるのは目に見えていたが、誰ひとり逃げなかった。それほどにも、政宗を信頼していたのだ。そして、政宗も自分が今まで守ってきたものを守り通すために、必死に敵を斬っていった。

伊達軍と豊臣軍が戦いを始めたころ、毛利軍は半兵衛の指示のもと伊達軍の横腹を突くために移動していた。

「皆もの、急ぐのだ」

と輝元が、毛利軍兵士に指示していた。

「この合戦で勝てば、戦いは終わるのか」

銀時が輝元の横に行き言った。この宇都宮での戦いで豊臣側が勝てば、ほぼ日の本は豊臣の手中に入ることになるのだ。

「ああ、伊達軍に勝てば戦いは終わる」

「そうか、ならこの戦い勝てなきゃいけないな」

そう言うとき銀時は、馬にまたがり馬を走らせて行った。

「やれやれ」

輝元が、小声でつぶやくと一人の兵士が輝元のところにやってきた。
「殿、半兵衛様から伝言です。のろしが上がり次第、攻撃を開始せよとの事でございます」

「分かった、伝えてくれ」

「はは」

そう言った後、その兵士は豊臣本陣に向った。

「さあ、皆もの急ぐのじゃ」

と言った後、輝元は自分の愛馬にまたがり移動を開始したのであった。

毛利軍が移動しているころ、豊臣軍と伊達軍は豊臣軍側の圧倒的な軍事力そして兵力により伊達軍は敗北一色であった。

「押せええ、伊達軍を押しつぶせ！」

と豊臣軍の家臣が、兵士の士気を上げるために軍配を振っていた。

「こんなところで、山猿の連中に負けてたまるか！」

と伊達軍は自分たちで士気を挙げ、豊臣軍に突撃したが次々に圧倒的な兵の数にやられていったのであった。

「無念……」

「ちくしょつ、こんなところで死ぬわけにはいか……」

と伊達軍の兵士は次々に倒れていったのであった。

「……これが、合戦なのか」

伊達軍の家臣で、政宗の軍師でもある小十郎が豊臣軍の兵士を斬り倒して周りの状況を見渡して言った。周りには、自分たちの仲間が血を流して倒れてて息を引き取っていた。そして、また次に豊臣軍の兵士たちにやられている兵士たちがいた。

「もう、これは合戦じゃない。だたの虐殺ではないか……」

と膝を地面に着き、落胆としてしていると後ろから

「あれは、片倉小十郎じゃないか」

「討ちとって、名を挙げろ！」

そう言う豊臣軍の兵士は背後から、小十郎に斬りかかってきた。

「……雑魚は、引っ込んでな」

小十郎は、目にも追いつけない早さで斬りかかってきた豊臣軍の兵士を斬った。

「政宗様、どうかご無事でいてください」

と言うと小十郎は、豊臣軍に突撃したのであった。

「HA」

政宗は、豊臣軍の奥深くまで突撃しており次々に斬りかかって来る豊臣軍の兵士を馬にまたがったまま自慢の六爪で切り裂いて行った。「独眼竜だ、ここで討ちとれば戦いは終わるぞ！」

「おお！！」

と豊臣軍の家臣の命令で兵士たちは政宗に向けて弓矢を放ったり、直接槍で攻撃した。

「雑魚には、用はないって言うているだろうが！」

自分に攻撃をしてくる、敵を次々になぎ倒しながら政宗は豊臣本陣に向けて馬を走らせていた。

政宗が、豊臣軍本陣に向けて馬を走らせていたところ豊臣軍本陣では、総攻撃を知らせるのろし上げようとしていた。

「半兵衛、総攻撃を開始せよ」

秀吉が、半兵衛に総攻撃の命令をした。

「分かったよ秀吉、全軍に告ぐ総攻撃を開始せよ！毛利軍に知らせるのろしを上げよ！！」

と半兵衛は、兵士に命じて毛利軍に総攻撃を開始するという意味がある真黒いのろしを上げた。

豊臣軍本陣からのろしが上がった頃、毛利軍は伊達軍の背後にいた。

「輝元様、本陣よりのろしが上がりました」

と伝令の兵士が輝元に伝えてきた。

「上がった、みなもの突撃するのだ！！」

輝元は、毛利軍全軍に突撃の命令を下した。命令が下ると毛利軍は伊達軍の背後から伊達軍に突撃した。

「ど、どうして毛利が後ろに」

伊達軍の兵士は、背後から突撃してきた毛利軍に驚いていた。

「豊臣め、挟み撃ちにする気か」

と、小十郎が言う。

「お前ら、うろたえるな。奥州の民のために戦うぞ」

と小十郎が、伊達軍の兵士の士気を上げようとして言った。

「分かっていますぜ、小十郎様！！」

兵士たちは、豊臣・毛利軍に突撃した。

毛利軍が背後から突撃したところ、政宗は豊臣軍本陣の手前で止まっていた。政宗の目の前には銀時がいた。

「よ、天然パーマ。久しぶりだな、元気になっていたか？」

「ああ、元気になっていたぜ。独眼竜」

銀時と政宗は、互いを見ながら言う。

「どうだ、独眼竜。あの時の決着ここでつけないか？」

と銀時が、刀を鞘から抜き戦闘態勢に入る。

「……ふん、いいだろう。あの時の決着ここでつけようぜ」

政宗はそう言うと、六爪を鞘から出し政宗も戦闘態勢に入った。そして、お互い相手に向って走り出し二人は斬りかかった。互いの刀が、激しいつばぜり合いが何度も繰り返された。

「独眼竜、あんたこのまま秀吉と戦うのか？」

「そうだ、なんか文句あるのか」

「やめとけ」

「どう言う事だ？」

政宗が、銀時を睨みつけて言う。

「このまま、秀吉とやり合っても意味がない。もうこの戦いは、勝敗を決した。だから独眼竜、降伏してくれ、これ以上血を流すのはごめんなんだ」

「ふん、俺は奥州を出た時に俺は命をかけて民を守るって決めたんだ。だから、俺は降伏なんかしないぜYOU SEE？」

「お前が死んだら、一番誰が悲しむと思っているんだ！奥州全体の民が悲しむぞ。それでもいいのか」

そう銀時は言うど、お互い距離をとるために離れた。そして、さらに銀時は

「民を守るなら、こんなとこで戦っていないで奥州の民のために生きろ！」

「……」

政宗は戦闘態勢を解き、黙り込んだ。

「政宗様」

政宗の背後から、小十郎の声がし政宗は振り向いた。

「小十郎」

「政宗様、降伏してください。もう、これ以上無駄な血を流さないためにも」

小十郎は、政宗に豊臣に降伏するように進言した。合戦上では、もう伊達軍はほとんど残っていないかった。

「……小十郎、白旗あるか？」

「……」

小十郎がそう言うど、政宗は六爪を鞘に戻し

「分かった、全軍に告ぐ伊達軍は豊臣軍に降伏する」

「承知いたしました」

政宗は、豊臣に降伏すると宣言したのであった。

伊達政宗は、豊臣・毛利連合軍に降伏すると宣言した。伊達政宗は、豊臣秀吉と会見するため豊臣軍本陣にやってきた。

「秀吉様、伊達政宗が参られました」

一人の足輕が秀吉に言う。

「通せ」

「は！」

そう言うど足輕が下がると、足輕と交代に伊達政宗が入ってきた。

「……貴様が、奥州の竜か」

「そうだ、俺が奥州筆頭伊達政宗だ」

「ふん、無様だな。竜が雷に撃たれて地に落ちたか」

「……」

政宗は無言だった。

「もし、貴様が我ら豊臣に降伏しなければその命なかったであろう」
そう言う秀吉は、その場から出ていき陣の奥へと行った。

「さてと、政宗君」

半兵衛が政宗に近づいて言う。

「君には、これから豊臣軍のために働いてもらうよ」

「……」

「これから伊達軍は、越後に行つて長曾我部軍と合流して上杉軍を討伐してもらう。敗北など許されないからね」

「……」

政宗は、半兵衛の命令に対して返事をしない。

「政宗君、君たちは僕たち豊臣に負けたんだよ、それを認めないと何も始まらない。それくらい分かっているだろう」

そう言い残し、半兵衛はその場から去りその場には政宗ただ一人しかいなかった。

政宗と会った後秀吉は、輝元と話していた。

「この度の働き大義であった。毛利よ」

「これくらい、たいした働きではない。しかし、あの独眼竜が降伏するとは思わなかった」

「あの竜もそこまで落ちたということよ。それより毛利よ、今から甲斐に行つてほしい」

輝元率いる毛利軍は、甲斐に出陣するよう命じられる。

「甲斐という事は、徳川軍の援軍か？」

「そうだ、ここで一気に日の本を統一する」

「分かった、ではこれより甲斐に出陣する。ところで豊臣はどこに行かれる？」

「我々は今から奥州に行き、奥州を統一する」

「そうか、分かった」

そう言う輝元はその場から去り、毛利軍本陣に戻った。

宇都宮の戦いの翌日、豊臣軍は奥州へ伊達軍は越後へ、毛利軍は

甲斐へと向かった。伊達軍が豊臣軍に降伏し東国の巨大勢力は、甲斐の武田信玄・越後の上杉謙信だけとなった。今、戦国の世は終わりを告げようとしていた。

宇都宮の戦いで伊達軍が敗北し豊臣軍に降伏したという知らせは全国に回った。そしてその知らせは、甲斐の国にも伝わった。

甲斐の国の武田軍は、豊臣軍に命じられた徳川軍の攻撃により衰退していた。そんな状況で、宇都宮のことが知らされた。

「それは、誠か」

「はい」

武田軍本陣で、猿飛と信玄が話していた。

「あの、独眼竜が……」

「これで残るは、我ら武田と越後の軍神のみとなりました」

「今、豊臣秀吉はどこにいる？」

信玄は、猿飛に秀吉の居場所を聞く。

「秀吉は今、奥州を平定しに奥州に向いました」

「そうか、それで佐助。独眼竜は今、どこに？」

今度は、政宗の居場所を聞く。

「独眼竜は、秀吉の命で上杉を討伐に」

「豊臣め、いよいよ天下統一に向けて総仕上げをしようとしておるな」

そう信玄が言うと、佐助は何も言うわずにうなずいた。

「お館様！政宗殿が、降伏したというのは本当にございましょうか
！！」

扉を思いっきり開けて、幸村が入って来る。

「本当だ、幸村よ」

幸村の問いに信玄が答えた。

「あの政宗殿が……」

「それほど、豊臣が強いということじゃ。佐助！」

「秀吉に、この書状を送ってくれ」

そう言って信玄は、佐助に書状を渡した。

「……承知しました、お館様」

そう言う佐助は、姿を消した。

「お館様、先ほどの書状は？」

「武田の名を残すための、大事な書状じゃ」

「武田の、名を残すため？お館様、まさか」

「そうじゃ、もうこの日の本を治める者は決まった。決まったのなら、我らはそれに従う」

「……無念でございませう、お館様」

幸村は、床に膝をついた。

「確かに無念だ。だが、我らが降伏すればこれ以上無駄な血を流さなくても済む。幸村、家康に休戦の申し入れをしてまいれ、家康なら分かってくれるはずだ」

「承知いたしました、お館様」

と行って幸村は、その部屋から出ていった。

それから数日後、徳川軍と武田軍の間で休戦の条約が結ばれ武田軍は、本拠地である躑躅ヶ崎館を徳川軍と合流した毛利軍を加えた徳川・毛利連合軍に開け渡した。

甲斐の武田軍が徳川・毛利連合軍に降伏したことは、荒れ果てた奥州を平定しに行った豊臣秀吉に伝えられた。

「申し上げます、武田軍が躑躅ヶ崎館を徳川・毛利連合軍に開け渡しました」

一人の伝令が秀吉に言う。

「分かった。徳川・毛利には、そのまま甲斐に待機せよと伝えよ」

「はは！！」

そう言う伝令は、その場から出ていった。

「これで残るは、越後の上杉だけとなったね。奥州も平定したしもうすぐ日の本は僕たち豊臣のものになる」

秀吉の後ろにいた、半兵衛が言う。

「そうだな、もうじき我らの力により天下は統一する」

「申し上げます」

秀吉と半兵衛が話していると、一人の伝令が入ってきた。

「どうしたんだい」

半兵衛が聞く。

「越後の上杉軍が、長曾我部・伊達連合軍に降伏したということでございます」

「越後の軍神が降伏したか」

そう半兵衛が言っていると伝令は、何も言わずに頷いた。

「御苦労、長曾我部・伊達には越後で待機と伝えてくれ」

「承知」

そう言つて、伝令は出て行つた。

「秀吉、僕たちの夢が叶つたよ。これで、戦国乱世は終わったよ」

「そつだな、半兵衛。大坂に引き上げるぞ」

「分かつたよ。秀吉」

豊臣軍本隊は、奥州より引き上げ大坂に戻り、甲斐の国・越後の国に滞在していた毛利軍・長曾我部軍・徳川軍・伊達軍もそれぞれ自分たちの領土に引き上げた。日の本は今、豊臣の圧倒的な軍力の手によつて統一されたのであつた。長きにわたつて争われていた戦国の世は終わりを迎え今、新しい世が生まれようとしていた。

武田・上杉・伊達が豊臣軍に降伏し豊臣秀吉が日の本を統一してから数日後、秀吉・半兵衛は全国の大名を大坂城に呼び出し評定を行つた。

「これより、日の本の大名配置をする」

そう言つと秀吉は、自分の目の前にいる伊達政宗・武田信玄・上杉謙信・長曾我元親・毛利輝元・北条氏政・徳川家康らを見渡す。

「では、僕から発表させてもらう」

と秀吉の隣にいた半兵衛が言い、秀吉の前に行き懷から大名の配置を書いた紙を取り出し言いだした。

「まず、中国の毛利君には今まで通り中国地方を統治してほしい」
輝元がいる方を向いて言う。

「はー!」

輝元は、半兵衛に一礼して言う。

「次に四国の長曾我部君だが、君には土佐と阿波を治めて欲しい」
「ちよつと待て！ 讃岐と伊予は誰が統治するんだ！」

元親が大きな声を出して言う。

「元親君、君は一度僕たち豊臣に反逆しているんだよ、領地没収くらいあたりまえじゃないか。讃岐と伊代については豊臣が統治する。いいね元親君」

「……分かった」

元親は、小声でいい承諾した。

「それでいい、次に徳川君。君には、東海道の三河・遠江・駿河・尾張・美濃・伊勢・を統治してほしい」

「心得申した」

家康が納得した顔をして言う。

「北条君、君には関東を今まで通り統治してもらう」

「任してください」

「上杉君、越後を統治してもらう」

「……」

謙信は、何も言わずに首を縦に振る。

「次に、武田君には甲斐と信濃を統治してもらう」

「……」

信玄も何も言わずに、首を縦に振るだけだった。

「最後に、奥州の政宗君だが。君には、今まで通り奥州を統治してもらう。その代わり、大幅な軍縮してもらう。いいね、政宗君」

そう言いながら半兵衛は、政宗を睨むような目をして見る。

「……OK」

といつもより、トーンが低い声で言う。

「九州や他の領土については、僕たち豊臣が統治する。以上で、発表を終わる」

そう言うとき半兵衛は、紙を折りたたみ懐に入れ最初に座っていたところに戻り再び座る。

「よいか、これからは我が豊臣のため日本の本のため皆の力を合わせ豊かな国にしようぞ!!」

と豊臣秀吉は、宣言した。

日の本は今、豊臣の圧倒的な軍事力の手によって統一されたのであった。長きにわたって争われていた戦国の世は豊臣秀吉の手によって終わりを迎え今、新しい世が築かれようとしていた。

出演

坂田 銀時

坂本 辰馬

桂 小太郎

毛利 輝元

伊達 政宗

片倉小十郎

武田 信玄

真田 幸村

猿飛 佐助

徳川 家康

上杉 謙信

北条 氏政

長曾我部 元親

豊臣 秀吉

竹中半兵衛

志村 妙

毛利家家臣

島津家家臣

伊達家家臣

徳川家家臣

武田家家臣

上杉家家臣

北条家家臣

豊臣家家臣

長曾我部家家臣

演出・シナリオ

坂田銀時

原作

銀魂

戦国BASARA

2010年6月28日

戦国乱世製作委員会

戦国乱世シーズン其ノ弐（総集編）（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の総集編でシーズン其ノ弐の最終回となります。8月から、シーズン其ノ参が始まりますのでよろしく願います。

乱世

豊臣秀吉の手によって日の本の地が統一されて数年後、豊臣秀吉の側近であつた竹中半兵衛が病に倒れこの世を去つた後、豊臣秀吉は世界進出に向けて戦火を広げていた。だが、戦火を広げる豊臣秀吉に反旗を翻した者がいた。その名は、徳川家康。彼は、東海道の諸国を統治していたが戦火を広げる秀吉に反旗を翻し豊臣秀吉と決戦を挑んだ。そして、徳川軍と豊臣軍戦いはどんよりとした空の下で始まつた。

「今こそ、絆の力で天下を治めようぞ！」

徳川軍総大将徳川家康が、全軍の士気を上げるため言う。

「我が豊臣に反逆するとは万死にあたりする。者共、反逆軍を殲滅するのだ！！」

豊臣軍総大将豊臣秀吉が、本陣で軍配を振つて言う。

そして、豊臣軍の鉄砲隊が徳川軍に発砲したことにより両軍の戦いが始まつた。日の本を統一した豊臣軍、その配下の徳川軍。軍事力の差では徳川軍が圧倒的に不利だった。だが、徳川軍の兵士は死に物狂いに豊臣軍に突撃し豊臣軍の兵士を斬り裂いて行つた。しかし、徳川軍が死に物狂いに戦おうと豊臣軍の優勢は変わらない。だが、この状況を一転させる軍が現れた。

「全軍、豊臣軍に突撃だ！！」

一人の青年がそう言うのと、その後に続くようにその軍の兵士たちがなだれ込む。

「あの軍勢は？」

そう家康が家臣に聞くと家臣は

「おそらくあの旗から推測して、本能寺で織田信長を討つた高杉晋助率いる鬼兵隊かと思われます」

「鬼兵隊だと！ 鬼兵隊は、確か豊臣軍に殲滅されたはずじゃなかったのか！」

豊臣・徳川の合戦に第三者として参戦したのは本能寺で織田信長を討った高杉晋助が率いる鬼兵隊だった。鬼兵隊は織田信長を討った後、織田領を統治していたが豊臣秀吉率いる豊臣軍により殲滅され高杉晋助は死んだとされていた。だが、その殲滅され死んだと思われていた高杉晋助は生きており鬼兵隊を率いて参戦した。

「お前ら、あの時の恨みここで払おうぞ!!」

そう言いながら、高杉率いる鬼兵隊は豊臣軍本陣に向けて進軍していく。その後が続くように徳川軍も進軍していく。形勢は、豊臣から徳川軍・鬼兵隊の方に傾きついには、豊臣軍の兵士が鬼下手に徳川の勢いに押され逃げ出していく者たちが出だした。そしてついに、鬼兵隊と徳川軍は豊臣軍本陣に総攻撃を仕掛けた。

「あの若僧め、我の天下を邪魔するか!!」

「秀吉様、早く逃げてください」

一人の家臣が秀吉に、逃げるように進言する。

「……我が逃げるなどありえぬ」

そう秀吉が言くと、秀吉の前に一人の青年が立っていた。

「よう、大坂の山猿。元気にしてたか？」

秀吉の前に現れたのは、高杉晋助だった。

「貴様、なぜ生きている。貴様は、死んだはず」

「おいおい、影武者くらい用意していたって予想できないのか？」

山猿

「貴様!!」

秀吉がそう言くと、高杉は腰に差していた鞘から刀を抜き

「お前の首、この高杉晋助が頂く」

「貴様程度の雑魚に、私の首など取れぬぞ」

そう秀吉が言った瞬間二人の刀が風を斬るような音を戦場に何度も何度も響かせながら二人は斬り合ったお互いほぼ互角の戦いであったが高杉が秀吉が油断を許した瞬間風を切るような音たてて秀吉を斬った。

「……貴様、我が死んだあとこの日の本をどうするつもりだ」

秀吉が息を切らしながら聞く。

「あんたに教えるつもりはない。だた、俺はあんたが作ったこの国をぶっ壊すだたそれだけだ」

「ぶっ壊すか……」

それが天下統一を果たした霸王の最後の言葉になった。

「高杉、お前生きてたのか」

高杉の背後からそう聞こえたから後ろを向くと、そこには徳川家康がいた。

「家康か」

「高杉、お前がこれから秀吉の領地を統治するのか？」

そう、家康が聞くと高杉は首を横に振り

「いや、俺は治めない。俺は昔の恨みを晴らしに来ただけだ」

そう家康に言い残し、高杉はその場を去っていった。

今、豊臣秀吉の死により再び日の本の地は荒れようとしていた。

乱世（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の53話からシーズン其ノ参を始めさせていただきます。次回の投稿は、今週の日曜日になります。

知らせ

安芸の広島城、中国地方を統治する毛利輝元は家臣の坂田銀時とお茶を飲んでいた。

「ようやく、日の本にも平和な世が訪れたの銀時」

「そうだな、太平な世が作られたんだな」

そう二人が言いながら、お茶を飲んでいると

「お茶を楽しんでいるところ、申し訳ない」

と二人の後ろから聞こえたので二人は、後ろを振り向くとそこには「ズラ！」

「ズラじゃない、桂だ」

そこには、毛利家より離反した桂小太郎だった。

「お前、なんでここにいるんだ？」

銀時が桂に聞く。

「銀時、再び戦国の世が訪れるぞ」

「どう言う事だ？」

「豊臣秀吉が死んだ」

そう桂が言った瞬間、二人は驚いた表情をして

「死んだ！ あの豊臣秀吉が」

「嘘を申すな、そのようなことが……」
と言った。

「嘘ではない、東海道を統治する徳川家康と鬼兵隊の高杉晋助が討った」

「あの、徳川家康が……」

輝元は、言葉を失った。徳川家康は、豊臣秀吉を信頼して謀反など起こさないと思っていたからである。

「高杉の奴、生きていたのか」

「ああ、生きていたらしい」

「それでズラ、高杉と徳川は？」

「高杉は秀吉を討った後雲隠れして、徳川は一端自国に帰還して周辺諸国へ進軍する準備を整えているらしい」

「大坂はどうなっている？」

輝元が、桂に聞く。

「大坂では、石田三成という男が打倒徳川に向けて軍備を整えているらしい」

「石田殿が」

「それじゃ俺は、これで失礼する」

そう言い残すと桂は、その場から去っていった。

「どうするんだ、輝元？ 石田か徳川かそれとも俺たちが独自に動くか」

銀時が輝元に聞くと

「恐らく、東の大名が徳川につくことは確実であろう。我らだけでは勝てぬ」

「それじゃ」

「我々は、石田につき打倒徳川に向けて動く」

「……そうか、分かった」

そう言つと銀時は、お茶が入った湯呑を持って再びお茶を飲んだ。

知らせ（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

伊達軍

毛利軍が石田につくと決めた頃、奥州の伊達政宗にも豊臣秀吉が死んだという情報が届いた。

「申し上げます、豊臣秀吉が徳川家康・高杉晋助らの手によって討ち取られました」

家臣が、豊臣秀吉の死の知らせを言う。

「……そうか、あの山猿が死んだか。んで、他の国はどう動いている？」

政宗が、家臣に聞く。

「は！ 現在のところ、毛利輝元が石田三成と手を結び打倒徳川に向けて軍備を整えてござりまする」

「石田と毛利が手を組んだか。その他は？」

「それ以外のところは、今だ目立った動きを見せておりません」

「Thank you、もう下つていいぞ」

「は！」

そう言つと家臣は、その部屋から出て行つた。

「小十郎」

「は！」

と、政宗の背後にいた小十郎が言う。

「あの、山猿が死んだとさ」

「左様にござりますな」

「いよいよ、俺たちに風が吹いてきたようだな」

「政宗様、いよいよ天下を目指しますか」

「ああ、この奥州筆頭伊達政宗が天下を治める」

そう言いながら政宗は立ち上がり

「出陣だ！」

と、陣触れを出した。そして、城下町にホラ貝の音色が響いた。

「政宗様、どこに出陣なされるつもりですか？」

「最近、お隣さんの狐がうるさくてな。奥州を統一するついでに、いつを叩く」

政宗が言う『狐』とは、奥州の隣にある羽州を治める最上義光のことだった。最上は、豊臣秀吉の東国征伐にすぐに降り豊臣の配下としていた、そして奥州の伊達政宗が豊臣に敗北すると隙を狙うように奥州に攻め入り奥州の一部を占領していた。

「狐を相手にしますか？」

「yes」

「……分かりました」

と、言う間小十郎は出陣を準備をするために部屋から出て行った。そして翌日、伊達政宗率いる伊達軍は、隣国の羽州へと進軍したのであった。

伊達軍（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

西軍

伊達軍が羽州の最上義光を討伐に出陣して頃、中国地方を統治している毛利輝元は打倒徳川に向けて勢力を広げている石田三成と同盟を結ぶため、大坂城にやってきた。大坂城に入った輝元は石田三成の重臣大谷吉継と会っていた。

「三成殿は、何処におられる？ 大谷殿」

「三成は今、大坂におらぬ。雑賀衆と手を結ぶために紀伊の国に出かけておる」

「ほう、雑賀衆と」

「ああ、それより輝元殿。先ほど申されたことは、信じてもよいのじゃな？」

そう大谷が聞くと、輝元は首を縦に振り

「我が毛利は、打倒徳川のために石田と手を結ぶ」と、言った。

「分かった。では、毛利よ。早速、頼みたいことがある」

「何を頼みたいのだ、大谷殿？」

「実はな、金吾なんだが。あやつ、徳川と内通しているという情報が入った」

「金吾とは、小早川秀秋のことか」

小早川秀秋とは、備前の国を統治する大名で豊臣秀吉の一門になっていた。

「そうじゃ、どんな手を使ってもよいから、あやつが徳川につかぬようにしてほしい」

「どんな手でも使ってもよいのか」

「構わぬ」

「分かったでは、これより備前の国を攻める」

「金吾を殺すではないぞ」

「分かっておる。ただ脅すだけよ」

そう大谷に言い残すと輝元は、その場から去った。

大谷との会談後、輝元は一旦自国に戻り備前攻めの準備に取り掛かった。そして、輝元は軍備が整うと四方八方から備前の国に攻めかかった。

西軍（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

襲撃

毛利軍が石田軍と打倒徳川に向け手を組み、石田と毛利の間にある小早川秀秋の領土に毛利軍が攻め込もうとした頃、最上義光が治める羽州に奥州の伊達政宗率いる伊達軍が攻めた。伊達軍は、最上軍が所有している城や砦を次々に落とし最上義光の居城山形城に迫っていた。これに対し最上義光は、これ以上伊達軍の進撃を阻止するために伊達政宗の軍勢に奇襲を掛けたのであった。

それは、突然だった。伊達軍が山形城攻めのために陣を敷き軍議をしていた時、政宗が山形城の城下町の見取りが描かれた地図を眺めていた時だった。

「うるせえな、何の騒ぎだ。小十郎？」

と、政宗が陣幕の外から兵士たちの騒ぎ声たちが聞こえたため小十郎に聞く。

「分かりませぬ。少し、見てきます」

そう言って陣幕の向こう側を見ようとした時、弓矢の矢が背中に突き刺さった自軍の兵士が入ってきた。

「筆頭！ 大変です！ 最上の連中が奇襲を掛けてきました……」
息を切らしながら言い、地面に倒れた。

「あの野郎、政宗様！」

小十郎が、政宗がいる方を向く。

「あの狐、やってくれたぜ。行くぜ、小十郎！！」

政宗が6爪を鞘から抜き陣幕の外に出た。外では、突然の奇襲を受けたため自軍の兵士は鎧をろくに着ずに最上軍の兵士と戦っていた。

「政宗様ここは一端、態勢を整えたほうがよいかと」

「OK。さすがに、これは一端引き上げるか」

「では、早速」

「ああ、全軍に撤退しろと伝える」

そう言つと政宗は、自分の愛馬にまたがり馬を走らせた。

「承知しました」

と、小十郎も自分の愛馬にまたがり政宗の後に続くように馬を走らせた。

「撤収だ！」

伊達軍の兵士が撤退の知らせを知らせる音色をホラ貝を鳴らしながら言う。

「邪魔だ、道開けろう！！」

馬を走らせながら政宗は、馬の前にいる最上軍の兵士を刀で薙ぎ倒しながら走りその場から退却したのであった。

襲撃（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

和平

伊達軍が最上軍の奇襲を受け奥州に撤退したところ、西の中国地方では毛利輝元率いる毛利軍が毛利領と石田領に挟まれた小早川秀秋が統治する備前の国に侵攻していた。毛利軍は、小早川秀秋の居城岡山城に向けて四方八方から侵攻していたが、毛利軍の圧倒的な軍事力に恐れた小早川秀秋は毛利軍と和平を結ぶために輝元がいる毛利軍の本陣にやってきた。

「しかし、こんなに早く和平を結びに来るとはな」

「けど、今回の小早川軍は全然手応えがなかったぜ。雑魚ばっかだった」

「まあ、無理もない。四方八方から大軍がなんの前触れもなく一斉に攻めてききたんだ。ろくに対策もできずにただ時間が経つにしのれて負けていくだけだ」

「あの小早川秀秋ってやろうは、そんなに重要な人物なのか輝元？ 今回の戦を見る限り、足を引く張るだけと思うだが」

「重要だ。金吾は、あんな馬鹿でも大軍を奥州の伊達に匹敵するくらいの軍を率いている。打倒徳川には一人でも多くの力が必要だ」

「へえ、あのやろうがああ独眼竜に匹敵する力を持つてるのか」

「そうだ。だからあやつは絶対に必要なんだ」

そう銀時と輝元が話していると、一人の足軽が陣幕を越えて入ってきて

「申し上げます、小早川秀秋様が到着されました」

と、言う。

「そうか、ここに通せ」

「それじゃ、俺はこれで」

「どこに行くんだ、銀時？」

「ちよつと気分転換に、馬でそこら辺を走ってくる」

「そうか」

輝元がそう言うとき、銀時は、陣幕を越えて自分の愛馬がある場所へ行く。それと同時に備前の国の国主小早川秀秋がおよしなから入ってくる。

「よう参られた、金吾」

「て、毛利様」

「金吾、貴様は一体我らが徳川かどちららにつく気か？」

「そ、それは……」

「どちらにつく気だ。まさか、徳川につく気か」

「……」

「貴様が徳川につくのは構わないが、もし徳川につくというなら毛利・石田の両軍が貴様を滅ぼすであろう」

「……分かりました」

「聞こえぬぞ、金吾」

「分かりました！！ 毛利様に味方いたします」

「それでよい。全軍に言う、直ちに引き上げる！ これ以上の戦いは無益である」

小早川軍が石田三成側につくことになり毛利軍は、備前の国より撤退したのであった。

和平（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

遠征

毛利輝元率いる毛利軍は、小早川秀秋を西軍に加えることに成功し備前の国より引き上げた。毛利軍本隊は安芸の国に引き上げたが、毛利輝元は単独で石田三成の居城である大坂城に向かい大谷吉継と会っていた。

「こたびは、よくやってくれたぞ毛利。これで打倒徳川に向けて一歩前進したわ」

「あれくらい容易いものよ。金吾は脅せばすぐに我につくと分かっていたからな」

「金吾は、臆病だからのう」

と、吉継が笑いながら言う。

「それよりも、毛利よ。石田殿は何処におられる？」

「三成なら今は、四国の長曾我部のところにいる」

「ほう。四国に行っておられるのか」

「ああ、長曾我部と同盟を結ぶために行っておる」

「そうか。それで今、我々の戦力はいかほどになっている？」

「今のところは、中国の毛利と九州の島津と大友、そして越後の上杉だ」

「ずいぶんと集まったな。こんな短期間で」

「これが我の力と言うのよ」

吉継がにやりと薄気味悪い笑いをする。

「……それで、次はどこに行けばよい」

「そうだな。次は東へ向かってくれ」

「東に？」

そう輝元が聞くと吉継は、近くにあった本棚から巻物を取ってきて床に広げた。そこには日本の本が描かれていた。

「そうだ。東の諸国の武将らの交渉を頼む」

「交渉だと？」

「西国はもう我らの味方だ。だが、東は徳川につくものが多い。しかし、まだどちらにつくか決められないところもある」

「つまり、まだ決めておらぬものを西軍に取り入れればよいのだな」
「そうのことだ」

「分かったでは、手始めに甲斐の国の武田に行つて参る」

「そうか。では、行つて参れ」

そう吉継が言つと輝元は、その場を後にして大坂城を出て安芸の国に帰国した。そして時が流れ数週間後、毛利輝元は軍備を整えて東国遠征に出陣したのであつた。

毛利軍が東国遠征に出陣したころ、奥州の伊達政宗は最上軍の奇襲を受けて互いな戦力を失い一旦奥州に引き上げ軍備を整えた後、羽州へ再度攻め最上軍に勝利したのであつた。

「このたびの羽州攻めの勝利、おめでとうございます。政宗様」

「小十郎。そんな堅苦しい話は後だ。毛利が東国攻めに出陣したらしいな」

「その様でございます。おそらくは、甲斐の国へ向かつたのと思ひます」

「甲斐か、あこはまだ徳川か石田につくかはまだ決めていないからな」

「政宗様、どうなさいますか？」

「……出陣だ。甲斐の援軍に出陣する。甲斐には昔、いろいろと世話になかつたからな」

「分かりました」

政宗は、甲斐の武田の援軍として出陣することを決め奥州を出たのであつた。

遠征（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

援軍

毛利軍が東国遠征に出陣したところ、東国の大名が次々に徳川家康率いる東軍に合流していたが甲斐の武田は未だ東軍か西軍につくか迷っていた。そんな時に、中国の毛利が甲斐の国に向けて進軍しているという知らせは武田家当主の信玄の耳にも届いていた。

「いよいよ、来たか」

「は。現在、毛利輝元率いる毛利軍が甲斐に向けて進軍しているとのこと」

と、佐助が信玄に毛利軍の動きを知らせる。

「そうか。他の諸国はどうなっておる？」

「関東の北条、加賀の前田、紀州の雑賀衆、羽州の最上など東の諸将は徳川についております」

「うむ。西の石田にはだれがついておる？」

「石田には中国の毛利、四国の長曾我部、九州の島津と大友、そして越後の上杉が」

「……謙信がのう。未だに信じられん」

信玄が、暗い表情を見せて言う。

「おそらく、最初の方は中立をうたっていたが石田に脅されたんだと思います」

「そうか。佐助、奥州の独眼竜はどうしておる」

「現在は、単独で動いている模様です」

そう信玄に伊達の動きを報告すると門兵がその場に入ってきた。

「御館様。奥州の伊達から使者がきております」

「使者か、ここに通せ」

「っは！」

そう言つと門兵は使者を呼びに部屋から出て行った。

「佐助。毛利の動きを探ってきてくれぬか？」

「承知」

その一言だけを残し佐助は部屋から出て行きそれと入れ替わりに伊達からの使者が入ってきた。

「筆頭より、文をお預かりいたしました」

と、言うとき使者は懷から文を取り出し信玄に渡す。文を渡された信玄は文に書かれていることを読む。そして、読み終わると信玄は使者に

「政宗殿に、快諾したと伝えてくれ」

と、言った。

「っは」

そう言うとき使者は部屋から出て行った。そして、信玄は家臣を呼び。

「出陣だ。奥州の伊達軍に合流する!!」

と、甲斐に向かっている奥州の伊達軍に合流するために出陣を命じたのであった。

信玄が出陣を命じた頃、奥州の伊達軍は奥州から出陣しており甲斐に向けて馬を全速力で走らせていたのであった。

援軍（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

甲斐

武田信玄率いる武田軍が躑躅ヶ崎館を出陣し数日後、武田軍は甲斐の国と武蔵の国との国境で待機していた。

「御館様」

「どうした、幸村」

「御館様、果たして本当に政宗殿はここに来るのでしょうか？」

真つ赤な鉢巻を頭に巻いた真田幸村が信玄に聞く。

「それはまだ、分からぬ。だが、あの文は間違いなく独眼竜からのものだった。今は独眼竜を信じるしかない」

「左様でござりまするか」

「うむ」

そう信玄と幸村が話していると信玄の横に

「御館様」

毛利の動きを探っていた佐助が現れた。

「どうした佐助、毛利が動いたか？」

「現在毛利軍は、信濃まで進軍していますが今のところは目立った動きを見せていません」

「そうか。信濃まで来よったか」

「それと、毛利軍の本陣で聞いてきたんですが。越後の上杉が越後より出陣したようです」

「なに？ それは誠か？」

「はい、恐らくこの甲斐に出陣したのと思います」

「うむ。幸村！ お主は、信濃との国境へ向かい毛利軍の進軍を阻止して参れ！」

「心得ました。御館様！！」

そう言つと幸村は自分の部隊を率いて、信濃との国境へ向つ。

「佐助。わしは今より、越後との国境へ向かう。独眼竜がここに来た時には、直ちに幸村の援軍に向かうよう伝えてくれ」

「分かりました」

「頼んだぞ。佐助」

佐助に独眼竜への伝言を伝えると信玄は越後との国境へと向かった。

それから数時間後、数時間前まで武田軍がいたところに伊達軍が到着する。

「おいおい、誰もいないじゃねえか」

「おかしいですね。ここに来るように使者を出したはずですが」

「まさか、無視したのか」

政宗と小十郎が話していると

「すまないな、独眼竜の旦那と片倉の旦那」

と、木の上にいた佐助が二人の目の前に飛び降りて言う。

「今、武田は大変な状況なんですね。御館様より伝言を預かっている」

「伝言？」

政宗が佐助に聞く。

「今、甲斐の国は西から毛利軍が北からは越後の上杉が侵攻していて大変な状況下にいる。現在、真田の旦那は毛利へ御館様は上杉の侵攻を阻止するために向かっている」

「それで？」

「伊達軍は真田の旦那の援軍として毛利軍がいる信濃に向かってほしい」

「真田の援軍か」

「以上が伝言だ。それじゃ」

政宗に伝言を伝え終えると佐助は、その場を後にした。

「政宗様。ここは一刻も真田の援軍に参りましょう」

小十郎が、政宗に進言する。

「いや、ここで隊を二つに分ける。小十郎は、武田のおっさんのところへ向かえ。俺は真田のところへ行く」

「分かりました」

政宗と小十郎は伊達軍を二手に分けて、信玄と幸村の援軍に向か

ったのであった。

甲斐（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

国境「上」

伊達軍が佐助の伝言を聞き隊を二つに分けた頃、武田信玄率いる武田軍の本体は越後との国境へやってきて陣を敷いた。そして武田軍の陣の正面、川を渡ったところに甲斐へと進軍していた上杉軍の本陣があつた。

「上杉軍の動きはどうなつておる？」

信玄が家臣に上杉軍の動きを聞く。

「っは！ 今のところ目立つた動きは見せておりません」

「そうか」

信玄が家臣から報告を受けた頃、上杉軍の本陣では武田軍に対しての総攻撃についての話し合いが行われていた。

「これより、作戦を指示します。皆、よく聞くように」

「謙信様。どのような策で攻めましょうか？」

「無論、相手は甲斐の虎です。今まで私たちは正面からやりあつて参りました。なので、今回も真正面から参ります」

「正面からでございまするか？」

「そうです。……これがせめてもの報いです」

「承知いたしました」

「では、早速参りましょうか」

「っは！」

「全軍、突撃！ 目指すは甲斐の虎の首ただ一つ！」

そう、謙信が全軍に命令すると、上杉軍の伝令がホラ貝を戦場全体に聞こえるよう大きな音で鳴らす。そしてホラ貝の音色が鳴るとともに上杉軍は川を渡り武田軍の本陣に向けて攻めかかった。

「やっぱり正面から来よつたか、謙信よ。お主なら、正面から来ると思つていたわ」

「御館様、その様なことを申されている場合じゃござりませぬ。すぐ目の前に敵が」

「あんずるな、お主が心配がせずともそれくらい分かっておるわ。
一番隊と六番隊を上杉軍に突撃させよ、他の部隊は本陣に集中させ
よ。本陣を守るのじゃ」

「っは！ 承知いたしました。御館様」

信玄が、本陣を上杉軍からの攻撃を守るために各部隊に指示を出す。そして、突撃を命じられた一番隊と六番隊は上杉軍に突撃した。

国境「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、未定です。

国境「中」

武田軍と上杉軍の戦いが始まり、武田軍は自軍の本陣を守るためほとんどの部隊を本陣周辺に固め一部の部隊を上杉軍に攻撃していた。

武田軍と上杉軍の戦いの様子を謙信と家臣は本陣で見っていた。

「謙信様。持久戦になるかもしれませぬな」

「そうですね。本陣の周りにあれほどの部隊を集結させるとは。しかし、恐らく相手も持久戦は望んでいないはず。北からは我ら上杉軍、西からは毛利軍が侵攻して一刻も早く我らとの戦いを終わらせ毛利軍と戦っている別の部隊と合流したいはず」

「いかが致しましょうか？」

「全部隊に突撃を命じ、川にいる敵を殲滅し一気に本陣に攻撃をしなさい。さすれば、我らの勝利で幕を閉じましょう」

「はっ……！」

謙信の命令は直ちに全軍に伝えられ、上杉軍は武田軍に総攻撃を開始した。そのことは信玄にも伝えられた。

「申し上げます。上杉軍が総攻撃を仕掛けてきました……！」

「ついに、来たか。謙信」

「御館様。どうなさいますでしょうか？」

と、家臣が慌てながら信玄に聞く。

「うむ……」

信玄がどうしたらいいか悩んでいたその時、武田軍の背後からホラ貝の音が鳴った。

「どこの軍のホラ貝じゃ……！」

「御館様！ あれを見てください」

家臣が背後を指さして言う。その先を見てみると、そこには「お前ら、今こそ恩を返す時だ……！」

そう小十郎が兵士たちに言々と兵士たちは

「おお!!!」

地面が揺れるくらい大きな声で言った。そして、小十郎率いる伊達軍は上杉軍に突撃し小十郎は武田軍の本陣にやってきた。

「片倉殿。お主なぜ、ここにいる」

「政宗様の命令でやってきた。ただ、それだけです」

「そうか。独眼竜がのう。独眼竜は、幸村のそこに行ったのであるう」

「御察しの通りで。政宗様は、真田のところへ向かいました」

「そうであるうな」

そう言つと信玄は軍配を手にとって軍配を上杉軍の本陣に向け戦場に響く声で

「反撃じゃああ!!!」

と言つと、武田軍は今まで本陣を守るために戦っていたが一転し上杉軍の本陣に向けて進撃を開始したのであった。

「お前ら、武田軍の後に続けええ!!!」

伊達軍も武田軍を追うように上杉軍の本陣に向けて進撃する。

国境「中」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

国境「下」

武田・伊達連合軍が上杉軍本陣に向けて総攻撃を開始した頃、上杉軍の本陣では武田・伊達連合軍の反撃を受けて武田軍本陣を目指して進軍していた部隊を自軍の本陣に退却させていた。

「現在の状況は、どうなっていますか？」

謙信が現在の状況について家臣に聞く。

「はっ！ 現在、敵本陣に攻撃してた部隊を我が本陣に退却をさせています」

「そうですか。敵は、どこまで近づいていますか？」

「まもなく川を渡ろうとしております」

「そこまで来ましたか。直ちに、川岸に軍を集中させ敵軍の侵攻を阻止するのです」

「っは！」

謙信の命令は直ちに実行され、上杉軍は武田・伊達連合軍の侵攻を阻止するために川岸に軍を集中させた。

上杉軍側の川岸の戦いが激しさを増していた頃、武田軍本陣では「御館様。本当に行かれるのでございますか？」

「うむ。謙信とはいづれ決着をつけたいと思っていたからのう」

そう言うと言信は、自分の愛馬に跨る。

「そうでございますか。分かりました、お氣をつけて」

「うむ。本陣は任せたぞ」

そう家臣に言い残すと信玄は、上杉軍の本陣に向けて馬を走らせたのであった。

川岸では、武田・伊達連合軍と上杉軍との熾烈の戦いが繰り広げられていた。伊達軍が現れるまで上杉軍が圧倒的に有利だったが、伊達軍の登場で情勢は一気に反転し上杉軍は圧倒的に不利な状況に立たされていたのであった。

「おい。あれ、御館様じゃないか？」

「どれ？」

武田軍の兵士が、馬を走らしている信玄の姿を見つける。

「どこに行くだろうな」

「さあ。御館様のことだ、何か考えがあるんだろう」

そう言つとその横を信玄が通り過ぎる。

「俺たちも後に続くぞ」

兵士も信玄の後に続く。

「謙信様。甲斐の虎が、単騎で乗り込んできました」

上杉家の家臣が息を荒々しくしながら言つ。

「謙信！！」

謙信が後ろを振り向くと陣の陣幕を切り裂いて信玄が入ってくる。

「来ると思つていました、甲斐の虎」

「謙信よ。なぜ、西軍についたのだ？」

「民を守るためです。力を持っているとはいえ、先の大戦で我らは相当な戦力を失いました。今の状況では中立を保つのは不可能だと考え西軍についたのです」

「そうであつたか。民を守るためにのう。民を守るのであれば即時に引き上げよ、謙信」

「そうですね、引き上げましょう。これ以上の戦いは無意味です」

そう言つと謙信は、自分の愛馬に跨り馬を走らせて行つた。

「甲斐の虎」

信玄の後に小十郎が現れる。

「越後の竜は？」

「もう引き上げて行つたわい」

「そうですか。では、我々は本体に合流いたします」

「独眼竜のところへ参るのか？」

「はい」

「そうか、では我らも幸村のところへ行くかの」

上杉軍を撃退した武田・伊達連合軍は信濃で毛利軍と戦っている

政宗・幸村のところへ向かった。

国境「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

信濃「上」

武田・伊達連合軍が上杉軍に勝利を収めた頃、甲斐と信濃の国境では真田幸村率いる武田軍と毛利輝元率いる毛利軍との戦いが始まった。

「皆の者！ これ以上先に敵を入れるではないぞ！！」

幸村が戦場の最戦線に出て兵士たちの指揮を取る。

「真田幸村だ！」

「奴の首を打ち取れ！！」

毛利軍の兵士が真田幸村に斬りかかる。

「御館様！！！！」

幸村は二人の兵士の攻撃をかわし、二人の背後に回り込み自分が持っていた槍で打ち取った。

「相変わらず、頑張って戦っているね。旦那」

そう幸村に話しかけてきたのは、猿飛佐助だった。

「おお、佐助。戻ったか」

「ああ、戻ってきた。しかし、真田の旦那。結構、毛利に押されているな」

「うむ。相手も結構な数で攻めて来たからな」

「これから、どうする？ このまま戦っていたら負けるぞ」

「分かっている」

佐助と幸村がそんな話をしていた頃、佐助の伝言を聞き伊達軍を二つに分け幸村の援軍として向かっていた独眼竜の伊達政宗は、一刻も早く幸村と合流すべく馬を全力で走らせて向かっていた。

「おい。まだ、真田幸村のところにつかないのか？」

政宗が家臣に聞く。

「あと少しでございます」

「OK」

そう政宗が返事をする。政宗の背後から

「筆頭!!」

と、いう自軍の兵士の声が聞こえた。

「どうした、何かあったか？」

「筆頭、徳川の軍が西へと進軍を開始いたしました」

「西か、西のどの国に向かった？」

「それが……信濃に向けて出陣したらしいです」

「何？ それは本当か？ 面白くなって来たぜ」

そう言っていると政宗は、さらに馬のスピードを上げ幸村がいる戦場に向かった。

信濃「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

信濃「下」

伊達政宗率いる伊達軍が真田幸村率いる武田軍と毛利輝元が率いる毛利軍が戦っている戦場へ到着すると、そこには戦場に散った者たちしかいなかった。

「どうということだ。真田も毛利もいねえじゃねえか」

政宗が馬から降りて言う。

「奴ら一体、どこに行っただ？」

そう言いながら政宗が、戦場に散った者たちの横を歩いていると
「もしかして、奥州の独眼竜でござりまするか？」

と、政宗に聞いてきた。その者を見て政宗は

「お前、武田の者か？」

と言った。その者は、赤い装束で武田家の家紋が付いた陣羽織を着ていた。

「はい。幸村様に命じられて負傷者の手当をしております」

「ほう、それは御苦労のこった。んで、今幸村たちはどこにいる？」

「幸村様たちは、毛利軍を追撃しにあちらに向かいました」

そう言つと武田家の家臣は、美濃の国の方へと向かう道を指差した。

「そうか。Thank you」

武田家の家臣にそう言つと再び馬に乗り、家臣が指を指した方向へと馬を走らせたのであった。

「政宗様、本当にあの者を信じてよかったのでしょうか？」

伊達家の家臣が、政宗に聞く。

「どうということだ？」

「もし、あの者が武田の者じゃなくて毛利の手先だったらしたら、我々は毛利の思うように誘い込まれているのではござりませんか？」

「まあ、確かにそうだな。だが、もしそうだったら毛利の首を取るには丁度いい。真田との戦いで相当な戦力を失っているはずだ。だ

から、敵もそんなに力を持っていないだろう」

「左様でござりまするか」

「ああ、さっきの戦場を見たら誰だって分かる」

「分かりました。政宗様」

そう家臣が言つと、政宗はさらに馬のスピードを上げ進軍した。

「これは、一体……」

越後との戦いに勝利した武田・伊達連合軍がさっきまで政宗がいた戦場に到着する。

「政宗様は何処に居られる」

小十郎が、戦場を眺めながら言う。

「御館様」

一人の家臣が信玄の横に馬をつける。

「どうした？」

「御館様、これはもしや幸村様たちは敗走した後なのでは？」

「うむ。そう考えるのが自然じゃな」

「ここは一旦、甲斐に引き上げた方がよいのでは」

「そうじゃな」

そう信玄が言い、甲斐に向けて引き上げようとした時

「お待ちくだされ、甲斐の虎」

と、小十郎が言う。

「どうした、竜の右目よ」

「あれを見てくだされ」

小十郎が指差した方を見ると、そこには別の軍がいたのであった。その軍の旗印には、丸に三つ葉葵が描かれていた。

「徳川軍か」

信玄がそう言つと、徳川の軍から一人の者が武田・伊達連合軍に近づいてきた。

「信玄公。竜の右目」

両軍に近づいて来たのは、徳川軍を率いる徳川家康だった。

「竹千代、なぜお主このような場におる」

信玄が家康に聞く。

「毛利が信濃に進軍しているという情報を手に入れ、毛利を撃退すべく参上した。しかし、我々が到着したときには、このような状態になっていました」

「そうであるか。それで竹千代よ、幸村たちを知らぬか？」

「いえ、我々が到着したときにはもう。しかし、独眼竜なら美濃の方へと向かっているのを目撃しました」

「政宗様を見かけたのか？」

小十郎が家康に聞くと、家康は何も言わず首を縦に振る。

「そうか。甲斐の虎、伊達軍は政宗様を追って美濃に向かいます」

「気をつけて行って参れ」

信玄が小十郎に言うと、小十郎は美濃に向けて軍を進めた。

「それが信玄公、我らも竜の右目の後を追います」

「お主は、竜の右目の後を追うのか？」

「はい」

「そうか。気をつけて行くのじゃぞ、竹千代」

家康にそう言い残すと、信玄は甲斐の国へと軍をすすめ家康は竜の右の後に続くように美濃に向かったのであった。

信濃「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

美濃「上」

片倉小十郎率いる伊達軍と徳川家康率いる徳川軍が美濃に向けて移動している頃、先に美濃に到着していた伊達政宗たちは驚きの光景を目にするのであった。

「筆頭……こいつは」

「どうやら、まんまとはめられたらしいな」

そこには、先に来ていたはずの真田幸村率いる武田軍はおらず、政宗たちは四方八方、毛利軍に囲まれていたのであった。

「よくぞ、ここまで来たな。独眼竜よ」

政宗の目の前に現れたのは、毛利軍を率いる毛利輝元だった。

「おい、真田の野郎はどこにいるんだ？」

政宗が輝元に真田幸村の所在を聞く。

「あの若き虎か。あの者は我が軍の力を持って粉碎したわ。しかし、惜しくも大將には逃げられたが」

「戦場にいた、あの武田の家臣はお前のこの家臣か？」

「そうだ。我が策にはめるために置いて行っただのだ」

「上等じゃねえか。戦う甲斐があるぜ」

「では、始めるとするか」

そう輝元が言うと、毛利軍が伊達軍に向けて総攻撃を始めた。

「OK。いくぜ、てめえら！ 死ぬ気で殺り合え！！」

政宗がそう兵士たちに鼓舞し、迫りくる毛利軍に突撃した。

戦の戦況は、真田幸村率いる武田軍と戦いにより戦力を大幅に失っているはずの毛利軍が圧倒的に有利な状況にいた。伊達軍は、少しずつ戦力を失っていた。

「筆頭、こいつはやばくありませんか」

伊達軍の兵士が政宗に駆けるより政宗に聞く。

「ああ、これはやべえな。あの野郎、真田と殺り合っているはずなのにこんなに戦力を残しているとは」

「どうしますか？」

「どうするって聞かれても、こんな状況じゃ逃げようにも逃げられない」

そう言いながら、政宗は斬りかかってきた敵軍の兵士を斬った。

美濃「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

美濃「中」

毛利軍と伊達軍の合戦が始まり、その様子を毛利軍の本陣で眺めていた輝元は銀時に

「銀時、独眼竜を叩け」

「いいのか？ 独眼竜は、そこらへんの雑魚とは違うぜ。それでもいいのか？」

銀時は、以前独眼竜こと伊達政宗と刃を交えたことがありその強さは十分理解していた。

「構わない。奴は今のこの世にとって邪魔な存在だ。邪魔者は早目に消した方がよいからの」

「そうかい。んじゃ、行つてくるとするかね」

そう輝元に言い残し、銀時は愛馬に跨り政宗がいる戦場に馬を走らせた。

「HA!!」

政宗は、一刀から六爪に変え敵軍の兵士を斬り裂いていた。

「筆頭!!」

家臣が政宗に駆け寄る。

「どうした？」

「筆頭、今片倉様からの斥候が見えました」

「そうか。それで、小十郎は？」

「今、こっちに向けて馬を全速力で飛ばして向かっているらしいです。それと何故か分からないんですが、徳川軍と一緒に向かっているとのこと」

「徳川？ 小十郎のやつ、なにを考えているんだ。まあ、いい。とにかく今は、小十郎らが到着するまでなんとかして持ちこたえるんだ!!」

「っおお!!!!」

伊達軍は、小十郎と徳川軍が到着するまで全滅を阻止するため死守したが毛利軍の力は圧倒的で伊達軍は全滅寸前まで追い込まれていた。

「だいぶ数が減ってきたな。こりゃ、持たねえな」

そう政宗が戦場を見て呟いていると

「おい、その派手好きの独眼竜」

と、政宗は自分の背後からそう言われ後ろを振り向くと

「てめえは、あの時の天然パーマ」

そこにいたのは、銀時だった。

「へえ、よく覚えていたんだ。俺は、すっかり忘れられていたと思っ
つていぜ」

「忘れるわけないだろう、俺は強い奴の名前はちゃんと覚えている
んでな。それで、今日は俺と殺り合いに来たのか？」

そう政宗が言くと、銀時は刀の鞘に手を掛け

「ああ、あんたとは決着をつけたいと思っていたんでね」

「OK。……奥州筆頭伊達政宗、推して参る」

「坂田銀時、いざ、尋常に」

互いに自分の名を名乗り、二人の一騎打ちが始まったのであった。

美濃「中」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

美濃「下」

毛利軍と伊達軍による熾烈な戦いは、毛利軍優勢のままであった。
「WAR DANCE!!」

政宗が6爪で銀時に斬りかかるが、銀時は風のようにすばやく避ける。

「やるねえ、独眼竜」

「そう言うあんたも随分、すばやく動くようになったじゃねえか。
天然パーマ」

「誰が天然だ！ ボケ!!」

そう言いながら銀時は、政宗の背後に回り込む。

「おいおい、背後が隙だらけだぞ」

政宗の背中に斬りかかる。

「甘いな、天然パーマ」

斬りかかった銀時の刀の刃に、6爪の刃を合わせて防ぐ。

「俺の背中を易々取れると思うなよ」

「そうかい。てつきり俺は、易々と取れると思っていたがどうやら違ったらしいな」

「その強気が、いつまで続くかな？」

「そうだな、あんたが倒れるまで持つかな」

「上等じゃねえか。精々、楽のましてくれよ」

二人の一騎打ちが加速している中、毛利軍の本陣がある方向とは逆の方に

「やっと着いたぜ」

「あれは、毛利軍」

片倉小十郎と徳川家康率いる伊達・徳川連合軍が到着したのであった。

「片倉殿。これは相当きつい状態ですな」

家康が戦場を眺めて言う。

「毛利の野郎、俺たち伊達をよくも嵌めやがったな。お前ら、何と
しても政宗様を救うのだ」

「っおおお！」

小十郎の号令により、伊達軍が毛利軍に突撃する。

「我々も伊達軍の後に続け！」

家康も毛利軍に突撃するように軍に命じた。

「徳川、この借りはいつか返すぞ」

「別に返さなくてもよい、我らは西軍の毛利を叩きに來ただけよ」

伊達・徳川連合軍の突撃により、毛利軍の本陣では

「とうとう來たか。仕方ない、引き上げるか」

「引き上げまするか？」

家臣が輝元に聞く。

「引き上げる。武田軍に大打撃を与えた、それだけで十分である。

「分かりました。引き上げじゃ！」

家臣が毛利軍の伝令に引き上げの知らせを伝える。毛利軍は、引き上げの号令により次々に撤退を始めた。そして、撤退を知らせるホラ貝の音色は銀時の耳にも届く。

「悪いな。撤退の命令が出たらしい」

そう言つと銀時は刀を鞘に戻し馬に跨る。

「じゃあな。また今度」

そう政宗に言い残し、銀時は西へと馬を走らせて行つた。

美濃「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

入国

毛利軍の撤退により徳川・伊達連合軍は勝利した。勝利した徳川・伊達連合軍は、徳川軍の総帥徳川家康が今回の戦で負傷した兵士の受け入れを政宗に申し入れ、政宗はそれを承諾し両軍は三河へと移動していたのであった。

三河へと移動の途中

「政宗様。この度は、参陣が遅れしまい申し訳ありません」

政宗の隣にいた小十郎が、政宗に謝罪をする。

「どうして謝る？ 謝る必要なんかないだろう」

「もう少し早く着いていれば、あれ以上の犠牲を出さずに済んだと思いますして」

「まあ、今回は俺にも責任がある。まんまと毛利に策に嵌ったのが運の尽きだ。まさか、毛利の野郎があんな策を出してくるとは思っていもなかった」

「これかは、もっと奥深く考えて行動しないといけませぬぞ」

「ああ、分かっているぜ。熱くなり過ぎた、COOLに行かないとな」

「そうですね。それで政宗様、これからどういたします？」

小十郎が今後のことについて聞く。

「どうするも何も、今は徳川に厄介になるしかないだろう。半分ぐらい、いなくちまったからな」

そう言いながら政宗は、後ろにいる自軍の兵士たちを見る。

「今回の戦で、多くの犠牲と負傷者を出しましたからね」

「ああ、だから今は負傷している奴らの手当てが何より先だ。負傷しているまま奥州に帰らす訳にもいけないからな」

「では、三河に着き次第負傷していない者たちを集めて軍議を開きますか？」

「OK」

「っは！」

入国（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

会談

伊達軍が三河の国に入国した頃、西軍の総大将石田三成の居城である大坂城には打倒徳川に向けて石田軍と同盟をしていた島津軍・大友軍・長曾我部軍・上杉軍・小早川軍が集まっていた。そして、各軍の総大将が徳川家康との決戦を挑もうと三成との軍議をやっていた。

「この度は、我が居城にお集まり頂き感謝いたす」

三成が各軍の総大将に頭を下げる。

「いよいよ、決戦ですか」

上杉軍の総大将上杉謙信が言う。

「決戦か。腕が騒ぐぜ！！　なあ、鬼島津さんよ」

長曾我部軍の総大将長曾我部元親が島津軍の総大将島津義弘に話しかける。

「そうじゃのう。西海の鬼」

島津が酒を飲みながら言う。

「雑談はそれくらいしておいて。これより軍議を始める」

そう三成が言うと石田家の家臣が日本の本の地図を持ってきて床に広げる。

「これより、打倒徳川に向けて動く。まず最初に、先の毛利軍の東国遠征で甲斐の武田軍・奥州の伊達軍に大きな損害を与えることができた。よって、この両軍はしばらく動けないであろう」

三成が地図に描かれていた奥州と甲斐の国を指差して言う。

「そしてここからが本題である。今から全軍出陣し家康の居城がある三河へ攻め込む」

「ほう。全軍で三河を攻めますか」

と、謙信が言う。

「ああ、家康も先の戦いに参加し大きな損害が出ていると毛利軍から報告を受けている」

「そうですか。徳川も参加していたのですか。それで、先方は誰が務めるのですか？」

「先方は、上杉軍・小早川軍。その次は、長曾我部軍・島津軍である」

「そして、後方は石田軍・大友軍か」と、元親が言う。

「そうだ。この布陣で三河へ攻め込む」

「そう三成が言うのと、各軍の総大将は次々に

「分かりました」

「おう、分かったぜ」

「分かったわい」

と、言った。

「では、軍議はこれで終わりとする。出陣は翌日の早朝である」

三成が出陣の時刻を伝えると武將たちはその部屋から出て行った。そして、誰もいなくなった部屋には三成と三成の家臣である大谷吉継の二人だけ残っていた。

「大谷よ。あれでよかったのか？」

「ああ、あれでよい。毛利からもその様にせいと聞いていたからのう」

「毛利の策には裏があるかもしれぬぞ」

「あんずる事はない。毛利はその様なことはせぬ」

「どこまで信用していいのやら……大谷、毛利のことは頼んだぞ」
そう大谷に言い残すと三成はその部屋から出て行った。

会談（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

加盟

中国地方の覇者毛利輝元の進言により西軍は、徳川家康の居城がある三河へ進軍すべく出陣したのであった。そして、この動きは直ちに家康に伝えられたのであった。

「そうか。いよいよ動いたか」

「はっ。現在、先方の軍勢が間もなく南近江に入ると忍びの者が申しております」

「分かった、下がっていいぞ」

「はっ！」

家康にそう言うと思ひから知らせを受けた家臣は、その部屋から出て行つた。家臣が部屋から出て行つた後、家康はすぐ隣の部屋と向かつた。そこには、独眼竜こと伊達政宗と片倉小十郎がいた。

「独眼竜。いよいよ西軍が動き出したぞ」

「AH、さつき聞いたぜ」

「ほう、盗み聞きでもしていたのか？」

「そう言いながら、家康は政宗の前にしゃがんだ。

「そんな訳ねえだろう、お前の声がでかいんだよ」

「そうか。やはりわしの声はでかいのか。まあいい、それで独眼竜よ」

「何だ」

「お主、わしか三成どつちに着くつもりだ？」

と、家康がさつきまで冗談染みた目つきをしていたが本題に入るとその目つきは真剣な眼差しに変わった。

「俺はどつちにも着く気はないぜ。けど」

「けど？」

「今回の借りもあるし、いつまでも借りを返さないっていうのも悪いしな。伊達は、徳川に手を貸す。小十郎、奥州にいる軍を三河へ呼べ」

「承知いたしました。政宗様」
そう言つと小十郎は直ちに家臣を呼び政宗の命令を伝えた。

伊達軍が東軍と手を組んだ頃、東国遠征中の毛利軍は美濃に留まっていた。

「今日も綺麗だな」

銀時が一人で酒を飲みながら、夜空に輝く月を眺めていた。

「一人で酒を飲んでうまいか？」

と、背後から聞こえたから後ろを振り向くとそこには

「ヅラ。なんでお前がこんなところにいるんだ？」

「ヅラじゃない桂だ。毛利から離れた後、俺は諸国を歩きまわってたまたま美濃にいただけだ」

「で、どうだ諸国を歩き回って」

そう言いながら桂にも御猪口を渡して酒を注ぐ。

「相変わらず、戦は絶えぬものだな。豊臣が死んでも、何も変わってはおらぬ」

銀時に注いでもらった酒を飲んで言う。

「そうかい。結局、人が死ぬのは世の定めか」

「定めね。お前はどうかんだ銀時？ お前は、人を殺している立場じゃないのか」

そう桂が聞くと、銀時は御猪口に残っていた酒を全部飲み干して「ああ、そうさ。けど俺は、ただ人を殺しているんじゃない。何かを守るために戦っているだけさ」

そう桂に言つと銀時は、その場から去って行った。

加盟（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

三河

徳川家康の居城がある三河へ進軍している石田三成率いる西軍、その侵攻を阻止すべく徳川家康は東国の大名たちに三河への援軍要請を記した書状を書き送った。その結果、徳川家康の元には東国の大名たちが次々に集まって来たのであった。そして、家康は集まった諸大名を招集し軍議を始めたのであった。

「この度は、それがしの呼びかけに応じ頂き誠に感謝申し上げます」

家康が、諸大名に頭を深く下げる。それを返すように、大名たちも頭を下げる。

「今まで多くの血が流れて来た。織田・豊臣は、武力によって天下を統一しようとしていた。しかし、それではダメだ。武力では、天下は治まらん。だからわしは、絆の力で日の本を統一する。共に手を取り合って、日の本を総べようじゃないか」

そう家康が言くと、関東を統治する北条氏政が

「そうじゃ、家康殿言う通りじゃ」

「氏政殿、感謝申し上げます」

「けど、今はそんなことを言っている場合じゃねえだろう？」

と、政宗が言う。

「左様、西軍が今三河へと進軍している。ここで負ければ、元も子もない」

常陸を統治する佐竹義重が言う。

「分かっておる。今ここで、西軍に敗北すれば無駄な血が再び流れるであろう。だから、今回の戦は天下分け目の戦いである。そこで、全軍で西軍に立ち向かう」

「全軍で立ち向かうのか」

加賀の前田利家が、驚いた表情を見せて言う。

「そうだ。そこで先方は、前田殿・氏政殿に任せたいが」

そう、二人に聞くと二人は

「承知いたしました」

「お任せあれ」

「次に、独眼竜・武田殿にお任せたい」

「OK」

「全力で戦ってみせる」

「そして、残りはそれがしと共に参る。出陣は二日後、関ヶ原の地で迎え撃つ」

そう家康が言うと、諸大名は頷き軍議は終わったのであった。

軍議が終わって二日後、家康率いる東軍は関ヶ原へ向け出陣したのであった。

三河（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の第73話をもって2011年の投稿を終了いたします。次回の投稿は、2012年1月7日になると思います。

作戦

徳川家康率いる東軍が関ヶ原に向けて三河を出陣したという知らせは、直ちに西軍にも伝えられた。その知らせを知った西軍の総大将石田三成は、家臣の大谷吉継を呼び寄せた。

「大谷よ、東軍のことは知っておるな」

「無論。毛利から聞いたわ」

「なら話は早い、大谷よ。毛利からは何か聞いているか？」

三成が大谷に聞く。

「聞いておるぞ。毛利は関ヶ原で東軍を叩けって言っていたぞ」

と、吉継が薄気味悪い声で笑いながら言う。

「そうか。では、毛利の言うとおり関ヶ原で叩く。大谷、策はあるか？」

「そうじゃのう」

そう言いながら、大谷は床に関ヶ原の地形が描かれた地図を広げる。大谷が地図を広げ終えると三成は地図を跨いで吉継の正面に座った。

「関ヶ原は周りを山で囲まれておる、それを利用する」

「どのように利用するのだ？」

「関ヶ原を囲んでおる山々に我々の軍を配備させる、そして平野部に東軍を誘き出し囲い込む。後は一斉に攻撃をするもよし、じっくりと時間をかけて少しずつ攻めるも悪くはない」

「囲んで東軍を討つか」

「これが一番良い策だと思うが」

「分かった、この策で行く。大谷よ、直ちに全武將に先ほどの策を伝えて参れ」

「そう言い残すと三成はその部屋から出て行った。」

「主のためなら……」

大谷吉継の策は数分後、全武將に伝えられ西軍は関ヶ原に移動し

関ヶ原を囲む山々に軍を配備したのであった。

作戦（後書き）

新年明けましておめでとうございます、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の日曜日になります。

（前回、予告していた投稿日が一日ずれていました。深くお詫び申し上げます）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588m/>

戦国乱世

2012年1月8日11時47分発行